
mouth putting of the earth

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

mouth putting of the earth

【Nコード】

N1475W

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

あらすじはこれから書く。

天に居住を構えているであろう神の人。

私はずっと名を絶えず呼び続けているではありませんか。

はりさけそうなのに。このソファはもう埃を被っていますし、金の鶴は色彩を落としてしまってるが為に陳腐な作り物に見えます。生きていたこれを最後に眺めたのはずっと以前のこと、私はずっとここで死んだ鶴と、溶ロケタゼりい状として相對していますのが、かなしいです。

今でも遠く昔のことを思い出します。私がまだ花や香りが漂うゲンセイという所で、性別を女として人間の女の子だった時のことを思い出すのです。本当は思い出したくないんですけど。

おもいだしちゃうんです。かなしいです。鶴さんは死んでいるから、慰めてくれません。だめな鶴ですよ、金の鶴さんは。だからあなたに聞いてもらいたいんです。少しかなしい話なんですけど……いいですか？

本当はあまり話したくないんですけど。思い出したくないんですけど。でも、なんていうのかな……話さなくちゃいけない気がします。だから聞いてくださいお願いします。

……聞いていただけですか？

そうですね。この場所にいてくださるといことは、聞いてくださるんですよ。わざわざ確認されるの、うざったいですよね、ごめんなさい、そして、

ありがとうございます。ぺこり。

ええと、それじゃ早速話したいと思うんですけど……私あまり人とお話するのは上手じゃなくて、しかも今は溶ロケタゼりい状だから舌とか噛みやすいんですよ。頭が時々、水っぽくなってボーッとしちゃう時もあるんです。だから途中で話が脱線したり、支離滅裂になっちゃったりするかもしれません。その時はごめんなさい。

先に謝っておこうかな。ごめんなさい。ペこり。ペこりペこりペこり。えへへ、たくさん間違っちゃいそうなんで今の内にたくさん謝っておきました。謝謝謝謝謝謝あああごめんなさいもう間違えてしまいました。脳が、脳が水っぽくて駄目なんです。調子が悪いようです。思考が雲が空を拡散するかのように纏まらないし、右眼辺りが蛆虫が沸くかのように沸騰して喚きます。申し訳ございませんぬぬ。ええと、その綿の引き出しに金鎚が入っていますので、それで私私綿私のことを叩いてもらってもよろしんでございましょうか。どうにも舌が回りませんし脳がえんがちよです。躊躇しなくていいんですよ。このままでは夜さえも越えるぐらい長引くかもしれぬ、私のかなしいお話ができなくなっちゃうかもすれないんでしかりや！ああ、あああ、ごめんなさい。嘔み過ぎでしゅね、あああ、あああ、だめでしゅだめでしゅこれはだめでしゅしゅしゅしゅしゅええと、お願いします早く私をその金鎚で叩いてくだされ！脳味噌辺りをぼかすと一撃殴ってくださいれば大丈夫なのでしゅ。い、急いでください。もう語尾とかかめちやくちやで恥ずかしくて思考も纏まらないから恥ずかしろ。

「もろれふう！」

ありがとうございます。少し強く叩きすぎだったような気もしますが……いいえいいえ、嘘ですごめんなさい、ええとおかげさまで本当に助かったのです。ありがとうございます。って、あなたに時間を割いてもらうのはこれからでしたよね。私の調子が悪いせいで無駄なお時間を取らせてしまって、本当にごめんなさい。溶口ケタぜりい状の私は、普段は自分で脳味噌を叩くんですけど、今日はあなたがこの場所にいてくれるおかげで、自分で自分を叩くなんて痛々しいことをしないですんだのです。あ、金鎚はその引き出しの中に戻してください。ええ、その血みたいなものは気にしないで下さい。いつものことなんです。

さて、本題に入りましょう！時間泥棒をして申し訳ございませんでした！

ここからは語り部な感じになります。
昔々ある所にい。

自分を善だと勘違いしている浅はかたる邪悪と、自分が悪だと認識しているにも関わらずそれを改善しようとしないうる邪悪、という二種類の邪悪がいました。

でも勿論、真実はいつも二つです。邪悪が必ずしも悪とは限りませんように、彼らの善悪も間違いなくそうだと言い切れる評価ではありません。つまり、これは私の主張、です。

私はその二つを邪悪だと認識している女の子だったのです。何故邪悪だと認識していたのか。

一言で言うと、嫌いだからです。反吐を頭頂部の天辺から吐き落としてやりたい程度に、嫌悪の情を二つに対して抱いていましたから、邪悪を滅するであろう白光を発動してやりたかった。

ではどのように二つの邪悪が悪だったのか。嘘か本当かはあなたが判断してください。私は嫌悪をそれらに抱いているが故に、その評判を落とす嘘を平気で付くでしょう。私の正義、私の欲望を満たす快楽を、口から紡ぐ虚偽が為してくれますから。

ぜん邪悪は人殺しです。毎日毎日くだらない趣味に心を吸われていて、そしていつも見えない透明なモノと闘っているせいでご機嫌ナナメ。自分の悪態を悪態だと認識せず、正義の鉄槌だと誤認識しておりますが、ぜん邪悪は何故あんなにも自己評価が高く、なおかつ世界に対する認識をあんなにも確かにしているのでしょうか。世界認識が確かだということは成長しない頭のカタブツだということとイコールなのを、ぜん邪悪は知らないで真っ直ぐな瞳。動かない心。信念と呼べるほど柱がしっかり構築されているわけでもなく、ただふわふわと感じるままに発しているに過ぎない心からこぼれる嫌気を解消してくれる言葉が、汚い唇から吐息と混じってゲンセイで五月蠅く響いております。私はだからそれを人殺しだと呼称します。世界を殺すモノだと認識します。

そこからは新たな希が生じない。岩としてそこに腰を下ろしたま

溶溶溶けたんです。

……ちょっと取り乱してしまいました。

もうすぐ終わります。

終わりにしてしましましょう。

憎しみは愛です。このように惑星と惑星が口付けをし合うことで私がどれだけ邪悪を愛し、そのために憎しみというものがいかに必要になるのかということ、証明できるかもしれない。できてどうなる、というわけでもないんですけど、きっと天に住まう神の人も許してくださいましょう。

地球は母なる星と呼ばれることがあるでしょう。

なら父がいるのが自然ではありませんか。

知りませんでした？地球にとって対となる惑星というのは、この宇宙に存しているのです。

その名を”閃球”と言います。初めて聞きましたでしょう。座標 Y F F F R A P I D 3 6 8 9 にひっそりと漂っていたのを発見して自らの名前を隕石の衝突によって忘れてしまったそうなので、私が命名してあげました。我ながら良いネーミングセンスをしていたと自惚れます。閃球ですよ閃球。

私は閃球にデンプを送信することにより磁力も同時に発生させていますが故に、

閃球はもうすぐ地球を迎えにやってきました。そして久しぶりに出会うのだから、挨拶に口付けの一つでも交わすのでしょうか、きゃあっ、恥ずかしい。

ぜん邪悪とあく邪悪が屯する地球の表面から、人々はやがて地球を迎えにきた閃球を見上げるようになります、まるで雲に紛れながらもいつもそこにある月を見上げるように、空に蒼い星を見つけて指を指すでしょう、あれは私たちの住まう星の写し鏡のようだと戸惑うの。

人々は潰れたくない、と焦って別の大陸に逃げていくのだけれど、結局どこに逃げたって地上は続いているんですもの、もがいたって死ぬだけ。津波、噴火、竜巻、ああどんな災害が捲き起こるのでしよう……かなしいことだけど、彼らは閃球が口付けをするその直前に気が付くの。ああ、私達が住んでいた星というのは、こんなにも蒼くて大きいものだっただんだ素晴らしいなあ美しいなあ。恐怖やかなしみは消えないだろうけど、寂寥のような気持ちにも晒されて、彼らはきつと恍惚とした気分追いやられるに違いないの。それってとても綺麗でかなしくて beautiful!!。そして潰れると同時にその口付けが交わされる瞬間の、生々しい音が地上中に響き渡るの。それが合図となって全てに亀裂が入ってばらばらに砕けていくから、全てが肉体を滅ぼして、組織を崩壊させてしまう。私のこの溶ロケタゼリい状の身体も、その時に弾け飛んで意識が消失するの。それが死ぬってこと、世界が終わるってこと。ああ、楽しみだなあ、まだ夜は明けないし、閃球も夜空には窺えないけれど、やがてきつと彼は空にパツと現れてくれる。その時のみんなの驚き、喜び、それがやがて憎しみ、かなしみ、恐怖に染まって踊り狂って果てていく。

その時まであなたは私のかなしい話を聞いててくれるんだよね？
こんな身体の私と一緒にいてくれて、ありがとう。

その時がくるまで、ずっと一緒にいてね。お願いだよ。
じゃあ次は何について話そうかな。休憩したくなったら言ってね。ベッドの一つくらいあるんだから下着になつて、熱帯夜の時をやり過ごしたっていいんだよ。あなたが眠りについたと思わしき刻になれば溶ロケタゼリい状の私は眠っているのを偽装していた身体を、ゆっ、く、り、と起こしあなたに近づいて上から覆い被さるの、躊躇も無しにね。そしてトロケルの。

この身体であなたを招待して快樂を与え続けることは淫らな気をあたり中に散布してくれるんですね。私はあなたに覆いかぶさったままその淫らな気をトロカシ続けますから、あなたは下着の中の

物を剛直させて、下着から突き破らせてくれる程でもいいんですよ？そして私はその淫棒にも快楽を与え続けることによって、結果、あなたが精液をその達するに任せるがままに発射するのを身体に受け止めて熱を感じします。すると白光をそこに見れるの。だから私は昂ぶり白光を身体に広げることと淫靡な汗を体表から零し、あなたの穴という穴からそれを吞ませることでしょう。でもそれは一瞬のことですぐに暗闇が空から落ちてきて私の精神を押さえつけて鬱屈させるんです。鬱屈を迫るんです。地球にさえ対となる存在がない、閃球という名前まである相手がしっかりと口付けを迫ってやってくるというのに、溶ロケタゼリい状の私には何があるって言うんでしょうか…教えてください…今先ほどの猥褻な言葉の羅列をしたことを謝りますから、どうか、この哀れでかなしい溶ロケタゼリい状の私に教えて…：…かなしいんです、かなしいんです…：…なきたいのに、どこから涙を流せばいいのかわからないんです。目がどこにあるのかわからないのに、あなたを見る事が出来るし、閃球を呼ぶこともできるんです。あなたの対となる地球はここにありませんよ。つていうデンパを送ることも出来てしまうんです。

それがかなしいんです。

わかりますか、この気持ちか？

この身体に邪悪のせいで変えられてしまいましたでしたが為に、世界にある全てを私は”対”として存在しているのだと気が付きました。だってそうでしょう、生き物には雄と雌があるのですよね。でも私はただの溶ロケタゼリい状態で、こうして言語を紡ぐことだって出来るのに、どこに自分の口がついているのかもわかりません。ただのぜりいですから。私は一人です。私は孤独です。私はかなしいんです。

だからあなたに、私のかなしい話を、まだまだ聞いてもらいます。

お客様、お帰りになることは許しませんよ。

惑星と惑星が口付けをしあうその時まで、ずっとここにいてください。何回もの昼と夜を繰り返してもここから離れないでください。

もし離れようとするならば、まずは、あなたの足をちぎりとつてしまいます。片足でケンケンで逃げようとするあなたの、もう一本の足も噛み千切って、あなたを地面に倒れさせます。筋肉が断裂されてピンク色の筋と、乳白色のような骨が露出して哀れなあなた、そして血がだらだらと流れているあなたをさらに追い詰めるために、口に私の一部分を突っ込ませて、喋れなくしてやって、呼吸困難に陥って苦しそうにしているその姿に、悪態を何度でもついてあげます。そして疲労しきったあなたをベッドに横たわらせて、シーツをあなたの足から流れる血で真っ赤に染めてから、私の本当の愛という奴を教えてあげます。本物の愛という奴を、徹底的にあなたに刻み込んでから、死ぬまで解放してあげません。わかっていますか。わかっていますよね、言葉、伝わりますよね。

だから逃げないで下さい。私、そんなに荒々しい愛を見せ付けるのは好きじゃなくて、スマートにそれを伝えていきたいんです。真つ当な私の愛をあなたに伝えて、全てを空回りさせたいんです。だって私には対となるものがないんですから、空回りするのは当然ですよ、いくら必死になって伝えても、教えようとしても、この身体には人間としての意識があるだけで、実際はただのぜりい状の異形でしかないのだから。口付けなどもつてのほか。愛を伝えるなど論外。

真つ当な身体あつてこそ、モノとモノは理解し合えるのだと思えませんか？

さあ、まだまだお話は続きますよ。欠伸なんてしないでくださいね。大きく口を開いたせいで見えるその喉手。口に、私のぜりいを突っ込まれたくなければ、欠伸なんてする暇は無いつてわかってもらえるんでしょうかねえ。ああ、なんだか鬱屈した口調になってしまっています。

あ、星がいま動きました。宇宙の隅で動いています。座標YFF FRAPID3689で。

閃球は私のデンプを糧にして、宇宙を旅しているようです。

ああ、ろまんちつくだなあ。ああ、素敵なことだなあ。ああ、対があるというのは良いことだなあ。

さて次は何のお話をしましょうか。かなしいお話だからって、飽きないで下さいね。その無限が訪れる刻まで、しばしの遊戯を楽しみましょう。ああ神の人よ。天に住まう彼の人よ。なんてあなたは皮肉な運命をこの世に紡がせるのでしょうか。惑星と惑星が触れ合うその時に、全ての生命が宇宙に吸い込まれていくなんて、愛を通り越して狂氣的、憎悪に満ちる悪行ではありませんか。ああ神の人はなんて大仰なことを為し、そしてある種、無情でもありません。せめて祈りだけをしてここから立ち去ろうではありませんか、無意味だとしても、せりい状だから手の平を合わせることもできないといえども、自己満足をすることは無意味ではないのですから。

M o u t h p u t t i n g o f t h e e a r t h .

T A G S I G N

用を足すためにトイレに入ると、PCの稼働音や空調の音などで喧しかった音が遮断されたせいで、遠くで鳴り続ける雷鳴の、その頻度が多いことに気が付かされる。ゴロゴロ、と地を揺らすような轟きを何度も繰り返しているというのに、外は雷が鳴るような天気ということは今になって知った。diveに没頭し過ぎていたせいだ。今日はほとんど一日中、PCとsympathyしていたから。TAGSIGNは用を足し終えてチャックを閉めると、水を流してから手を洗う。ハンドドライヤーで多少水気を撥ねてから後、胸ポケットより黒のハンカチを取り出し水気を完全に取り除く。ハンドドライヤーのぶおおおんという稼働音が静まってから、再び雷鳴の轟きが地上を音で揺らし、そしてTAGSIGNの鼓膜を震わせる。その震えが止まったあたりに、木製らしきドアノブをひねってトイレから抜け、通路に出る。

通路には様々な彩色で光粒が不規則に踊っていて、気だるそうにのそのそと歩くTAGSIGNの疲労している両眼には煩わしい。緑のヒカリ、青のヒカリ、赤のヒカリ。どれもが刺激的に眼を痛めつけてくる眩しさ。だから腹が立つ。いらいらする。

「疲れてるんだよなあ……！」

ワインレッドという配色の壁に拳を叩き付けると、ぶよん、と柔らかい反応を返されて、拳はその表面にぬるぬるとした感覚だけを残す。TAGSIGNはそうなることはわかっていたのだが、いらいらは余計に募る。両眼にヒカリたちはこびりつくままだ。通路は長い直線であるから、まだ歩かなければならない。

その倦怠と苦痛を紛らわすために、彼は歌を歌う。幼い頃に三人でよく歌った”起源”の歌。

ラララ……

TAGSIGNはその歌のメロディーだけは一生忘れない。歌詞

などは遠い昔に置いてきてしまつて覚えていないし、幼い頃に良く一緒にいた二人の名前も顔も、もう思い出すことは二度と無いが、この”幼い頃に三人で良く歌った歌のメロディー”だけはTAGSIGNがTAGSIGNである限り忘れない。逆に言えば、このメロディーを覚えているからこそTAGSIGNはTAGSIGNでいられる、ということでもあつた。故に、”起源”なのだが…。

ラララ……ラ……？……？……？……！……

喧しいヒカリが不規則に泳いでいる通路の隅っこで。TAGSIGNは呆然として立ち尽くした。

(何だ…今は……………)

眩暈と吐き気が同時に襲い掛かってきた。口元を押さえながら、もう一度トイレに駆け込んで便器に嗚咽する。胃や食道が締め付けられて、電流が一本足元から天辺まで突き抜けて痺れる。それに伴つて体は痙攣して、電流が走つてふるえは止まらず、内臓がどくんどくと脈打つようでキモチワルイ。気が付くと嘔吐していて、口の中が酸っぱくなって最悪な思い。

TAGSIGNはしばらくの間呼吸を荒くして、雷鳴が聞こえるトイレの中で、信じられない、信じられない、信じられない、信じられないことだ、と何度か繰り返す。

雷がゴロゴロと遠くで鳴っていたのが、近くで鳴っているのだと錯覚を起こす。いや、自分に落ちてくるのではないか、貫かれるのではないか、というふわふわとした錯覚に囚われて、背筋が少し震える。酸っぱい匂いを口内から消すために、気休めに唾を何度か吐いて、もう一度水を流す。

「くそ！ 何だ今のは！ なんてこんなことが起こる！」

抑えられない憤りを抱えながら、片手で頭を抑えた姿勢でTAGSIGNは通路に出る。ヒカリが錯乱して遊泳するのが、煩わしくて、心がざわつく。

TAGSIGNは緑のヒカリを憎々しげに見つめた。

(あんなことは初めてだ。起源が揺らぐなんてことは)

起源があるから線は揺らぐことなく繋がっているのに。さつき間
違いなく……………。

メモディーを一瞬、忘れた。

忘れたのはほんの刹那の間だ。コンマ一秒にも満たない間のこと
だろう。

だがTAGSIGNは確かに先ほど、戸惑ったのだ。次の音程を
口から紡ぐのを躊躇し、喉に息吹がつかえたせいで空気だけが漏
れ、メモディーは流れなかった。

そんなことは今まで一度だって無い。これは初めてのことだ。

(やはり最近は何かがおかしい。diveして調査を深めなくては
ならない……………もしこれが何らかの問題が起きる予兆だとしたら、僕
の予想が正しければ、大変な事態になる……………)

TAGSIGNはずり落ちそうになつたふちの薄い眼鏡をくいつ
と上げてから、自分の着用している私服に嘔吐の跳び返りがついて
いないかをチェックする。青いヒカリや赤いヒカリが不規則に飛び
回る照明の中ではわかりづらくはあったが、目や手で入念に確認し、
服は汚れていないかとわかると、少し安心する。データ支給された
ばかりの私服を汚すのは、好ましいことではない。

乱雑しているヒカリの中を、ふらつきながらも彼は歩いていく。

理知的だが冷酷にも見える雰囲気、エリートですと紹介すれば
誰でも信じそうな、そういう賢そうな全体像を持つ男が、現在のT
AGSIGNだ。

一般人であることを装いつつ、長い通路を抜けると、彼は縦横に
広いロビーに出る。

ロビーでは、仄かに蛍光しているマリンプールの照明が床で発光
している。また、奥にあるカウンターにも文字などを書くことが出
来るようにマリンプールの明かりが灯っている。

ここら一带にあるDC(Dive Cafe)の中では、ここは
彼にとつては一番お気に入りのDCだ。しかし、ロビーの照明の雰
囲気は良いのだが、先ほどの通路の照明のやり方は、あれは刺激が

強すぎるな、と、カウンターに近づきながらTAGSIGNは思う。クレーンでもつけてやるか、と喉の辺りで溜まっている胃酸らしきムカムカに襲われながら思案するが、目立つ行為をするのはタブーだ。ただでさえ今、ありえるはずの無い揺らぎが起きたばかりの現状で、そんなことで時間を割く暇は無い……。

（飲み物の一つでも注文してから、*divide*を再開することにしよう。口内に残ってる酸っぱい匂いは奥に押し込めるように、甘い炭酸飲料を頼もうか…苦味の強いエスプレッソという手もあるが……）
考えている内に、黒メイドと黒執事の姿が視界に大きく映り、互いが互いの姿を察知する位置にまで近づいた。TAGSIGNは目の前にいる黒メイドに声を掛ける。必要な言葉だけ。

「メロンソーダのMサイズを一つ」

「はい。ご注文、承りました」

黒メイドも必要な言葉だけ返す。その後に注文者から背を向け、ガラスのコップに氷を入れて、緑色の炭酸飲料を注ぐ。

黒メイドがその動作をしてる間、TAGSIGNは暇つぶしに思考を働かせる。

黒メイドと黒執事はここのDCのスタッフだ。その全てが容姿端麗であり、かつ知的な雰囲気さえも携えている為に、カウンター内で数人の彼らが並んでいる姿を見るだけでも、はじめてここを訪れる客人は息を呑むことになる。ある種敷居が高そうでもあるが、それらは万人を受け入れるために簡素な接客をする。半ば機械かと相手に錯覚を起こさせる程の言葉少なさ、無駄の無い訓練されたのであろう動き、これらが結果として客人に息を飲ませはするがカウンターに声を掛け易い状態を作っている。人は人と接する中で見下されることや無碍に扱われることを嫌うが、そういったことを確実にしなすような無機質さは、その空間に神妙たるものを作りつつも人を選ばない。故に、ここのDCは繁盛しているらしく客が多い。美しい黒メイドと黒執事の集団は、そこにいるだけで圧倒的な価値を他者に感じさせる。そのスタッフの存在が、その自体がサービ

スとなつてゐるために、人々はそのDCの気前の良さに惚れ込み、足を運び、リピーターとなるのだらう。勿論スタッフと客の間に交流は無い。あるのは無機質な最低限の応対と、静寂たる視線の交錯だけだ。それでも人々はこのDCのサービスに満足するのだから、つまりこのDCをプロデュースした人間は才能があり、成功した、ということでもあるのだらう。

まあ実際、儲かつてるのかどうかは、この経営事情を知らないのだからわからないのだけだ。

コトン。

TAGSIGNが暇潰しの思考を終えたのと同時に、彼の目の前にメロンソーダは置かれた。

料金が請求されるのでpersonal cardを渡す。しかし更新しなければ使用は出来ません、と告げられて後、即座に、こちらにお名前を書いてくださいれば更新は可能ですと告げられる。

一度も惑うこともなく対応をする相手の、本当に機械のような動作を目に焼き付けていたくなる。肌にはニキビひとつさえも無く、肌は艶やかで、線を引いたかのような唇、頬骨の位置に一つだけあるほくろ。

TAGSIGNは何時の間にか見惚れていた。その様子を黒メイドは、不思議そうにもせず、一切表情を崩さないで眺める。それに気がつかされて恥ずかしくなり、TAGSIGNは言葉短かに返事をする。

「では更新を」

「ここにお名前を記入していただけますか」

TAGSIGNの丁度右手から書きやすい位置に、デジタルの平面が現れる。その平面の端にNameと記されているので、その隣にTAGSIGNは人指し指で名前を記入する。

この世界でのこの地区で通用する、事前にインプット済みの怪しまれることのない名前。脳味噌にそれが浮かぶと同時に文字としてその平面に書き記す。

『丸ノ倉 おんどれる』

その名前を書き終えてから、TAGSIGNは何とか表情には出さなかったが、焦りが凄まじくなって背中から汗が噴き出るのがわかって空調がその背中に冷たい。丸ノ倉 おんどれる。そんな名前があるはずがない。どこかでウイルスを脳内に積んでしまったのか……！

黒メイドはこれを冗談だと受け取ってくれるだろうか。それならもう一回書き直すことができるはずだ。しかしまた同じように変な名前を書いてしまう可能性がある……：……ていうかこの世界での自分の身体が持つてる名前くらい事前に確認しておくべきだった。脳が自然とそれが必要な時には起動してくれると思っていたからと言って、油断しすぎていた。

検索……再検索……

結果……丸ノ倉 おんどれる。

（くそ……！ この身体、新しいものに変えてもらうなりの対処をしてもらわなければ駄目かもしれない……丸ノ倉 おんどれる。なんて、なんて、ふざけた名前だ……！ 間違いなくウイルスによって脳内情報が改ざんされている証拠じゃないか、これは……！）

以前diveした時に油断していたということか、と己の失態を悔やむが、ふと黒メイドの右胸元についている名札を見ると拍子抜けする。

その名札には、

『戸奴ノ上 がんまれい』

と書かれていたから。吹き出しそうになるのを堪える。

（この連中のネーミングセンスの可笑しさは報告の必要があるんじゃないのか……？ いや、僕以外にも刻跳者はいるんだ。もうこれについては報告されているだろう……：……ていうか僕はこの世界にアクセスして数日が経過しているというのに、今になって名前することに気が付いたのか……）

TAGSIGNは、自分は刻跳者としての能力が欠如しているの

ではないか、と黒メイドの胸元の名刺を見ながら憂う。

黒メイドはデジタルの平板を指でいじって、何やらの事務処理をこなしてくれている。一分程度、メロンソーダに一度だけ口をつけ待っている、「更新が滞りなく完了しました」と戸奴ノ上 がんまれいが言う。

「ありがとう」

TAGSIGNは礼を述べる。そしてpersonal cardを渡してもらう。

「他にご用件はございますか？」

と問われるので、大丈夫、と言ってメロンソーダを手を取った。

そして先日から利用させてもらっているdive特化のPCがある個室に行こうと歩を進める。

が、何か、いや人、だ、ぶつかる。メロンソーダが波打ちこぼれる。相手の服を汚してしまうぞ、と察知しながらもメロンソーダが相手にかかってしまうことを防げなかった。だがその相手は服を着ていなかったので問題はなかったのだが。

ボディビルダーかと思えるほどに筋骨隆々で背の高い男が、一糸も纏わぬ姿で仁王立ちしている。その男の下腹部辺りに氷でぎんぎんに冷えているメロンソーダをかけてしまった。かけてしまったことを謝るとか以前に、こいつは、どういうことだろう、この状況はどういうことだろう。

TAGSIGNは呆然とする。啞然とする。そして彼のイチモツが見えなくなるようにモザイク処理を脳内で施す。そしてこの大男、何者だ、とそいつの顔を見上げるが見たことの無い顔だ。

見下ろす側のボディビルダー大男は、かかったメロンソーダを拭くこともせずTAGSIGNを見下ろしている。明らかに変質者だと思える格好をしているというのに、堂々としているのが彼の異常性をTAGSIGNに想起させる。

ロビーは照明が仄かであるため人の姿が見え辛いところだが、それでも全裸の大男というのは目立つ。明らかにロビーの空気は硬直し、穏やかたる安定が流れていたというのに、今は神妙たる不安定が辺りに充満した。

空気が固まったのが今この瞬間ということは、この大男はこの空間に今、TAGSIGNが彼とぶつかったその前後に現れたということになる。となれば異常さは余計に増す。入り口から現れたのは無い、ということだからだ。

逃げた方が良いかもしれない、と考えたTAGSIGNに対して、大男は無表情のまま、やけに紳士的な声音の、言葉を発した。

「服は境界のどこかに落としてしまったようだが。……カードの更新が仇になったな。見つけたぞ、刻跳者」

その言葉でTAGSIGNは察する。出現の仕方、格好、この大男のそれらが異常である理由はわかった。こいつ、『敵』……！

逃げなければ。相手は大男。この華奢な身体では殺される。

そう察した所で重たい衝撃。殴られた ノックダウン ノック

クダウン 警告。

”一撃で気を失わされた”。

「……ちっ！」

だがリカバリーが自然に生じたので、何とか意識は再起動できる。再起動をすると身体に重大な負担はかかるが、仮初めの身体に無理を利かせることにあまり弊害は無い。それより『敵』から逃れることを優先しなければならぬ。

すぐにPCへとsympathizingして、この身体から自らの意識を取り除かなければ……それをしなければ、『敵』にこちら側の情報を与えないために、自らの意識を自爆させなければならなくなる。それすなわち僕の死。起源たるメロディーを忘れ、これまでの任

務で知覚してきた全てを忘却するということ。

(そんなことは……)

させるわけにはいかない。

だが再起動したばかりの身体はひどく重たいし、殴られた顔面は腫れ上がってしまったい、視界がほとんど遮られている。その限定された視力で自らがどこに位置しているのか確認する。

通路の赤のヒカリ、緑のヒカリ、青のヒカリが踊っているのが見えた。

PCのある個室は、通路の手前の方にある。

あいつの拳一撃でひどく身体を跳ね飛ばされたみたいだが、これは好都合だ。

幸い黒メイドと黒執事が立ち塞がって、どうなされましたか、と時間を稼いでくれている。しかし『敵』は男も女も関係なし、容赦なしに彼らに暴力を振るい、吹き飛ばしているから、急がなければ。(……… こういう緊急の時に、限界制御解除は行う！)

人というものは、自らの肉体を守るために、全力を出しているつもりでも八十%くらいまでしか力を発揮できないようになっていた。だが骨折などのリスクを背負うことにはなるが、自分の身体が危機に瀕した時などには、その八十%が百%にまで繰り上がるようになっていた。勿論、それは本能的な部分で解除するのであって、理性で解除を宣言するのではないのが普通だ。

その理性という奴が理を誤って解除をしまって、無駄に骨折などをしてしまうことを防ぐためだろう。

だがTAGSIGNは脳内で”身体限界制御の解除”を宣言する。そして身体は理から発せられた諸刃の剣でもある宣言を信じ、実際に全力を百五十%状態にまで達させる。そう、彼のこの身体の場合、百五十%にまで全力を繰り上げることが可能である。つまり人間の通常の全力の約二倍。

勿論、その分リスクは大きい。身体が瓦解するのはまず間違いない。

だが、開錠の音は、脳内で轟く。がちやり。

その開錠の音が、全身の限界制御が解除された合図だった。

TAG SIGNは熱を感じる。細胞レベルで沸騰するかのような躍動。それは限られた時間ではあるが大男さえも凌ぐことのできるであろう過熱。細胞を消し炭にする程のOVER HEAT。

すべてが明快である。世界は己の掌に納められるほど矮小だ。

一時的に手に入れしは、滾る征服感。何にも負ける気がしない自信。

「……僕を殺してみろよ、変態バイ菌」

手招きをしながら挑発。くすくすと嘲笑いを相手に向ける。

股間にモザイクが掛けられている挑発された側の大男は、TAG SIGNが逃げていないのを見て、ほう、と多少驚愕する。そして立ち塞がる黒メイドと黒執事を全て放り投げ終えると、どすん、どすん、と近づき、紅の殺意を肉体より放出する。

特にその目付き、それは常人が多少眺めてしまっただけでも二度と顔を上げることが出来なくなってしまうほどの殺意を秘めている。

殺殺殺と直接に相手に届けてくるような、両眼。

大男はそれでこいつは終いだ、と相手をそう値踏みしていた。たかが刻跳者、多少の殺意にも耐えられまい、と。

しかし彼の予想に反して、その相手はたじろくどころか、自分と同じくらいに滾らせた殺意のオーラを向けてくる。怯みが無い。脅えが窺えない。その目付きは餓えたハイエナのよう。

大男は再び関心する。もう一度、ほう、と相手に対して畏敬の念を多少払う。

そして口を開く。

「死の覚悟はできているということか。既に先ほどの一撃で力量の差は見えただろうに。悪いが刻跳者に情け容赦をかけるつもりは無い。肉体を破壊して後に、お前の刻跳者としての記憶だけを抜き取り、今後のために利用させてもらおう」

言葉を言い終えた大男は、目を瞑り、祈りのポーズを作った。

初めて見る動作ではあったが、それが祈りなのだとTAGSINGNはわかった。右手を拳にして、その右拳の三百六十度をパーの形をした左手が回転する。そして一礼。

通路で向き合う二つの殺意。その合間を赤のヒカリ、青のヒカリ、緑のヒカリが駆け抜けていく。さも二つの殺意のぶつかり合いをより盛り上げる為の演出であるがごとくに、三色のヒカリは不規則に通路を照らす。華奢で眼鏡を掛けている若い男。服を着ていない三メートルくらいはありそうな大男。前者は額から血管を浮き上がらせており、後者は穏やかな祈りのポーズを取っているながらも隙一つ無い。そして刻が動いた。

大男が再び目を開いた瞬間。つまり祈りを終えたと同時に、ふんと鼻息が漏れるような音。

巨大な右拳、振るわれる。

TAGSINGNの頭部めがけて。常人では捕えられない速度で一直線に。標的にそれが直撃すれば、それは、もげてちぎれてしまい身体から離れてしまうだろう。そういう力を持った拳だ。

TAGSINGNに思考が鮮烈的に走って、それはまるで稲妻のように電光の脈を全身に這わせるが為に、思考＝身体の行動、と言っても良いほどに脳と身体のリリンクは迅速に行われる。つまり、脳はほぼ無意識的な速度でさまざまな情報を受け取り、考察し、どのようにすれば相手の拳を避けられるのか、また相手を倒すことができるのかと理解した上で、それが現実のものとなるように身体に正しく間違いなど一つも無く、こう動け、と指示する。

拳を力づくで止めることはしない。止めることはできても、肘骨がその衝撃で皮膚から突き出してしまうから。剛は柔で制してやれば良い。だから最小限の動きで、拳を回避。それでもわずかには体に掠めてしまうが、相手が頭部を狙っていることが幸いした、拳の下を潜り抜けて、相手の懐に一気に入り込む。

これによって互いの距離はゼロ。零距离。

「もらった……」

TAGSIGNのやりたいことは『敵』を足止めすること。こちらがPCとsympathyできる時間を作ること。そのためには相手の何を奪うのが手っ取り早いかはわかっている。限界制御解除を行っていなければそれをやることを躊躇したかもしれないが、TAGSIGNはアドレナリンが限界まで放出されているがごとくに本能の熱が沸き立っている。

ゆえに、躊躇しない。グロい行為にも。

狙うは、眼球潰し。屈強な肉体でも、眼球ばかりは鍛えられない。TAGSIGNはその場でメートルほどの跳躍をし、メートルの人間のその両眼に狙いを付け、突きを放つ。

渾身の、常人では目に追えないであろう突き。二の腕あたりの筋が切れる音が鳴ると共に、めりっ、というグロテスクな音。

……殺った！とTAGSIGNは思った。だが。

「舐めるな、小童」

TAGSIGNの突きは、大男の左の掌によって止められてしまった。めりっ、という音から察するに大男の左掌もタダでは済まなかったようだが、しかし両眼を潰さなければ意味が無いということをTAGSIGNは理解している。

こちらの攻撃が受け止められたということは、『敵』の攻撃がくるということだ、ボキッ。

骨が軋んで、耐え切れずに折れた音。

『敵』から発せられたのは頭突き。左腕での防御は何とか間に合ったが、おかげで左腕はぶらぶらだ。

右腕は眼球には届かず、左腕は破壊された。血圧が上昇し過ぎているのが感覚でわかる。指先など末端の感覚はもはや無くなってきているし、視界が血に染まりそうだ。時間が無い。せいぜいこちらから可能なのは、あと一手、あるいは、あと二手と言ったところだろう。

TAGSIGNの脳味噌中でメロディーが流れる。

ラララ……

だ。

哀れでもあるが容赦などしない。その引き攣っている相手の顔面
目掛けて、全力の頭突きを、ぶちかました。

ぐおおおおおおおお。

声とも雄叫びともつかぬものを発しながら、大男は頭突きによつ
て地に倒れた。

三メートルという巨大さも倒れてしまえば、意味が無い。TAG
SIGNはその倒れている大男にトドメの、目潰しを、足で踵落と
しをすることによって、きめた。ぐしゃり、と鈍い音。

ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおお。

その大男はのた打ち回っていた。ひどく痛そうだった。痛覚を切
れないのかこいつは、と訝しく思いながらもTAGSIGNにはそ
の大男を眺めている余裕などない。黒執事と黒メイドが、「お客様」
、などと口走りながらこちらに駆けて来るのも見えた。

（彼らの鼓膜を破るような失態はせずに済んだようだ。絶叫とい
う策は一般人を巻き込んでしまうから控えていたが…案外、本当に
近くにいる奴にしかひどい被害は与えないものらしい。いい経験に
なった。さて、完全に身体を動かせなくなる前に……）

TAGSIGNは黒メイドと黒執事が呼び止めるのを無視して、
丁度数歩で辿り着くことのできる、先日から使わせてもらっている
鍵付きのPC個室に入る。そしてスタッフが入ってこれないように
鍵を閉めて後、身体がもうどうしようもなくなる前に、鍵が開けら
れる前に、sympachyしてdiveしなくては、と焦る。焦
るせいと身体の組織が崩壊を始めているせいで手元がおぼつかない
し、熱は多分四十度くらいは出ているはずだった。キモチワルイ。
だるい。吐き気。関節中が痛い。

ヘソのあたりに取り付けられている接続コードを引っ張り出し、
PCに接続。電源を立ち上げて、あとは百九十三文字のパスワード
を打ち込むだけ。

普段ならブライントタッチで即座に打ち込めるパスワードではあ

るのだが、身体は限界に達しているし、筋肉の入れ具合の調節が利かないから、キーボードを壊してしまいそうになる。口頭入力が出れば良いのだが、あいにく今は喉が潰れてしまっているし、こういう他者に盗聴される危険性の高いパーソナルスペースでは、口頭でのパスワード入力は禁止されている。

(あと少しなのに……！)

背後からドアの叩かれる音。「開錠してもよろしいでしょうか」というDCスタッフの無機質な声。感情が窺えないから、どのタイミングで開錠してくるのか予想が付かないから怖い。現在、六十三文字入力完了。残り百三十字……。間に合えと念じる。念じながらタイピングを進めていく。間違えてはならないというのに、こういう時に限ってミスをする。ミスをしたと自覚できただけでもタイムロスをひどくせずに済むが……。百二十字まで入力完了。残り、七十三文字……。

どけ。貴様ら、邪魔だ。

TAGSIGNに、今確かに、間違いなく聞こえた。指を止めてしまいそうになった。先ほどの大男が、近づいてきている。残り三十三文字。ちっ、ミス、いける、いける、いける、いける。

残り二十文字。背後から凄まじい、鉄製のドアが軋む音。あの大男が辿り着いてしまったらしい。目を潰されているくせに、よくもまあやるものだ。耳か鼻の能力を高めているのだろうか。

そんなことを考える場合ではない。残り十五字。吐き気がする。メロディーが聞こえる。ちっ、意識が混濁しそうだ。ドアの軋む音。噴水の水が流れる音。血液がどろどろと体内を流れている音。身体の何かが断裂した音。吐き気。指が、麻痺しそうだ。まだいけるいけるいける。背後からのドアの音。

残り……。

「どらっしゃああッー！」

鉄製のドアを突き破るようにして、大男が回転しながらPC個室

内に侵入してきた。

大男は侵入と同時にその内部にあった標的の身体を鷲掴みにすると、躊躇もせずに握力で捻り潰した。その身体の様々な、臓器や骨格が飛散し、壁、床、PCの画面などに飛着する。

だが、大男は捻り潰した後に、ちっ、と舌打ちをする。

PC画面に大きな文字で、『dive』という四文字が大きく書かれていたからだ。

「任務を失敗した…。刻跳者を見くびっていた私は、驕っていたのか…？」

その一言だけを残して、三メートルの大男は空間に溶けるようにして薄まって行き、最後にはわずかな光の粒子だけを残して、その場から消失した。

こうして、PC個室には見るだけでも嫌気が刺す景色と、『dive』と蛍光しているPC画面だけが残された。

無機質な接客をするように訓練されているDCスタッフたちの多くも、さすがにその多くが取り乱し、感情を露わにしてパニックとなつて、夢を見ていたのではないかと頬をつねっている者さえいる。大きな掌に捻り潰された人間の身体を見て、真っ赤な花のようだと黒執事の誰かが言っていた。

その言葉に返事をした者は、一人もいなかったが。

dive……dive……calling……
calling……dive……dive……
calling……calling……dive……
dive……dive……dive……
dive……calling……dive……
dive……dive……calling……
calling……dive……dive……
calling……calling……dive……

d i v e c a l l i n g d i v e
d i v e d i v e d i v e
c a l l i n g c a l l i n g d i v e
c a l l i n g d i v e d i v e
d i v e d i v e c a l l i n g
d i v e c a l l i n g d i v e
d i v e d i v e d i v e
c a l l i n g c a l l i n g d i v e
c a l l i n g d i v e d i v e
d i v e d i v e c a l l i n g
d i v e c a l l i n g d i v e
d i v e d i v e d i v e

零化

深く、深く、深く深く深く、深く、深く深く、深く深く深く深く、彼は深淵に意識を放っている。潜り込んで、踏み入って。

何回もこの潜水を繰り返しているTAGSIGNだが、この感覚にまだ慣れない。重力から解放されたことよって湧き上がる浮遊感を得ているにも関わらず、深い底に沈んでいくという矛盾。

何時になっても彼は、これを好ましく思えない。沈めば沈むほど、重力から解放たれていくなどという違和感を。

透明たる電子の海でもある第一深層境界のその入り口に、どぼんと音を経て落下すると、人にもっとも癒しを与える形態と言われている電子妖精、いわゆるフェアリーたちに彼は迎えられる。色鮮やかな羽を持つ、男女とも区別も付かないが、姿形は人間の幼子、あるいは赤子、に酷似している。

フェアリーたちは電子の海を、金魚が泳ぐように事細かく動く。キャツキャツと色が違う者同士、あるいは色が似通っている者同士とまあとにかくフェアリー仲間楽しんでる者がいれば、TAGSIGNのようにdiveしてきた意識体に興味を示して、鼻をくんと鳴らしながら近づいてくるフェアリーもいる。好奇心旺盛という奴だろう。

話し掛けてくる訳ではない。フェアリーは人間に似ていながらも言語を持たないので、キャツキャツと楽しそうにしたり、羽で電子の海を泳ぎまわったり、じゃれたり、上から落ちてくる意識体の匂いを嗅いだり、という行為ばかりしているのだ。暇なのだろう。

TAGSIGNから少し遠めの位置では、美しい景観を作り出しているフェアリーの集団もいる。

フェアリー同士、百匹くらいだろうか、いやもつという。

それらが示し合わせてくるぐると立体的に回転し合うことで、カラフルな繭のようなものを作っていた。

フェアリーが羽ばたくと発される残光の軌跡が幾重にも重なることで、繭のように見えるのだ。

それも珍しい光景だった。TAGSIGNも数回しか見た覚えの無い、フェアリーによる繭造り。

いつもだったら、珍しいなあ綺麗だなあ、の二言で済ませる現象なのだが、今日はそこに何かを見出さずにはいられない。何かの予兆を感じさせられるからだ。

（様々なことが異常だ。歌のメロディーを忘れそうになったことに始まり……）

嫌な予感は強まる。仕事疲れに加えて、『敵』と遭遇するアクシデントにも見舞われてくれたのTAGSIGNではあったが、休憩時間を取るつもりは無かった。

それだけ彼にとつて”起源”の歌のメロディーを忘れそうになったことは衝撃的だった（それがほんの一瞬のことでも）。だから意識は自然と覚醒していて、意識は眠りたいという欲求を自然と押さえ込んでいる。それに、身体から解放されているので休憩を必要とするのは意識体のみ。意識体の休憩自体はさほど頻繁に行うものではなく、二日に一辺ほど取れば万全の状態となる。だからまあ、過労した直後と言えども、身体の休憩を取る必要が無くなったので、まだ休憩を挟まずとも活動はできる。

TAGSIGNは、まず情報を収集してみることにする。

電子の深海に自らの意識をのっぺりと広げていく。拡散させていく、というイメージをする。

これによって自らの意識体を電子の深海と同調させる。同調すればどうなるかという、同じように意識体を同調させている輩と、交流を図ることができる。旧時代では文字を送り合うことでそれを為していたが、diveが数多の世界に繋がったことによってその交流の仕方は陰に潜まった。意識体での同調の凄い所は、一斉に交流を何千万人と同時に取れることであり、それら何千万人も意識体が持っている情報が（本人が流して良いと許可している情報に限

るが)、どんどん電子の海に蓄積されていく。勿論、情報というものは取捨選択して得るものだから、それら全ての情報が一斉になだれ込んでくるとか、そういうことではない。

便利なのは、検索が楽なこと。意識体はその情報の溜まっている電子の深海と同調してくれているおかげで、『こういう情報が知りたい』と感覚的に願うだけで、その知りたい情報が深海から浮き上がってきて、目の前に現れてくれるのだ。

つまり情報とは取捨選択するものであるが、その選択を誤る可能性は電子の深海で同調している限りはあり得ない。さらに面白いのは、自分が意識上わかっていないような知りたいことを電子の深海側が教えてくれたりする。無意識レベルで本当は知りたいと思っ

ていることだとか、何だかもやまするのだけど何が気になるのかわからない、という時に非常に便利でありがたい機能だ。

電子の深海に浸っていれば、少しでも知りたいと思っただけ、その情報は簡単に現れてくれる。

diveした意識体が、流出しても良いかなと思っただ知識は、電子の深海に染み込み、そして刻み込まれる。たとえ意識体が自分の意識から情報を垂れ流すのを全体の約一割程度しか許さないとしても、それが何千万人と何億人とアクセスしていけば、結局は万人の知恵が集まる。

人は知識というものを欲しがる。だからdiveは各国で流行り、そして各世界でも流行るのだ。

もちろんdiveの機能はそれだけでは無いのだが。かつてない規模の革新を各世界中に巻き起こしたdive。diveに関する情報も、電子の深海にはたんまりと蓄積されている。それら全ての情報をしっかりと覚えようとすれば、丸々一年はかかるに違いない。それほどdiveというものは多くの人に影響を与え、影響を与えるに値する機能を持っている。

それにdiveは機能という枠を超えていて、それ自体が一つの世界、いや、それよりも大きな枠の存在とも言えるのだから、至極

当然、多くの世界の人間がこれにアクセスすることにはなる。大きな物に巻かれることで安泰を得たいと思うのは人間の性の一つだからだ。

そういう大きなものに混ざり込む何千万という意識体のうちの一部となることで、溶けた状態にて、TAGSIGNは情報を集めてみる。

『Question.ここ最近、各世界の中で異常と呼べる出来事が発生してはいないだろうか?』

異常。と一言にいつても異常というのは様々な異常があるのだが。正常にも様々な正常があるように。まあそこは、TAGSIGNが知りたい『異常』をdivide側が勝手に考察してくれるので、それ以上に言葉を重ねなくともdivideはTAGSIGNの知りたい『異常』をあぶり出してくれる。

本日divideに混入された情報です。

無機質な自動音声がそう告げてくるので、イエスと答える。そのきっかり三秒後に、無機質な自動音声は記事を読み始める。

『刻跳者が”零化”した事例の数が例年と比べて増加傾向にあるということが、刻跳監視委員会より発表されました。委員会は”零化”した刻跳者を第零深層境界に保管することは通常通り行うとしていますが、”零化”した刻跳者の数が例年より遥かに多いことから、通常通りの保管を行うのでは何かしらの弊害が起きるのではないかと不安も投げかけられています。しかし刻跳委員会の面々は特別な措置を取ることを、話し合うことすらしていないということですので、約七割ほどの意識体から不安感情が高まってきた様子ではありません。”零化”と言えば真つ先にMouth putting of the earthの事件が多くの人々に呼び起こされます。あの生命のいた惑星二つを消失させた事件は、divideで観測してきた中ではもつとも多くの人間が命を失った事件でもありません。あの事件からすでに二十五年の月日が流れています。その傷跡は多くの人の胸内に残留しています。零化した刻跳者は危険な存在で

あるという認識が高まったキツカケでもありません。零化した刻跳者は殺してしまうべきではないのか、という過激な意見も当時は出ましたが、罪を犯してもいない零化した者を殺してしまうのは、あまりにも酷ではないのかという意見が各世界での主流となりましたことから、隔離された世界である第零深層境界に封じるといふ措置を取るに落ち着くに至りました。それが約二十五年前の出来事。M o u t h p u t t i n g o f t h e e a r t h 事件です』

”零化”…。刻跳者には必ず付きまとうリスク。

T A G S I G N はしばらくの間、零化に関する記事を読む。

そして自らもその存在に堕ち入ってしまうのかもしれない、と考える。

ストレスレベルが上昇しています。趣味などでのその解消を勧めます。

d i v e 側から T A G S I G N に対して幾つかの趣味が揭示される。他者と意識レベルでリンクされているこの状態ならば、全く見知らぬ顔の者同士で将棋やチェス、さらにはサッカーや野球などの多人数でやる趣味も仮初めの電子体を利用することで可能だ。スポーツというものは人の身体能力の差異があることによって実力差が発生するものだが、d i v e 内で行われるサッカーや野球は、皆が大体同じ程度の身体能力を与えられるが為に、戦略や自らの機転、即席のチームワークをいかに築くか、などの要素が重要となる。それが面白い、ということだ。d i v e 内でのサッカーや野球というものは人気があつて、それを趣味とする人間は数多くいるし、d i v e 専門のプロもいる。肉体による衰えを気にしないで良いことから、ある程度年齢のいつてしまつて普通の肉体に縛られた世界では引退せざるを得なかつたプロサッカープレイヤーが、d i v e 内でのサッカープレイヤーに転身し、六十歳を超えても現役のプロとして活躍していたりする。

T A G S I G N も時たまに d i v e 内サッカーや野球に参加することがあるが、今日はそういう身体を使う趣味をしたい気分ではな

いし、そもそも趣味をしたい気分じゃない。

（零化している人物の数は例年と比べて増加。……例年と比べて、約十五倍……。異常だな。これは遂に、僕も御終いつてことかもな……）

例年の刻跳者が零化する数は、三十人程度、だった。それが今年には四百五十人にまで増えているという。異常について様々に調べるつもりだったTAGSIGNだが、暗雲のような心境が漂い始めて、意識が重たくなってくる。眠い。

（零化……か……）

TAGSIGNは自分がそうなってしまつかもしれないという現実を叩きつけられた。

メロディーを忘れかけたことから、その兆候は自分に見受けられる。

メロディーを忘れれば、自分が刻跳者になる以前のことを忘れてしまえば。すなわち”起源”のことを全て忘れてしまえば、もう終わりだ。

TAGSIGNはひたすらに眠くなる。

気だるくなる。

（寝て起きた頃には零化しているのかもな……）

零化は死と同義だ。その割に恐怖に襲われるわけでもないのは、そういう終わり方もまた良いのかもなと、今感じるからだった。寝て起きれば考え方は変わるかもしれない。

だが今はとにかくどうでも良く感じられる。メロディーは今も思いつける。でも寝ている時にメロディーが頭の中から完全に消失するかもしれない。そして零化するかもしれない。

眠気は増していく。思考がぼやけて、ふわふわとした空白に包まれていくのがわかる。

TAGSIGNは第一深層境界に溶けながら、眠りに落ちる。

次に起きるとも起きないともわからないまま、電子の深海で意識はぼやけて。

起源 そしてメロディー

大元である”起源”があつたからこそ、各世界を跳び回る刻跳者という存在は、その自我を保つていられる。世界を跳び超えるということは、自分がどこにいるのかわからなくするということ。

自分がどこにいるのかわからなくなってしまうと、人間は記憶を無くしていく。そして自分が何者であるのかわからなくなってしまう。自我がほどこけて、赤子のように意識形成を零にしてしまう。それが零化、だと言われていた症状。

防止策は”起源”を忘れないという一点に尽きる。

起源とは証。彼が彼であるという証。彼女が彼女であるという証。刻跳者になる時に、”起源”となる何かを一つ、選択する。人によつて何を起源とするかは勿論違つてくるのだが、ある人はそれを図書館にするし、ある人はそれをワンピースにするし、ある人はそれを扇風機にするということもあるだろう。人間の誰かを起源にすることは出来ない。また物質に限らなくても良い。”人の作りしモノ”であれば起源になりうる。人間自体も人の作りしモノの範疇に入るようでもあるが、なぜか、それは認められない。

とにかく起源とは人の作りしモノでなければならぬ。

T A G I S I G Nは人の作りしメロディーを起源として選択した。

ラララ…。

ラララ…。

ラララ…。

歌口ずさめば己が何であつたかを忘れることをせず、意識体だけを糧にして様々な身体へと宿り移って行くとしても、自我を崩壊しないでいられるけれど。

もし忘れてしまったら…零化してしまえば… ……あなたはこの通り… ……砕けてしまう砕けてしまう… ……ラララと口ずさむこともせず… ……堕ちて行け… ……堕ちて行け… ……ラララ… ……電

子の深海で重力から解き放たれながら、あなたはどこまでも墮ちて行く……ラララ……ラララ……古きを否定する赤子となって……意識など無しに……本当にそう思う……意識が無くなってしまっただなんて……本当にそう思う……

#誰がこんな詞を勝手につけるんだ#

TAGS I G Nは眠りの奥底で、それに怒りを感じる。

夢の中とは言え、自らがもっとも頼りにせざるを得ないメロディーをいじくるような真似をするのは許せることじゃない。誰がそんな悪道をするのだと不機嫌は極まるというもの。先日から仕事をしています。いくつにも枝分かれしている世界の内の一つにアクセスして、そこに目立った異常がないかを確認したり、また研究対象となるような興味深い事象があれば、それを委員会に報告する。そういう仕事です。それを一通り終えてd i v eして報告などをして後、ふらふらしていると、『敵』に襲われるというアクシデントに遭遇しました。三メートル程の大男は強敵で僕はとつても疲れました。メロディーを忘れそうになった。メロディーを忘れそうになった。その恐怖は刻跳者にしかわからないものだよな。刻跳者はd i v eを通じて世界を跳び回るうちに、自分がどこにいるのかわからなくしてしまつて零化するというリスクを常に抱えている大変な仕事なんだ。ラララ……。そんなメロディーがあるか無いかだけで、精神の安定の度合いは幾ばくも違うものだよ……TAGS I G N……僕は刻跳者……TAGS I G N……です……メロディーを口ずさみません。

ラララ……。

ラララ……。

ラララ……。

『あなたは本当にTAGS I G Nでしょうか』

メロディーがある内は大丈夫です。それに付して、その周辺にあった噴水広場と、幼い頃に共にいた二人の子供の影がわかります。顔も名前ももう覚えていません。そしてそれ以外の過去は何一つ残

つておらず、全てが紛失しています。刻跳者として生きることしかできず、そのために仕事をこなしていく内に、メロディーのことが覚えていないことに気が付きました。そこから僕はこのメロディーにずっと依存しています。ラララと口ずさめばとても心地良い気がしますし、不愉快な気もしますが、どちらでも同じことのような気分もします。でも僕には生きる上での目標となってくれているのが、その紛失した記憶です。ありがとうございます、ありがとうございます、と何度お礼の言葉を伝えても足りませんよ、記憶に対してね。こんな危険な仕事も目標があるからこそ続くんです。僕には大義なんてありませんから、何か自分の中での報酬がないとやってられないんですよ、

でもメロディーも忘れてしまったらもうお終いです。………メロディーを忘れれば………どうなっていくかは………。

ラララ……。

ラララ……。

ラララ……。

T A G S I G Nはまだ零化などしていない。ここに意識はしつかりとある。ここはきつと夢中。

『起きようぜT A G S I G N。ああ』

誰の声？ これは求めている記憶の断片？ それともただの幻……。わかる必要があるか。わかる必要など無い。刻跳者に必要なのは起源だけであり過去の追憶などは必要じゃないのだと誰にでもわかる。

じゃあ何で紛失した記憶を求めるのか。生きるため？ 空しいから？ 気分？

さあ、それもわからない……。

しかし求める。求めたいから求める。

理由なんて、それでいい。

第二深層境界

フェアリーたちがまた繭を作っている。様々な色彩が入り乱れては失われ、失われては生まれ去っていくことを繰り返すだけのことなのに、目を離すことが出来ないのは何故だろう。

そんな風にぼんやりと第一深層境界で漂っていると、時間が過ぎるのを忘れてしまいそうになるが、*diver*状態の意識体であっても時間というものには縛られるのだから、ぼんやりしすぎていては陽が暮れてしまう。

だがTAGSIGNは繭に気を取られるままに、時を消費してしまふ。

委員会側からの連絡が無ければ、何時までもそうしたままだっただろう。

『起きてる？』

SERIEからのアクセス。

TAGSIGNはそれに答えを返そうかどうか、しばらく悩んで結果、シカトしてしまおう、と思った。だから何度も響くSERIEの声を耳にしながらも、フェアリーの繭を眺めるのをやめないでポーツと続ける。

だがSERIEはしつこい。

『起きてる？』 『寝たふり？』 『シカトすんな』 『起きろ』 『起きろ』 『起きろ』 『おいこら』 『起きろ』 『おいこの野郎』 『起きなさい』 『起きろっつーの！』

いつもなら数回スルーすれば諦めるのに、耳に残る女子らしい声付きで何度も呼びかけられる。

（僕が零化していないか確認しに来たな、こいつ）

TAGSIGNは多少苛立つ。

委員会側としては、零化した刻跳者を放置してしまえば問題になるのだから、そりゃ連絡をとりたいと思うのは当然だろう。だから

委員会側のオペレーターであるSERIからしつこくアクセスされているのだろうが、こうまで露骨に不安がられると、どこか不愉快だ。

もう少し気を遣ったらどうなんだよ。

一言文句も言っただけでやりたいTAGSIGNではあったが、アクセスに応じることすら気だるい。

もうしばらくフェアリーの繭作りを眺めてみよう、と思った。

意識体として第一深層境界に溶け込んでいる状態を解除して、dive時専用の電子体に自らを変換させる。光の格子が布を形作るかのように幾重にも紡がれて行き、手が構成され、足が構成されていくことで、人体としての様相を成し、その場で漂うようになる。

Composition.

黒のスーツを身に纏い腰に一本の細い刀を装着しているという、TAGSIGNはdive時の標準装備に落ち着く。髪の色は目に冴える群青色で、瞳の色は黒。スーツ姿なのにサンダルを履き、両手には赤い手袋を装着しているのが、どこかちぐはぐだ。しかし全くスーツに合わない格好というわけでもない。

「やっぱりこの姿が落ち着くな。白銀刀シラガネがあると無いとでは……」

腰にある愛着の深い刀の柄を握る仕草をしてから、ため息をついて眼を閉じる。胡座を掻いた姿勢のまま、フェアリーたちの遊戯を眺める。珍しいはずの繭作りの光景は、一日立った今も続いている。きつとあの光景は異常の象徴だろう。その原因はわからない。わかることは、フェアリーの繭作りが綺麗だということと、自分が零化する可能性が高いということくらいだ。

あと委員会からの連絡が煩わしい、ということ。

SERIからのアクセスは一旦止まったが、数分後には再び鳴ってくる。

何度も寝ている人を起こそうと試みる、アラームのような繰返しの連絡。

『何時まで寝てるんですか』『起きなっ』『しっぴかりせんか』

『起きなくちゃだめですよ』『無視するのは良くないなあ』『ちよつとそろそろ冗談無しに出てもらわないと困るよ』『起きろ』『起きろ』『うーん。これは困ったなあ。零化しちゃってるのかな……』『起きろ』『起きろ!』『起きろ!』『おい起きろ!』『起きろつてば!』

SERIEの声音は時間を置くにつれて熱が上がっている。

おそらく、こちらが零化したのかもしれないという想像が高まっているのだろう。

「仕方無いな……。変に委員会に報告されても、面倒だし……」

TAGSIGNは連絡が入り始めてから一時間が経過した今頃になって、アクセスに応じる。

これによってSERIEと意識を共有することによって、彼女から一方的に届くばかりだった音声は、互いに通じ合えることになった。『良かった! やつと繋がった!』

一時間も待たされたのだから、こちらに小言の一つでも言っても良いのだがそれを言わないのは、こちらが零化する可能性が高くなっていることを知っているから気を遣っているつもりなのだろうか。と、気を遣わず連絡をし続けてきた癖にこつこつ場面では気を遣うんだな、とTAGSIGNは妙に、不愉快になったりする。

「はい、どうも。長寝しちゃってすいません……。零化とかは、してませんよー」

だから皮肉気な口調を、相手に躊躇せず放ったのかもしれない。

『いや、あ、う』

SERIEの露骨に戸惑っている声。やはり零化してるかの確認のために連絡してきたらしい。

となると確認が出来た時点で向こつこの用は済んだということなのだろうか。

「で、何か用?」

ついイライラしているせいか、尋ねてしまう。意地が悪いな、と自分でわかる。

『え。えーと、で……』

「ごうやって話が出るんだから、僕は零化はしてないってことだ。わかったなら切るぞ」

『ちよ……！ 切らないでください！』

「何で。用が済んだんだから」

『済んでいません！ 第二・五深層境界支部オペレーター管理室長から、刻跳者TAGSIGNに対してお話したいことがあるとの連絡です』

「だったらお話しればいい。そっちから連絡を僕につければいいだけのことだ」

『そもいかないそうです。盗聴の危険性も高まります。直接あなたに二・五深層境界まで降りてきて欲しいとのことです。隠されているオペレーター室への進入方法は、こちらから追って暗号形式で送信しますので、これから一時間後、PM：2：00までに進入をお願いしますとのことです』

「面倒」

『なにかおっしゃいましたか？』

「別に。刻跳監視委員会の首輪は窮屈だな、って言いたいだけだ」

『？ どういう意味なんです、それ』

「……なんでもない。オペレーターなんだから、言葉方面にもうちよつと明るくなった方がいいよ……」

『何だか馬鹿にしてませんか？ まあいいや。とにかく、PM2：00です。来て下さいね、忘れずに！ それでは他の方への連絡もありますので、私はこれで！ またね、TAGSIGN』

「はいどうも」

意識の共有がこれで途切れる。

一時間鳴りっぱなしだったアクセスが、ようやく静まった。

ずつとうるさかったのが急に静まったために耳鳴りが響いてきて、それはそれで五月蠅い。

ラララ…。

ラララ…。
ラララ…。

それを紛らわすためにメロディーを口ずさみ、そして第一深層境界の空を見上げる。永久に終わりの訪れることの無さそうな、厚みのあるように見える真白の空。どこまでも厚みがあるように見えるということは、薄っぺらい一枚の白い板が挟まれているだけのようにも見える、ということでもあった。ただひたすらに白い。だから厚みがあるようにも、薄い板のようにも見えるのだ。

「にしても、面倒な話じゃなければ良いけどなあ……面倒だ。ああ、面倒だ」

フェアリーたちの繭作りはもう終わっていて、花びらが散るかのように所々へと姿を隠していく。何処へ向うのかは知らないが、第一深層境界でしか住むことの出来ない電子妖精だ。籠の中で作られ、籠の中で永遠に生きる。だから何処へいったって、結局は同じ所にいるということなのだろう。

TAG SIGNは「面倒だ」、と呟きながら眼を閉じる。

閉じたまま脳内で四十分後にアラームが鳴るように設定すると、全身を深海に委ね、流れるがままに流れていく。

四十分が経つのはアツという間だった。体感時間で言うならば一分も経っていないような気がする程の一瞬で、時は過ぎていた。

ぼやけていた頭が覚醒してから、脳内に新着の情報が届いていなかをチェックすると、SERIから暗号化された第二・五深層境界のオペレーター室への進入経路が届いているのを知る。そのデータを解析しようと脳内で処理を施そうとすると、何者かがデータにウイルスを混入させようとした形跡が確認できた。

（ちっ。何処のどいつだか知らないが……問題が生じたばかりの刻跳監視委員会にウイルスを送りつけるのは容赦が無いが……）

刻跳監視委員会自体もあまり良い噂を聞かせる集団ではないのだから、各地で『敵』を作っているのは間違いない。だから刻跳者が零化し始めたという窮地に追いやられた途端に、こうして多くの障

害が入り込んでくるのだらう。普段の行いというのはこういう所で反映されるものらしい。

きつと昨日どこの馬の骨ともわからない『敵』に襲われたのも、刻跳者が零化している事例が増加しているという情報を得た連中が、さらにこちら側を混乱させるために行った妨害なのだらう。

あの大男の服を境界に置いてきてしまった所から見ると、あまり質の良い境界扉^{ゲイト}を使っていなかったように思える。おそらく刻跳監視委員会が質の良い境界扉^{ゲイト}を全て独占しているせいで、昨日の『敵』は質の悪い境界扉^{ゲイト}しか使えないのだらう。その窮屈さの憎しみが刻跳監視委員会の飼犬である刻跳者に向けられたということだが、昨日の出来事が生じた理由だらうか。殺されなかったから良いものの、あれで肉体を潰されて記憶だけ抜き取られていたら、その連中からすればそれは貴重な情報源になっているところだった。刻跳監視委員会としては大打撃となっていただらう。勿論、結果としてはその連中の敗北で、僕が勝ったわけだが。どうせオペレーター室に行くことになるなら、そのことを報告して制裁の必要性を訴えた方が良くもしいない。いくら身体が仮の物だったとはいえ、あんな危険な大男に襲われるのは二度とゴメンだ。まあ、あの大男がどこの連中だったのかを特定するのは難しいだらうが……。

びびッ。

考えている内に暗号化されたデータの解析が終了してくれた。

それに伴って、第二・五深層境界にあるオペレーター室内に向うための隠しルートが表示される。

公共の場にて、視界にそのルートはハッキリと表示されているが、他人に覗かれないために、TAGSIGNの視界にしか見えないようになっているので、TAGSIGNは安心してそれを閲覧する。

「ふむふむ。うわ、複雑……」

地図に表示されているルートには事細かな記載。スイッチを三回押せ、コマンドを入力しろ、桃色の鍵を拾って差し込め、青いヘッド口は罨だから踏まないように注意しろ、丁度人がいなくなる事務室

に扉を作っておくから、タイミングを逃さずそこに入り込み、誰にも見られずに扉を開け。

なおここに記載されていることを一度でもミスすれば、大爆発が起きて君は木っ端微塵だ

「ふざけんな！」

近くにたまたまいたフェアリーの一匹がTAGSIGNの大声に反応してビクツとする。

そんなことも知らぬまま、彼はしばらくの間手をわなわなとさせていた。

「木っ端微塵って何だよ！ 木っ端微塵にはなりたくねえよ！ まあ、いつものことだけど！ いつもは三回までミスOKじゃねえかよ！ 警戒しななければいけない時期とはいえ、厳しすぎるだろ……はあ……辛い……」

だが約束の時間まで残り十五分しかない。遅刻をするのは刻跳者としては厳禁だ。委員会側から信頼されなくなってしまう。遅刻というものは何故かそういう重要なあれに値するらしい。組織内での困った慣習だ。心にゆとりがないのだろうか。

まあ、愚痴っている場合ではない。もうルートのインプットは完了した。自分がそのルートを一度もミスせずに渡り切っている姿をイメージすることも出来る。

TAGSIGNの気分はまったくもって曇っているが、彼は目を瞑り集中をして、再び目を開いた時には、その目の色は真剣味を帯びた。そして、より深いところへのdiveを開始する。

「dive……第二深層境界」

その言葉と共に景色は転じて行く。近くで泳いでいたフェアリーの姿が灰色に染まって行き姿を無くしていく。そう言った変化が三百六十度で発生し、空には灰色の曇り、地には密集している建築物。重力は無いのに下へと落下していく、奇妙な浮遊感はより強くなる。まるで空に足を付けるかのように、矛盾した状態でありながらも無理を押し通すかのようにして、その状態が一つの形として電子

空間で提供される。

divideした多くの人々は第二深層境界で交流を図り、第二深層境界で愉しみ、第二深層境界で架空を作る。

そこは現実世界を模した電子生活空間。第一深層境界は入り口であるが、ここ第二深層境界はもつともdivideの中でも利用される位置となる。多くの人々が、多くの夢が、多くの挫折が、そこにある。一つの現実世界よりも多くの人間たち、いや、多くの人間たちの意識、が各々の欲望を叶えるために日々を活動する。そこは一種の人々からすれば現実よりもはるかに現実らしい場所であり、故にそこは期待に満ち、また残酷さも溢れる。

多くの人々にとっての第二の生活形態。自らの意識を武器として、肉体という鎖から解き放たれた人々が今日も道を歩く。快楽を得るために苦痛を貪り、苦痛を得るたびに人の残酷さを知る。残酷さを知るたびに、また世界に希望を見る。

そのステージが、第二深層境界。

TAGSIGNは灰色の曇り空より降下しながら、彼にとってのしなければならぬことを成す為の思考を纏めている。地上に降り立った時には残り時間は十二分となる。その十二分を使い切って、隠されている空間、第二・五深層境界を目指す。

人々を蟻んこのように見下ろすことが出来る。

自らもあのように蟻んことなるのだ。働き蟻に。

四角形のビル。真新しい信号機。奇怪なデザインの建物。舗装されてない道でも走れる自動車。宙に浮かんでいる謎のオブジェ。何者かが建物にかけた旗。曇り空に打ち上げられる花火。どこかで鳴らされている楽器の音。街頭ディスプレイに映される宣伝映像。人々の渦。夢に溢れるマスコットキャラクター。身長を五メートルほどに設定している奇抜な人。縄跳びをして歩く子供。杖を付いてよちよち歩く老人。一人でに走っている自転車。色鮮やかな水が空を舞い、虹のようなものを形作り、鳥達がそれを浴びながら、自らの羽を綺麗な色に染めている。魚たちが水の中から跳び出して、陸に

落ちると足を生やし、遂には羽まで生えて、また水の中へと入っていく。

そういふ賑やかな場所。それが第二深層境界だ。静かな第一深層境界とは真逆だと言っている。

そこに降りてきたTAGSIGNは、片足をどっかのピエロが持っている風船につけると同時に、大きく息を吸い込んだ。そして、宣言する。

「ミッション、スタート」

血

そこもまた隠されている空間。企む者が潜むように息する閉鎖的屋内。

暗い場所。筋肉を切る、むごい痛み音が呻くように鳴る。

DCに全裸の不審者として出没したあの三メートルの大男が、そこにいた。

そこで彼は仕置きを受けている。仕事をこなせなかつた為に、今度は服は着ているが、拘束されている姿で身動きをほとんど取れなくされてしまい、一人の女性に身体を八つ裂きにされている。

哀れなことに痛覚はあるようだった。その証拠に神経に電流が走るために発される叫声は、その場にて一度たりとも絶えることが無くて、大男はずっと唸っている。

「呼吸を、するな」

赤黒い血液の色をしている凶器。それは刀だと見える。それを片側の手に持ち、拷問をこなせるように刃の切っ先を相手の胸元に突き立てている。尖端はもうその肉体に刺さっているから、痛みは大男に与えられているだろうし、それに既に、錆びた釘が五十本、彼には打ち付けられている。大男の肉体が分厚いおかげで、錆びた五十本の釘は、どれも致命傷に至るほどの効果は発していないようではあるが、各箇所から出血はしている。出血多量で死に至るということは人間ならば生じることだが、ここはd i v e内だろうか、それとも現実の世界という奴だろうか。

いや血は既に百リットル程度は床を濡らしている。だから断定することが出来るだろう、この場所はd i v e内で構築されている空間。人一人からそれ程の血が流れても、その者は息絶えないということそれは救いか、それともむごさなのか、それを判断できそうな傍観者に等しい観客は一人だけ。切り刻む者と切り刻まれる者を交互に見やる観客は、顎を手の平に乗せた気だるそうな姿勢で、そ

れを見ている。演者は二人。観客は一人。でも演者は観客のために
それをしているのではない、が。

「呼吸をするな。もつと痛がれ。叫べ。もがいて苦しめ。……役立
たずッ」

痛みを与える者は俯いたまま、その赤黒い刀身の刀。その柄を
握ったり、握り直したりして、空いている手で自分の頬をさす
ったり、腹をさすったりしては、血の赤をのっぺりとこすり付けて
いる。口の周りに撥ねてきた血をペロりと拭き取ってから、切っ先
を奥深くに刺し込もうと力を強めていって、大男の表情をより苦悶
たるものにする。

ぐおおおおおおおおおおおおおおおお

「痛そう。苦しそう。可哀想。もつと痛めつけてあげる……」

「もうやめれば？」観客からの忠告。

「やめない」即座に答える演者。

「……」
「そこで見ていて。もつと、もつともつともつと、この紅ノ黒で…
ヘニノクロ

「血の匂いが、きつい」

「それはごめん。でもね……」

観客がそれを見ることを嫌がっていても、殺戮劇のようにむごた
らしい一幕は終わらないままに続いてしまう。演者は紅ノ黒と呼ん
だその刀で、動けないもう一人の演者の腹筋を裂き、どこまでも何
時までも血を噴出させ、最後には血だか何だかわからぬ程に切り刻
まれて、真っ赤な柱になったかのように一色に染まった。ずっと止
まなかった叫び声もやがて力を無くし、暗い部屋には紅ノ黒が肉体
を引き裂く音だけが、長い間。

観客は足元に転がっていた本を拾い上げて、それに目を映した。

いよいよ迫り来るクライマックスを目に焼き付けないようにしよ
うと思つたためだ。

そんな観客のことなど露知らず、演者は刀身を力強く握り締める。

手の皮が剥けるほどに強く。切り裂いた血を吸って紅ノ黒の刀身はより強度を増し、鉄のようなあの独特の匂いをより濃密にしているが、彼女はその刀を両手で構える。

拘束されている大男だった血柱は、もはや反応することさえしない。

「さあ……！ 紅ノ黒は生き血を啜る……！」

怒りのような嬉しさのような、そういう感情の混ざった声音を発してから後に、演者は袈裟切りを左右に二回。丁度バツの印になる形となる斬撃を、大男に容赦無く刻み込んだ。

刻み込まれた大男の肉体はばらばらに解けて、臓器も皮膚も骨格も血の海にばちやばちやと音を経て沈みこんだ。沈み込んでからはしばらく、暗い部屋に音は無い。むせるような血の匂いばかりがある。しばらく部屋では誰も音を発さなかった。いや、クライマックスから目を反らした観客一人の本のページを捲る音だけが、かすかに響いていたのだった。

「…満足したか？」

静寂にその声は良く響いた。大男の声帯だ。

血の海の中で、顔だけでぎりぎり溺れずに浮かんでいるのは、たしかに先ほどまで切り刻まれていた大男の頭部。先ほどまで痛覚に震えていた彼だというのに、平然とした声つきをしていて、痛みなどわずかにも感じていないように窺える。

誰も大男が平然としていることに驚きはしない。わかっていることだ。痛みに打ち震えるようにして叫ばされていた大男も、頭部だけになるともはや痛みすら感じないらしい。彼を切り刻んでいた演者はその頭部を拾い上げて後に、足の長いテーブルにちよこんと小物を置くかのようにして置いた。みるみるテーブルに首元から流れる血の染みが広がっていくが、汚れなどは気にしないらしく、血のドロドロが空間内のそこら中を占領しても、誰も悲しそうにしない。

「ああ、ムズムズする」

漫画を読んで暇を潰している観客は、どうやら、匂いが嫌な様子

ではあったが。

その観客は女性。彼女は漫画を読みながら、鼻をずすーっと鳴らして後に、着ている布質のような合羽の袖で鼻を拭う。

「あれ……」

拭ってから袖を見下ろした彼女は驚く。鼻血。

「あれ。あれ……止まらない……」

鼻からだけでは無かった。耳や目や口。さらには身体の毛穴からまでも、出血が始まった。

「ああひどい。毒、仕込んでたんだ……ああ……」

観客だと思つて油断していたのが悪かったということだろうか、彼女も実際には演者でしかなかった。劇が始まる前に飲んでいたパインジュースに仕込まれていた毒が回つて、合羽のようなその服の至る所が血に染み、全身が赤黒く染まった。

くるくると酔つ払いのように千鳥足で踊り、漫画本を血の海に落としてから、彼女もまた血の柱のように一色となって最後には血海に沈んだ。

「あいつに仕置きする必要があつたのか？」

首だけとなつた大男の素朴な問いに対して、紅ノ黒の刃を血海に沈ませ、その様を何の関心も無さそうに見つめている彼女は、息を小さく吐いてから、答える。

「必要は無かつたけど、紅ノ黒が求めてた」

それはいつも通りの答えだった。いつも彼女が繰り返す理由。だが大男はわかつている。血を求めているのは紅ノ黒ではない。血を求めているのは間違いなく、ここにいる彼女自身である。彼女はいつもこの殺戮劇の主役で、彼女がもっとも望む結末と過程を描く。紅ノ黒が求めていた、などという嘘は所詮、台詞。紅ノ黒は所詮データが作る架空の凶器に過ぎない。それが血を求めるなど……。diveの中では希求や希望をするのは意識体のみ。肉体でさえも自らの意識が宿木にするための仮宿でしかないのだから。

ピ。

訪問者が来たことを告げる音。

他所様にはとても見せられない血みどろの空間ではあるが、紅ノ黒を持つその女性は気にも止めない様子で、俯いていた顔を上げると、

「Welcome the nuisance」

と静かな声で歓迎する。

歓迎された者は扉を開けて入るのでもなく、窓を開けて侵入するのでもない。

以前大男がDCでやってみせたのと同じように、その屋内の中途に光の粒子を集めて姿形を人間のものへと変えて現れた。：いや、違った。人間の姿形ではない。輪郭は人間の物であったかもしれない。だが人間の物であるのは輪郭だけで、その中身は様々な動物で構成されている。

つまり、頭は蛸で、身体は牛のようで、両腕は犬と猫、足は馬で、背中には蝙蝠の羽が生えている。そういう井出立ちの者が屋内に姿形を構成して、現れた。

彼女は紅ノ黒を鞘に収めることもしないまま立ち上がると、しかしお辞儀をした。

「こんにちはキモチワルイ人。あなたに似合うように、部屋をキモチワルイ様相にしておきました。どうでしょう？」

失礼な言葉。いや、それはもはや暴言だろう。怒っているのではなく平然とした様子でいきなり悪口を放つのだから性質が悪い。しかしその現れた者は、実際にキモチワルイ姿をしてもいるのだから悪口の一つも言いたくなかったのかもしれない。客人に言う言葉では無かったが。

面白いことには、その客人は言われ慣れているのだろうか、全くもって傷付いた様子ではなくて、その逆に、蛸の顔を心なしか嬉しそうに歪めるのだ。そして暴言に対して返した言葉は、

「それは誠に嬉しいことです。心に響くもてなしで、歓びの感情がこの触手に表れます」

だった。そして彼の触手がぐねぐねと細かく蠕動した。とてもキモチワルイ。

紅ノ黒の彼女は吐くようなジェスチャーをしてから、血みどろの椅子に手を伸ばして「どうぞ。座ってください」と招いた。

しかしその男は首を横に振り、その招きを断ってからこう言った。「私のようなものが椅子に座るなど、ありえません。椅子が可哀想です」

場が少しの間固まって、沈黙が生じる。

顔が蛸で身体が牛、両腕が犬と猫で足は馬、背中には蝙蝠の羽。そんなド派手な格好をしている割には自己評価が低い。そんな格好をしているから自己評価が低くなるのではないか、と大男は思うのだが口には出さないで黙ってる。

沈黙を斬ったのは紅ノ黒を持つ彼女。

冷えた瞳でこう言った。

「キモチワルイんで、話し合うことだけ話し合って、さっさと帰ってもらえますか？」

男はこう答える。

「勿体無い御言葉」

そのマリンプルーの照明の薄暗い中で

青いヘッドロを踏んだその瞬間。

TAGSIGNの頭に過ぎったのは後悔だが、全ては手遅れであるからして呆然とする他なかったのである。対処をする暇など与えられず、大爆発で木っ端微塵だ

(SERIEの奴……データに書いてある位置と違っ……)
「うぎゃー！」

彼の悲しい叫びが第二深層境界を飛び回る。そこは第二深層境界内でもっとも人通りの多い街「ベルサクネ」。洋風な建築物や巨大なビル群が建ち並ぶその街に、彼の悲鳴は五月蠅く響き渡ったのであるからして、多くの人々がそれを耳にした。が、皆、気にせず歩き去っていく。各々の理由で。

裏路地。射し込まれる光はビルとビルの間にある、棒のように狭く見える隙間からしか得られない、薄暗くてゴミ袋がたくさん置かれているような場所。もちろんそのゴミ袋たちは街内にリアリティーを発させるためだけにある、非現実物質。しかしリアリティーの為にその袋に悪臭はしっかりと籠っている。dive内でもゴミ袋に悪臭を残しておくか、残さないでおくかの論争は昔から続いていて今でも続いている。賛否両論。ここに置かれているゴミ袋は、匂いを残しておくという設定にされたゴミ袋だった…。

「腐っている秋刀魚と、ミカンの一年放置、林檎の芯が大量に入っているし、ひどいことには納豆をパックを空けることもしていないで腐らせたものが無数と言っていいほどに混入されている。……つまり、かなり最悪な悪臭を放つゴミ袋の中に僕は吹き飛ばされてしまった、ということだ」

冷静に分析してみた所で、臭いもんは臭かった。

臭いものには蓋をしるなどというが、蓋はされているにも関わらずこの悪臭だ。鼻がもげる。

もちろん実際に鼻がもげることは、現実世界でもありえない。dive内でも、もげるように設定しなければもげない。

「幸いにして、木っ端微塵になったのは右腕だけか……」

肘から先が吹き飛んで無くなってしまっている。痛覚は基本的に切つてあるので痛みは無いが、普段そこに在るものが消えているというのは、やはり不自然で気分が悪いので、脳内でいろいろと処理をこなして再生を選択する。

遠くでラッパだかトランペットだかが吹き鳴らされている。裏路地の壁と壁を行き交つてかすかな音量となつてはいるが、それが妙な反響効果を起こしているせいで不思議な感覚を引き起こしてくる。こつこつこのを何効果というんだらうか。大体の物事には、効果とか名前が付いているものだが。

効果なのはTAGSIGNにはわからないが、楽器の吹き鳴らされるに合わせて右腕が再生していくのを見下ろしていると気分が良い。腕が分子レベルくらいから構築されて形を成していくのと、演奏が盛り上がっていくタイミングが組み合わせられて二重奏するのが、心臓を刺激する。血流が激しく全身を駆け巡っている感覚がクル。良い良い良いと思えるその上昇を体験させられれば、TAGSIGNは残り時間、三分、で目標を達成してやろう、という高揚に達する。

よしっ、と意気込み。

「データ展開。ルート再確認。最短時間での到着を想定。目標、三分以内での第二・五深層境界への到達……… I'm ready!」

ゴミ箱から漂う悪臭を振り切つて、彼は地を蹴り、壁を走り出した。どんなに激しい動きをしても履いているサンダルは脱げないように設定してから、ベルサクネ内の曇り空の、雲内を、自由に闊歩するがごとくに駆けずり回る。それなりに技術がある動作ではあるが、刻跳者としてdive内でも様々な活動をこなさなければならぬTAGSIGNにとつては、簡単なレベルの技だ。

どのように動けば最短時間で目標地点に到達できるか、それは既

に脳内で計算が終了してくれているおかげで、そのルートはTAGSIGNの視界に、線のようなものとなって映っている。

だから後はそのルートを外れないように、一瞬たりとも外れないように、多少無茶なルート設定でも、外れることなく、押し抜けるだけだ。そして気合の入っているTAGSIGNにはそれをこなすだけの能力はある。

「っらああああああああああ」

TAGSIGNは楽しそうに口角を上げながら、雲内を抜け地上に再び下る。

ルートはまだ一瞬も外れていない。

TAGSIGNは楽しさを抑え切れない。そんな表情を浮べたまま、ビルの屋上に着地してそのコンクリにひびを入れてから再度ジャンプ。人が今はいないはずの、どっかの組織が使っているビルの一室、つまり目標の扉がある事務室。その窓に標的を付けられる位置にまでようやく位置を修正できた。空中に浮いたままでは身体がコントロールできないので、近くにあるガツチリしてそうな鉄管を片腕で掴むと、くるっと重力を無視するかのような回転をして（第一深層境界の地上には重力が現実世界に則して設定されている）、その上に乗る。

「ふふっ。あと一息……」

楽しそうに呟いてから、白銀刀を目に見えない速度で二回、鉄管に向けて振り下ろす。

スパンツ、と良い音を経て鉄管は地上へと落ちていくので、鉄管に乗っているTAGSIGN自身も、重力に引っ張られていく。そして落ちる時、事務室の窓近くの壁を通過するその一瞬。それはわずかでもタイミングがずれてしまえば上手く行かなかったことだが、白銀刀を窓近くの壁に思いツ切り突き出し、そしてそれによって窓の目の前でぶら下がる形となることに成功してみせる。

もしも事務室の中に人がいれば、窓拭きがワープしたかの如くに外に現れた、と人は驚くだろう。だがそう考えたすぐ後にはさらに

驚くことだろう。どうして人がこんな高い所に、足場も無しにぶら下がっているのだ、と。dive内と言えど、重力が設定されている以上は、人が空高くに浮かんでいることはやはり驚きの対象となるのだ。

データに揭示されている時間内に辿り着いたのだから、当然事務室内に人はいなかったが、しかしもう少しで人がそこに現れる気配が、確かにあった。だから暇は無い。TAGSIGNは白銀刀を器用巧みに操ることで、窓を綺麗に形を崩さぬまま、四角形に切り取ると、それとほぼ同時に窓下の出っ張っている所を掴むことで、白銀刀という支えをなくしたことよって落下した体を支える。そして後は身体をくると回転させて内部に侵入。窓はどうせならと、割らないまま隅に置いて、CAUTION、とあと少しで人が事務室に入ってくるとの警告が鳴ったので、急ぎ指定されているデスクの引き出しを開ける。

その中には白い電話。それすなわち扉。嬉しさを堪えながら、宣言する。

「目標、達成」

そうはつきり言い切ると共に、白電話の受話器を手にとり耳にあてがう。その瞬間に扉による移動が始まった。

ぐるぐるぐるぐるぐる。

ぐるぐるぐる、

ぐるるるるる。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐる。

TAFSIGNの意識体がその受話器の中に入り込み、意識体を無くした身体は分子レベルで分解していきその場から消えてなくなる。TAGSIGNの意識体はぐるぐるぐるると回転しながら特殊回線内をぐり抜けて行き、そして丁度PM:2:00を回る瞬間に、彼の意識体は第二・五深層境界の刻跳監視委員会管轄内、そのオペレーター室へと入り込み、肉体が再構成されてその青い髪と黒スーツとサンダルという井出立ちを現したのである。

PM2:00。秒針でさえも丁度真上にあつた。

「お見事！ さすがの腕前だな、TAGSIGNくん」

ぱん、ぱん、と何となく気だるそうな調子の、拍手。

いつも物腰がどこか余裕な、いわゆる頼れる上司ではある人物に迎えられる。

「どうも、ジョーシ」

刻跳監視委員会第二・五深層境界支部オペレーター管理室長。

彼の経歴を閲覧しようとしても、わかる情報はこれだけだ。名前すらも閲覧禁止とされている。自らの正体を明かすことは義務で無いとはいえ、一組織の重要な立場にある人間がそのようなことをするのは様々に差支える。そのはずなのだが、彼は経歴を全く明かしていない状態でもこの組織にて長いこと仕事をし、また多くの仲間から尊敬されてもいる。謎めいていて、食えない人物。それがジョーシだ。名前がわからないから皆そう呼ぶ。ジョーシ。

彼が普段使っている身体の設定は、百九十センチメートルの高身長で、とてもスマートな体型をしている上に上司らしく渋い顔付きをしている。上手い具合に髭が生えていたりする。服装は刻跳監視委員会指定の黒スーツを、誰が見ても非が打てない程に着こなしてみせている。

彼はいつもこのオペレーター室にいる。大体、いる。

ここはTAGSIGNが大男に襲撃されたあのDCに似ている。

マリンプルーの薄暗い照明を基調として、どこか心落ち着かせる静かな雰囲気を出している所が、似ているのだろう。オペレーター室には刻跳者をサポートするという重要な役割を担っているオペレーターが四十人程配置されていて、その四十人が常時刻跳者をサポートする。この支部だけで四十人なので、全体のオペレーター数はなかなかの数だ。

オペレーターも大変な仕事で、もしかすると刻跳者よりも難儀かもしれない。

刻跳者をサポートするにあたってオペレーターに被害が向うこと

もあるし、さらにこの支部では厳しい上司であるジョーシの両眼も光っているので、オペレーターは気の弱い者では務まらないだろう。そういう職業を統括する役割を持っているのがオペレーター管理室長、というわけだ。

「いや、途中SERIEくんが騒いでしまつてね。君が事故死したー、と自分を見失つて叫んでいたよ。可愛らしくはあつたが、隣のオペレーターのHARRYくんに迷惑を掛けていたのは駄目な所だったな。…ふふ、だが、まあなんとも素晴らしい結果だな。さすがA級の刻跳者といったところかな」

そう言われてTAGSIGNは思い出す。SERIEが間違つた情報をこちらに送りつけたおかげで、青いヘドロなどという初歩的な罠を踏むに至つたのだ。

SERIEがいる右端の方に目を向けると、気まずいのだろう、いそいそと姿を隠すかのようにしている彼女の影がわずかに見えたが、今のTAGSIGNはそれに文句を言いに行く気分でもなかったのだ、さつさと彼の話の話を済ませてもらおう、と思った。

「で、お話したいことってのは何ですか。楽器の音があつたから気合が入つたものの、僕もちよつといういろいろありまして、疲れているんです」

少しぶつきらばうな口調で言つてから、しまった、と思った。

ジョーシ大好き三人娘に、その言い方を聞かれてしまったからだ。「…ちよつとあなた！」「」

オペレーターの業務は良いのだろうか、によきつ、と三つの女の顔が薄暗いマリンブルーの中で浮き上がってきて、三つ子かと錯覚させられるほどの息の合いつぶりで言葉を投げ付けられる。

「…A級だからって調子乗ってんじゃないの！？」

「…あなた丁度びつたりに付いたって得意気だけど、それってイコール遅刻ぎりぎりってことじゃない！ 全然誇れることじゃないわ！」「」

「…どうでもいいけどあんた、さつさと去りなさいよ！ 邪魔よ

「!」

「私達三人娘が、ジョーシに纏いつく邪魔者は、排除します!」

(いや、僕から来たわけじゃなくて彼に呼ばれたんだけどな……。ま、この三人の言ってることなんて聞いても疲れさせられるばかりだな。……まったく、うるさい)

TAGSIGNは三人娘に聞こえないように小さくため息を付く。ジョーシは三人娘を巧みな話術で静かにしてから、こほん、と咳払いをしてようやく話を始めてくれた。

「いや、実はね……」

「……」

話を全て聞き終わったTAGSIGNは呟いた。というより、呻いた。

「……はじめて聞きますよ、そんな事件」

あの男を吹き飛ばせ

その者、陰でひっそりと息づくように、日々を送っているのです。陰で生きる者にとって、この世はそれなりに春ですから。

それに陰で生きると言っただって、いつも暗いところで体育座りをしているような訳ではありません。

時には日向ぼっこをして、時には山に登って葡萄狩りをしたりするのです。

ワインにして飲むのでしょうか。そのまま食べてしまうのでしょうか。

それは個人の自由です。例え陰に生きるとあっても個人が決めることです。

なんだ、陰で生きると言っても、たいしたものではないですね。確かにこの世は素敵です。陰で生きるんですと誓ったとしても、様々なものは昔と比べて裕福で、便利な道具がたくさん揃えられて *divide* という様々な世界を行ったり来たりできる”通路”のようなモノまで出来てしまいました。食べ物に困ったら裕福な世界から貰えばいいのですし、貧困で嘆いたり、土地が狭いと悲しんだりしても、*divide* 内に踏み入れればそういう制約は無くなってしまいきますから、人が餓死するなんてまずありえませんが、まあ、肉体は滅びるかもしれませんが、意識体という奴を保管できる *divide* 内ではよほどのことが無い限り人間は死にません。いえ、意識は死にません、と言った方が正確かもしれませんが、まあ、細かいことは気にしないで行きましょう。

どこに行きます？

とりあえずこのバスに乗って何処かへ行きますでしょう。そうだ、オススメの店がありますからそこに向かいますよ。お腹も空いているんじゃないですか？さあ、乗車券を手にとって、座席に座って、外の景色でも眺めながら、その者、つまり陰で生きる者の話でも聞

いてください。

ほら、そこに男性の運転手さんがいるでしょう？

彼は昨日、葡萄をたくさん食べてお腹を少し壊し気味ですが、お仕事を休むのも癪に触るので頑張って運転しています。まったく、代わりならいるのにねえ。彼の何かが仕事を休ませないのでしよう。自らに枷を嵌め込んでいるなんて素敵ですね。え、そうでもないですか。

にしても少し運転が荒いですよねえ。心無しか乗客もあまりいないのに、アクセルを重たそうに踏んでいるように窥えます。ま、気のせいであって欲しいですね。事故られたら痛そうですね。痛覚、切っておきましょうか。

……ああ、揺れますねえ。どちらかという気持ち悪くなるような、激しい揺れですねえ。

……さて、どこからお話ししましょうか。彼には聞こえないように小さな声で、彼の昔話をしてみようと思うんです。私、人の昔話を覗くことが出来るんです。悪趣味ですけど、とても面白い趣味だとも思いませんか？……そう。でも目的のお店つくまでは、聞いてもらいますから。聞いてもらいますから。

昔々あるところにい。

深く愛し合っている一組の男女がいました。

見ているこっちが恥ずかしくなるくらいに深く愛し合い、いつも互いの名前を呼び合っているような二人です。勇太。美子。みたいな風に毎日ね。あ、今出した名前はただの仮名なので気にしないで下さいね。とにかくわかって欲しいのは、二人の愛は天を突き抜けて世界を一億週しても足りないくらい深い、ということですよ。

一日中手を繋いだまま離さず、どちらが先に手を離してしまうかなんて微笑ましいことをしあっている時もありました。

時計台に夜中にひっそりと入り込んで、朝日が昇ると共にみんなから見える高い所に二人で立ち、見せ付けるかのようにその場で口付けをしていた時もありました。

二人の名前を花火で打ち上げてから後に、二人自身も花火で打ち上げられて空中で抱き締め合ったりした時もありました。

他にもたくさん、エピソードはあります。でも全部話していると時間が無くなってしまうので、二人が狂気的なほどに愛し合っていたという説得力になるエピソードを語るのは、もう止めになります。

そのカッパルの男性の方が、何で今はバスの運転手になってしまっているのか。

あんなにも目の下に隈を作って、葡萄で腹を壊しながらも一人で懸命に仕事をしているのか。

女の方は何処にいるのか。

……何だか知りたくなってきたでしょう？人は噂話を好むものです。

さて、時は、三年ほど前にさかのぼります。

「美子」

「勇太」

などと言って（仮名ですよ）二人はその日も世紀末ラブでした。

いつ世界が滅ぶとしても二人だけはその手を離さないみたいなの、

圧倒的なLOVELOVEがそこで活気づいていたのです。

しかしその日はいつもと様子が違います。

勇太が不穏な気配というのでしょうか。何か霊感染みた、つまりよくわからない感覚、それを感知していて、小鳥が飛ぶだけで背筋を震わせ、二人の愛の巣の中で多少の物音がするだけでも誰かがいる、と言って怪しむのです。

さて、寝坊してしまった美子は寝ぼけ眼を擦りながら、ふわあ、と一欠伸して彼にこう言います。

「私達の愛を違う世界にも伝えてしまえば良いと思うの」

実は昨日、夜も更ける頃、二人はテレビで流れている『dive 世界越え旅行』という番組を見ながら、誓い合ったのです。約束したのでした。二人の愛を多くの人に見せ付けるということを。それによって世界に愛を教えるのだと。

そのためにはd i v eは都合の良い代物だと思えました。何せd i v eの中には百億近い人間の意識が屯っているという話なので、つまり百億近い人間に愛を伝えることが出来るというのは、二人にとって奇跡です。そしてLOVEです。

美子も勇太も以前からd i v eに興味を持っていましたし、知っ
てもいましたが、元々が田舎人の二人はそういうハイカラな物に警
戒心を抱いていまして、今までそれを遠ざけていました。一般人に
もd i v eは三年前から普通に公開されていたのですから、二人は
かなり文化的に遅れていました。

d i v eコンプレックスです。だいぶね。ぶぶ。

ですが昨日『d i v e世界越え旅行』という番組を見て、二人の
考え方、コンプレックスは消失しました。何故ならば、その番組に
はd i v eは老人でも簡単に出来てしまうお手軽な手続きをし、後
はDCにさえ行けば向こうのスタッフに任せれば良いということが
映されていたからです。

その上でd i v e内の第二深層境界の派手で煌びやかな映像を見
せられれば、ちっぽけなd i v eコンプレックスなんて霧散するっ
てなもんです。

美子は特にノリノリでした。以前買ったまま封を開けてもいなか
ったd i v eに関連する雑誌を、両手で抱えて、ミュージカルのよ
うにダンスしています。

しかし勇太は昨日と違って憂鬱そうです。朝から不吉な予感が止
まらないせいで、何もかもが失敗するような気がするし、少しでも
油断をすれば背後からナイフで刺されるのではないか、という訳の
わからない恐怖感にも囚われています。

二人はひどく対照的でした。喜びと悲しみ。

それが二人に別れをもたらした理由なのだとしたら、やはり”対
”という関係性の重要さは、見逃されてはならないのかもしれないか
もいれませ
んねえ。…ああ、ごめんなさい、少し皮肉気だったでしょうか。

でもかなしい話をする時には、少し皮肉気にもなりますよ。

diveする時、人は境界扉^{ゲート}という場所を通ります。そこを通り過ぎることによって第一深層境界にdiveすることが可能なんです。で、問題はその境界扉^{ゲート}にありました。二人は知らなかったのです。質の悪い境界扉^{ゲート}は場合によっては恐ろしい結果を招きよせるということ。多くの一般人の方々はそれを知りながらも気兼ねなく質の悪い境界扉^{ゲート}を使います。時間帯によって事故が起こりやすい時、事故が起こり辛い時、とありますので事故が起こり辛い時に境界扉^{ゲート}は利用すれば、事故はほとんど防げますから。

あっても服が上手くデータ転送されないだとかっていう、軽い、笑って済ませるものなのが通常です。

しかし美子さんには、様々な偶然が重なって、そして、大凶としか言い様が無い不運も襲い掛かったことによつて。その事故が生じたのです。DCスタッフがサポートしたにも関わらずその事故が生じたのです。確率で言えば0.00000001%みたいな、そういう事故が、美子さんの身に。

二人はdiveしたらまずは、皆に手を繋いでいる姿を飽きるほど見せ付けてやろう、と約束してからPCとsympathyしました。勇太には良くわからない恐怖感があったのだからdiveは控えるべきだったのかもしれませんが。少なくともそうしていれば、その最悪に不運な出来事は起きなかったのかもしれませんが、勇太はdiveすればその恐怖感なんて忘れられると思っっていました。diveに希求していたのです。恐怖を取り除いてもらうことを。

二人の手は、繋がれませんでした。

二人が愛を見せ付けることにはなりませんでした。

二人は百億人に愛を教えるつもりでした。

二人の願いは叶いませんでした。

二人は離れ離れになってしまいました。

美子さんは第零深層境界に堕ちてしまったのです。

そこは零化した刻跳者が封印されるためだけにある、無の空間で

す。

その場所にあるのはひたすらに、無、です。そこに意識を墮とした者は無に包まれて、意識を無へと還していきます。意識体が無になった状態とはどんな心地なのか。それは墮ちた者にしかわかりません。決して消えてしまわないのです。しかしそこに墮ちた者に襲い掛かるのは、ひたすらに、無、です。覆われて、二度とそこからは出てこれません。

意識体にとつての牢獄。罪を犯してもいないものが踏み入るにはあまりにむごたらしい場所。それが第零深層境界です。

勇太さんはd i v eした先第一深層境界で、当然先に到着していました。彼女を待つ時間は長く感じるから嫌だなあ、と思いながらもテレビで見た第二深層境界の賑やかさを思い出して、心がわくわくしました。気が付けば恐怖など消え去っていて、やっぱりd i v eして良かった、これで美子とこのd i v e空間で楽しむことができる、多くの人々に俺達の愛を見せ付けることができるんだ、とうきうきして、待っていました。

ずっと待っていました。ずっと待っていましたずっと待っていましたずっと待っていました。

しかし手は空いたまま。いつも繋ぐためにあつたその手は、空白を握りしめます。

勇太さんは第零深層境界に彼女を置いてきてしまいました。

だから彼は一人になりました。

不思議に思つて胸騒ぎを起こしながら現実世界に戻った彼は、人形のようにコトン、と息もせず横たわる美子さんを見ます。その美子さんからは大切な何かは抜け落ちていましたから、青白い肌です。

勇太さんはずっと泣いていたそうです。一日中泣いていたそうです。

やりきれない思いに覆われて、無に墮ちた彼女の不幸を理不尽だと感じながら、彼はしかし別れるしかありませんでした。美子さん

との身体とも。それはただの器。大切な、意識はすでに、無、に覆われてしまったから…。

勇太さんはそれから後に、無、に脅えるようになりました。

DCスタッフやマスコミ、研究者、そういった方々に悲劇のカップルとして話を求められ、研究の対象として見られ、しかしそのおかげで今回起きた事故についての情報のほとんどを、彼は知ることが出来ました。

第零深層境界。境界扉^{ゲート}。零化。刻跳者。Dive。そして無。

彼は想像しようと思いました。そうすれば美子さんに近づけると思ったからです。

無、に覆われるとはどういうことなのか。まったく検討も付きませんでした。彼は美子さんを忘れないために、少しでも彼女に報いてあげることが出来るようにと、せめて彼女が体験していることを、自分で検討し、感じてみたいと心底より願いました。しばらくはdiveしようとする恐怖に囚われましたが、自分も第零深層境界に堕ちれば美子のが理解できる、と狂気染みてもいるが、誠実でもある、そういう発想に浸れば彼は何度でもdiveすることが出来るようになりました。むしろ事故の起きる危険の高そうな時間帯を狙って、わざと最底辺の境界扉^{ゲート}を使ったりもしました。しかし幸運か不運か、勇太さんが第零深層境界に堕ちることはありませんでした。

やがて現実逃避のためにdiveに入り浸るようになり、何時しか、完全に肉体を捨て、彼はdive世界の住人となり、バスの運転手をやるようになったのです。

彼にはわずかでも平穩は訪れません。無を体験するために、思索したり、diveから情報を引っ張ってみたり。それを繰り返していたある時、彼は何かを閃いてしまいました。それは正に求めていた無の感覚なのかもしれない、と彼は思いましたが違いました。それは、何だか名前の付けられない、もっと恐怖的な、差し迫ってくるような感覚でした。

それがあまりに恐怖たる感覚であるために、彼は発狂寸前まで行きました。ただでさえ現実世界で生きていた時にもそういう症状を抱えていたのが、悪化したようでありました。

彼は、無、が怖くなりました。無、について考えること自体に、恐怖するようになりました。

彼は無から遠ざかりたく願います。だからほとんど眠ることもしません。必要最低限の睡眠しかとりません。そしてずっと、何か一心に打ち込んでいれば無の恐怖から逃れられると知った彼は、ひたすらに仕事をしました。バスの運転手だけでなく、様々な、雑用的な仕事でも何でも、ある仕事をこなす事でそれに心を傾けました。それによつて無から逃れようとはしました。

だから、美子さんのことを忘れていくということでもありました。美子さんは無です。美子さんを忘れずにいようと無を知ろうとしていたのに、そこから逃れるようになったのですから、当然勇太さんは美子さんから逃げる格好にはなりません。

勇太さんは自分がそういう行為をしているのだと、ある時気が付きました。

そして混乱します。また発狂寸前まで行きます。愛〓美子〓無〓ダメ〓恐怖。愛〓美子〓無〓ダメ〓恐怖。愛〓美子〓無〓ダメ〓恐怖。愛〓美子〓無〓ダメ〓恐怖。愛〓美子〓無〓ダメ〓恐怖。愛〓美子〓無〓ダメ〓恐怖。愛〓美子〓無〓ダメ〓恐怖。愛〓美子〓無〓ダメ〓恐怖。愛〓美子〓無〓ダメ〓恐怖。愛〓美子〓無〓ダメ〓恐怖。

勇太さんの頭の中で、ずっとこれが回転していました。彼は今でもこの牢獄に囚われています。美子さんとはまた別の、無とは全く違う不運だと言えましょう。彼にはずっと言葉が回っています。美子さんには一つも言葉が回りません。

やはり”対”なのでしょう。対だからこそ、真逆たる状態に落ち着いたのかもしれませんが。

ああ、対。対とは何で、何て皮肉なんでしょうかなしいんでしょう怖いんでしょう。

勇太さんは今、あんなに萎れた顔をしています、昔はもっと元

気でした。華やかでした。

しかしそれも過去のことです。

彼は今、また別のことに囚われています。それは何だと思えますか？

ヒントは、刻跳者。それともう一つのヒントは、境界扉^{ゲート}は影響し合う、ということ。

さあ、実はこのバスは私のオススメのお店になんか到達しないのです。

予定ではもう少しで遭遇することになっています。

……………彼は復讐を為すためにバスを走らせている。

もちろんその復讐は果たされないのでしょう。ですがそれで彼の気持ちも少しは、治まるに違いありませんから……………。

ほら、見えてきました。何だか道路の真ん中で軽犯罪者を取り締まるようなことをしているようですが、ふふふ、チャンスです。ね。運転手さん。轢いてしまえば気分がスツとするのではありませんか？ まああの刻跳者はA級ですから、車で轢いたくらいでは怒ったりもしませんよ。

さあ、やっつけてしましましょう勇太さん。

アクセル全開！ そうすることであの男を吹き飛ばせ！

M o u t h p u t t i n g o f t h e e a r t h ! !

迫真

TAGSIGNはその格好をしている者を放置するわけにいか
なかつた。

あまりに奇抜。異様すぎるが為に、放っておくことは、治安維持
の役割も任されている刻跳者としては許されない。

これから来るであろうバスに”轢かれなくてはならない”のだけ
ら、痛覚を切つてはあるが心の準備が全く必要ないというわけでは
無い。何せ、巨大なバスが時速百キロメートル程で迫ってくる予定
らしいのだから。

まあ予定の時間までは十五分はある。その間に、この訳のわから
ない格好して、訳のわからない行動をしている、怪しい不審者。こ
れを処理して、痛覚解除禁止、という程度の罰でも与えようと模索
する。軽犯罪者には軽罰則を与えることになっている。軽罰則には
様々な種類があるが、どの罰を選択するかはその犯罪者を取り締ま
った者に委ねられる。

TAGSIGNの与えようとする痛覚解除禁止は、まあ、軽罰則
の中では評判が良くも悪くも無い、丁度その軽犯罪に見合った罰則
と言った所だ。痛覚など切らないで生活している意識体も多いから、
それに罰則を掛けられても痛くも痒くもない、と言える者はいるか
らだ。

まあ逆に、痛みなんて感覚を忘れる程に常に痛覚を切っている者
からすれば、辛い罰則だが。

さて、TAGSIGNはその軽犯罪を犯している、小さき身長
の者に近づく。

『diveしている意識体の全ては、公共空間においてその公共た
るを汚す行為をしていると罰与者に判断されないよう、常に公共を
汚すことの無い姿形または行動、をしなければならぬ。なお、仮
にそれに違反していると罰与者に判断された時に、あなたがその罰

与者の判断を間違っていると思うならば罰を与えられないよう抵抗をすることは許されている。抵抗の手段については他所に掲載しているのをそれを参考にして欲しい 『公共空間法第193条』
TAGSIGNは判断した。その者は、公共空間法第193条、
に対して違反している、と。

刻跳者は罰与者としての権限も与えられている。罰与者はその名の通り、罰を与える者ということ（dive内で）。故に、他者の行動には常に目を光らせなくてはならない。なお、刻跳監視委員会の面々全ても罰与者としての権限を与えられる。罰与者とは罰を与える権限を法の名の下に与えられし、ある種、恐ろしくもある存在。こういふ所も刻跳監視委員会が『敵』を多く作る所以だろう。

冤罪を与えてしまうこともあるからだ。その冤罪が積み重なれば多くの『敵』は作られる。

だからTAGSIGN自身は、あまり罰与者としての権限を使うことが無い。リスクだからだ。犯罪を取り締まった刻跳者には、“刻跳者としてのポイント”が付与されるわけのだが、そのリターンを顧みるにしても、冤罪だと後に判明した時にはその罰与者自体が罰されることになるし、またやはり人を罰するということは憎まれる原因になるのだから、そういう憎悪を向けられること自体がかなりのリスクだ。自らの人生にとって。

人に憎しみを向けられるのは、心地悪いことだ。少なくともTAGSIGNはそうだ。

だがTAGSIGNは今現在、残り時間も十五分と少ないというのに、罰をその者に与えようとしている。その小さき者が、明らかに公共空間法第193条を違反していたからだ。そりゃもうハッキリ明確に、違反している。

頭部はナメクジ。身体はゴキブリ。両腕はムカデ。両足と背中に生えている羽らしきものだけ、何故かカラス。そういう編成の肉体を仮宿にしている小さき者。大体、八十センチメートルくらいだろうか。そんな小さな形をしている癖に、その姿形も、そして行動も、

奇抜。

地面を這っているのだ。綺麗な歩道で。

何がそんなに不自然に見えるのかと言えば、その奇抜な格好で奇抜な行動をしているところであろう。奇抜な格好をしている者が奇抜なことをしているのは自然なことなのかもしれないが、残念ながら自然に見えない。足と羽がガラスだから這う必要も無さそうなのに、頭がナメクジだから地面を這いたくなるのだろうか。いや、中身は、つまり意識は人間の物のはずだ。d i v e に参加できるのは人間だけなのだから間違いない。そしてあれはd i v e 内の創作物などでもないということも、相手の個人情報を見けるということからわかる。だからあれは一人の人間が、わざとああいう姿形をしてわざとああいう行動をしているのは間違いない。気持ち悪すぎる。性別は男らしい。そして年齢は三十七歳らしい。公開されている情報はこれだけだから、おそらくフリーアカウントだろう。フリーアカウントとはいろいろと制限がかかるが、大体の個人情報を公開しなくても良いとされている、まあ自由なんだか不自由なんだかわからない状態だ。

フリーアカウントでなければ、せめて本名くらいは公開されるというものだ。

勿論、本名は常に公開されているわけではなくて、覗き込まなければそれを見ることが出来ない。覗く、のだから、向こう側は覗かれていることに気付くことが出来る。だから普通、本名が公開されている状態と言えど、あまり多くの人々は本名を覗きはしない。それが嫌がられる行為だとはわかるのだから。

罰与者に限っては、その覗きたい相手から気付かれないで相手を覗き込むことが出来るのだけれど。（これも罰与者の特権。だから刻跳監視委員会というのは敵を作るのだと思う）

T A G S I G N はその特権はいらぬ、と思う側の人間ではあるが、やはりこういう特権は犯罪を取り締まりたい時には便利だな、と思える。覗いても本名が閲覧できないことから、相手がフリーア

カウントだとわかることが出来た。こういう軽い嫌がらせ行為をする人間はフリーアカウントを利用する事が多い。だから相手がフリーアカウントだとわかれば、罰与者側としては相手が確信犯だと認識できる良い判断材料になる。

確信犯だとわかれば冤罪の可能性は無くなるし、相手も言い訳をし辛くなるし、それに相手から反論されて簡易裁判を起こされてもフリーアカウントを利用していただけで裁判官や裁判員たちの心象は悪くなるものだ。よって、フリーアカウントを利用して軽犯罪を犯した奴には、罰与者としては非常に声を掛けやすい。というかもうそれは、声を掛けなくては罰与者としての業務怠慢と言って良い程に完璧そいつは黒である。ポイントが勿体無いという話でもあるし、*divide*内の治安を守るためには業務怠慢をしてはいけないという話でもある。

「ちよつと這うのを止めてもらってもいいですかね。罰与者です」
TAGSIGNは軽い感じで声を掛ける。軽犯罪者相手だから、軽い感じで。

しかし頭部ナメクジ男は、声を掛けられたというのに、地面を這うのを止めない。

一心不乱と言い換えても良いくらいに這うことを精一杯しているのだが、声を掛けた途端にそのスピードが速くなった。そのせいで余計に気持ち悪い動き。TAGSIGNはうんざりしつつ、仕方が無いので彼を仮牢獄に入れて、話を無理矢理にでも聞かせることにする。

「prison」

透明たる四角の箱を作り、その中に頭部ナメクジ男を閉じ込める。即席の牢獄。これも罰与者に与えられている権限。

頭部ナメクジ男はそれでも這おうとする。即席の牢獄の壁を、ムカデの腕を器用に使うことで登ろうとするのだから、執念のようなものすら感じさせられる。壁から遂に天井へ。そしてパタリと落ちこちて、ゴキブリの身体の、その腹を天に向ける不様な格好となっ

てようやく頭部ナメクジ男は落ち着いた。それでもムカデの両腕が懸命にもがく姿が、TAGSIGNにはひどく醜くて気持ち悪く見える。

不快を抑えつつ、不快から派生するイライラも抑えつつ。残り時間は十二分。今日は時間に迫られてばかりだ、とふと感じながら。

「その変態。あなたの行動と姿形は公共空間法第193条に違反していますので、刻跳者TAGSIGNが法の名の下に、あなたを罰します。これは既に決定事項ですから、反論をしたい場合は簡易裁判所に訴えを出してください。これよりあなたに痛覚解除禁止軽罰則を与えます。怪我などをしていてその痛覚を切つてある場合も、それは強制的に解除されますので注意、というか覚悟、をしてください。では、執行しますよ」

TAGSIGNが言葉を羅列している時、その頭部ナメクジ男はじたばたするのを止めて、ずっと聞き入っているようだった。ちゃんと言語は理解できるらしい。ややこしくなくて助かる。さっさと終わらせよう、と思う。

TAGSIGNは脳内で軽罰則を対象に与えるための手続きをした。

すると対象、つまりナメクジ頭部男の頭上から、赤紫色の雷が落ちる。落雷。

それが罰の稲妻。脳内ではぴりりと痛みを思い出させる電流が流れたことだろう。

そして彼に痛みを思い出させた途端、彼はノタウチ回り始めた。

内臓の何処かが病、もしくは損傷しているのだろうか。先ほどまでとは違った様子の醜さ、気持ち悪さで、prisonの中もがいている。痛みを思い出させられた彼。ショック死とかする可能性はあるだろうか、と冷や汗を少し掻く。これは痛覚解除禁止は間違っていたかもしれない、と思えるほどに苦しそうにもがいていた。姿形が異様だから、猶の事もがく姿が印象的で、怖い。

だがもう罰は与えたのだ。ならば冷や汗を掻いている場合ではな

い。

「お気をつけて。期間は一月月です。姿形は強制的に普通の三十七歳男性に見えるように変えますよ。これからはこういった迷惑行為はしないようにしてください」

TAGSIGNはprisonを圧縮させる。そして圧縮されたprisonが頭部ナメクジ男の表面に纏いついて、へばりついて、蛍光灯のように眩しい光源となる。光源よりの輝きが止んだ時、prisonに纏いつかれた彼は、姿形が”三十七歳男性らしく”なる。しかしそれでも地面を這おうとするのだった。顔は痛みのせいで苦悶に満ち、脂汗みたいなものを額から流しながら、少したるんでいるお腹と太い足を引き摺るようにして、地面を前へ前へと這っていく。その姿形。その行動。

「……………」

何かこちらを戦慄させるような、そういうモノを感じさせられて、TAGSIGN、しばらくの間その男の後姿を見送った。だがあんな奇抜な行動をしている奴を、やはり放置しておくわけにはいかない。対処は面倒だが、苦情が来るのも面倒だ。

TAGSIGNはオペレーターに繋いで、他の刻跳者にあの軽犯罪者の対処を任せようと思いい脳内でアクセスをしようとする。と、丁度オペレーター側からアクセスが掛かってきた。SERIだ。

アクセスに応じて早々、

『何やってんですかあ！』

と鼓膜が破れそうになるくらい大きな声。

うるさっ、と思いつながら、

「軽犯罪者を取り締まっていた。まだ時間はあるだろ…。でさ、」
と矢次早に用件だけ述べてさっさとアクセスを切ってしまうおうと思いい、言葉をつらつらと並べて向こうに喋る暇を与えないで喋ると、案外にも冷静に対応してくれた。

『わかりました。ではTAGSIGNの位置から近くにいる刻跳者に、その男性の位置情報を送っておきます。痛覚解除禁止罰則を与

えて、三十七歳男性に姿形を変更させたのですね？ で、名前はわからず、フリーアカウンツで、奇怪な行動をしているのですぐに判別できると思われる……と。了解しました。近くの刻跳者にこれらのデータを送っておきます……では、TAGSIGN」

「……………」

『あまり気分の良いものではないと思いますが…………』

「かなり良くないよ。でも、これも仕事だろ…刻跳者としての」

『そういう真面目な姿勢。私、とても素晴らしいと思いますよ』

「…………慰めてくれるくらいなら、代わってもらいたいんだけどな。

この役割」

『…………あなたでないと駄目なのでなければ、勿論、代わってあげてもいいんですけど…………』

「白々しい嘘は付かないでいいよ。…………さて、残り時間五分。じゃ、軽く轆かれてきますかね。時速百キロを超えると予測される、大きなバスに、さ」

『頑張つてね、TAGSIGN!』

「……………」

無言のままアクセスを切ってから、TAGSIGNは指定されている位置に向う。すると、その近くにちょうどベンチがあったので、そこに腰を下ろす。青いベンチ。そこで座ったまま、残り二分でバスが到達すると伝えられる。タイマーが音声を発してくれたのだ。

平和を象徴するような純白の色をした鳩が、数羽でまとまり空を飛んでいく。和やかな風が吹いて、わずかに心地よい。ああ、こういう二分間もあるんだな、とTAGSIGNは感じながら、人指し指で頬を掻いた。

その瞬間、だった。気が付いたのは少し遅くて、もし和やかな風に気を取られていなければ、仮にもA級刻跳者であるTAGSIGNなら、気が付けたかもしれない、が、こびりついた。

「あ……………」

人指し指で頬を掻いたはずなのに、ぬめり、とした感触。慌てて

人指し指に目をやれば、そこには緑色をしたアメーバのようなもの……。
「やばっ……」

prison ameba . TAGSIGNは焦る。情報を探るまでも無いこいつは先ほど自分が使ったprisonの亜種だ、とはわかっていて、がわかっていてだけでは駄目だ対処しなくては、と思考している間に口を塞がれて手足も拘束された。まずい、と思いつつも気が付くとprison amebaに呑み込まれたせいで身動きは取れない。

水の中に浮かんでいるような感覚。呼吸は出来るが、この状態では身動きも反撃もできない。

「さ、さささつきはよくも痛い目に合わせて、いただけました」
声。男性の声。典型的三十代後半らしい声帯。TAGSIGNは閉じ込められた水の中で、はつきりとその声を聞く。これはもしかすると……。

犯人の見当に付きながら、身動きが取れない中でも情報を得ようと周囲を見渡すと、さつきまで腰を下ろしていた青いベンチが無くなっていくことに気が付く。

(ちっ……トラップだったのか！)

悔やんだ所で引っかけってしまったのだからもう遅い。

前を見ると、何時の間にかさつきの三十七歳男性、頭部ナメクジ男だった奴がいる。

這っていたあの気持ち悪い輩に、まんまとprisonをやり返されたというわけだ。

残り時間は後一分……。仕事に間に合わなくなる……！

こいつを何とかしなければ、と思うがフリーアカウントの癖に防壁が堅いらしく対処法が脳内で解答されてくれない。ちっ、と悪態を付きたいが水の中ではそれも出来ない。オペレーターにサポートしてもらいたいが、prison内ではアクセスは不可。八方塞がり……。

改めてその男を見る。頭部ナメクジ男だったそいつは、TAGSIGNの施しによって何処にでもいそうな、特徴が一見では掴めない三十七歳男性だ。しかし表情が、これが狂気に染まっているという奴なのだろうか、般若の面を被っているがごとくに、目エ吊り上がり、口が三日月のように曲折し、牙のように歯が鋭利な刃物のよう。特徴が出辛いパーツの顔面を設定したというのに、思わず通り過ぎる人が二度見してしまうような表情は確かに鬼。

「ザアマミロ塵の屑の刻跳シャ！　ワレ、そなたに一矢報いたことに感激シウル感情DA！　オマエ轢かれルんだロウ、ワレ、貴様覗き込みスベテ盗聴済みダ！　お、お、おな、同じ眼二遭わせてヤレ！　コノママprison二入れたママ動かして、っ痛覚ヲヲ切ツテヤツテ、ソ、そのママぶつかってしま、えばオマエは木っ端微塵の塵イイイイDA！　ザアマミロ屑の屑の刻跳シャ！　シネ、シネ、シネ、シネ、痛ミミミヲ知レ！」

その男は随分と興奮している。般若の表情のまま両手で頭を抱えて、苛付いているかのように足を地面に何度も振り下ろしているのだ。そして男が手を振りかざすと、prison amebaがドロドロと空气中を移動し、歩道から大通りに移動する。

丁度、時間はぴったりのようだ。向こう側からバスが一台、TAGSIGNの目にも見える。

「ギャハハハハハハハハハハハハハハハハア！　そのバスと接触する瞬間に、prisonカラ解き放ツてヤル！　ソノ時オ前は耐えラレる！？　体ガ壊レテ意識が淀ム！　その時二、ワレが弱つタ貴様に侵入スレバもう貴様はオシマイオシマイオシマイ、ワカツテルカア！？　ザアマミロ屑の屑の刻跳シャ、シネ、屑、ゴミGAシネ！」

（ちくしょ……ふざけんな……いきなり……）

何か毒でも仕込まれているのだろうか、TAGSIGNの意識は既に朦朧としている。

本当に、轢かれたらオシマイかもしれない。

そう弱気になるような毒が仕込まれているのかもしれない。わからない。男の声が脳内に入り込んできて染み込むようにしてそれが直接恐怖に変わる怖い怖い何故僕がこんな目に遭わなければならぬのだろう僕は死にたくない消えたくない当たり前だクソ糞糞がああああでももうオシマイだもうダメだ死んでしまふ僕はこの世から意識体として消失してどこにいくのだろうこんなことなら第零深層境界に入ったほうがマシかもしれないああいやだいやだ

目の前にバス。

TAGSIGNはヘッドライトの前、一瞬だけ運転手の顔が見える。

(なんであなたはそんな、嬉しそうなんだ……)

その理由はわからないままTAGSIGNは、轢かれ。

そうになったのだが、轢かれなかった。

TAGSIGNはprisonから解放され車道に横たわる。

狂っている男が狂気の声を上げる。おかしいおかしいおかしいおかしい、と。

直前まで百キロの速度で迫ってきていたバスが、止まった。だからTAGSIGNは轢かれなかった。

その原因。その要因。

TAGSIGNは失いかけている意識の中、幻ではなく現実の元として、間違いなくそれを確認した。バスを巨大な全身を使って、受け止め、後退りしながらも、最終的には完全にバスを停止させてみせている、その大男は……三……。

そこでTAGSIGNの意識は、ばやけていく。

巨大なる魔王、瓦罽

「これで死んだと思つたの二！ 才前、貴様、邪魔シタ！ ワレのジヤマヲしてワレを困らせる！ 怒らせる！ 許すまじ！ オマエ、せつかくワレ、刻跳シヤの技を盗んだのに、その成果ヲ邪魔シた、邪魔邪魔邪魔邪魔、死ネエ！」

バスを止めたのは三メートル程の巨大さを誇る大男。

突然の邪魔が現れたことで興奮した三十七歳男性は、般若の面は変えないままに、大男に牙を向けて迫っていく。

バスを止めた大男は時速百キロメートルを出していたそれを直に受け止めたにも関わらず、わずかにも体力を消耗しておらず、息を切らしていない。狐のように横に鋭い、殺意の含まれている両眼で相手を威圧する。

三十七歳男性はその殺意を向けられただけで、小便をちびっているかのような姿勢になった。

「ヒヤッ！ 恐ろしい！ オマエなんだ何なんだ、恐ろしい恐ろしい……」

滑稽にもその場で立ちすくみ、いやいやと顔を横に振りながら、三十七歳男性の般若の面は、ゆっくりと泣きつ面のようなものへと変わる。

三メートル程の大男は、その怪力でバスを持ち上げて振り下ろし、地面にめり込ませてタイヤが前進できないようにしてから、バスより手を離す。

そして実際に小便を道路に垂れ流してしまっている三十七歳男性の目前にまで近づく。

三十七歳男性から見たその大男は、まるで魔王のように映る。屈強な、誰からも退くことの無さそうな圧倒的威圧。切れ長の目に射

抜かれているだけなのに、もう立ち上がることにすらさせてもらえない……。

「貴様、遠くから見ていたが、様々な虫とかで構成されていたその奇抜な格好。ヤツに似ているな。ヤツの知り合いか？」

そう問われたが三十七歳男性には、まったく訳がわからない。

悪態を付くことしか思いつかない。

「オ、オマエの、せいで……塵……クズが……シネ……シネ……」

大男はそんな彼の様子を見て、あの動物ばかりで構成されている変態とは関係のない男か、と判断した。

「そうか。なら貴様が死ぬといい」

「ヒツ……ヒヒツ……ワレ……逃げる……この身体力ら、d i v e 力ラ……ヒヒツ……バ、バーカ……ヒヒツ……」

三十七歳男性は、危なくなったらd i v e 世界から抜け出ようと企んでいたのだから、まだ悪態を付く余裕があった。

「ヒヤ……あッ？……あッ？……」

しかし、d i v e から抜きたいと脳内で処理しても、させてもらえない。こんなことは始めてだった。d i v e 内では、肉体が生きている限りは、何時でも現実世界から戻れるはずだった。そして肉体を失っているはずは無い。なら、どうして……。

戸惑っている彼に、大男の嘲笑いが向けられる。

それで彼は察した。この大男がこちらに何かを働きかけているから、抜けることが出来ないのか、と。

彼はそれを悟った瞬間に、完璧に余裕がなくなった。フリーアカウトがd i v e 内で死に近いショックを与えられた時に、現実世界に復帰できなくなる程、意識が損傷してしまう確率は二十五%。

「神にでも祈るんだな。貴様が他者の力を盗む能力を何処のルートで手に入れたのかは興味があるが、まあ、いい。……死の覚悟は、できているか？」

できているわけがない。

三十七歳男性は泣きたい思いに駆られる。大男が祈りのポーズみ

たいなのを取っているのが、涙のせいで霞んで見えてくる。でも涙を流すのは嫌だ、と思った。そんなみつともないことをできるか、と彼は自分に言い聞かせようとする。それに六十五%の確率で生き延びることが出来ると考えれば、さほど恐れることでもない、と心を落ち着かせようとした。

しかし大男が振り下ろそうとしている拳は、あまりに巨大だった。まるでプレス機。三十七歳男性の身体すべてに影を作る程の、圧倒的な、拳。それを見せ付けられれば、身体は自然とふるえてしまう。ふるえは止まらない。

「最後に教えてやろう。私の名前は、瓦尋^{がじん}だ。もし貴様が生き延びたら、この名前を覚えておけ。復讐をしたくなつたなら、何時でも命を狙ってこい。その度に、貴様を葬ってやろう」

「ヒ……ヒャ……ハハッ……」

「死ね」

圧倒的暴力の一撃を瓦尋は男に躊躇せず叩き付け、それによって真っ赤な花がコンクリに咲いた。強烈な匂いを放つようにしつかりと設定されている、身体の臓器が放つリアリティー。その返り血を拳に垂れるほどつけて。

「…ふん、虫ケラの血を拳に付けてしまうというのは、不愉快なものだな……」

脳内で処理を施すことで、血を拳からサラサラに消失させた。

その後には彼は、背後に振り返る。TAGSIGNが倒れている方へと。

その瓦尋の両眼が捉えた光景は、そのTAGSIGNが、胸にナイフを突き立てられている所。

瓦尋は両手の親指と人指し指を使って、四角を作り、その光景を額縁に納めるような仕草をする。

(ある種、何か絵になる状況だ。女が死んだことを受け入れられない男が、その要因の一つを作り出した対象に復讐をするために、ナイフを突き出す。そして刺される側の男はそのことを知っていて、

わざわざその鬱憤を晴らしてあげるために刺されなくてはならない。ふむ、人間の意識というのは真………複雑怪奇………か)

TAGSIGNの着ている黒スーツに赤黒い染みが広がっていて、やがて溢れて大通りに赤い血は流れていく。命の結晶。血。それは人が人である証明。仮初めの血であるからこそ、匂いや色を本物と同じくするべきとされ、dive内でもしつかりと身体より流れ落ちる。

「優しいことだな。……いや、大変ですね、とねぎらってやるべきかな。………にしても、復讐に取り憑かれている者の顔というのは、ある意味では壮観だ」

復讐は夢。絶望を失った人が生にしがみ付くための一つの希望の形。

だがそれは人の身を焼くが故に、自らの身も焼く。復讐の後に待つのは白い灰だろう。

燃え尽きた後には、風に吹かれるのみ。

ナイフを突き出した男は叫んでいた。たった一人の名前を。

それがおそらく愛し合っていた者の名なのだろう。彼は繰り返し返している。

「美子！美子！美子！美子！美子！美子！君を俺は忘れない！無に堕ちた君の代わりに、俺は永遠にこの世で君を覚え続けているんだ！俺にはもう肉体なんて鎖は無いから、永遠に俺はいなくならないんだ！だから美子！俺はずっと君を忘れない！そして忘れないために、こうして君に関連する全てに俺は……ああ、ああ美子オオオオオオオオオオオオオオオオ」

ハックによって入手した情報によればその男の名前は、勇太。

ありえない確率の事故に遭遇し第零深層境界に堕ちてしまった恋人。自らは無になれないとわかった彼は、無になることを諦めた。その代わりに自らは永遠に美子を忘れないで生きると誓い、彼は復讐をすることで彼女を忘れまいとするのだろうか。復讐される方としては迷惑だろうか。

境界扉と境界扉は影響し合う。

美子さんが質の悪い境界扉を利用した時に、丁度質の良い境界扉を使った者がいた。もちろん各世界で同時に使われているのが境界扉だから、それが起きるのは仕方が無いことだ。同時に様々な境界扉が影響し合うのも、当たり前だ。

問題だったのは、最上級に質の良い境界扉と、最下級に質の悪い境界扉が影響し合ってしまった、ということだった。影響し合う境界扉同士その質差が大きければ大きいほど、それによって事故が引き起こされる確率は高くなる。

その時最上級の境界扉を使っていた人物が、A級刻跳者TAGS IGNだったというわけだ。

たまたまのことだ。それに、最上級と最下級の境界扉が影響し合ったそのせいで、事故が起きたというわけでもない。一因にはなるが、美子さんの事故のもっとも原因は、まさにその不運としか言い様が無い。

だが被害者からすれば、やはり事故が起きる確率をわずかでも高くした者を憎く思う物なのかもしれない。

美子さんが利用した境界扉の質がもっと良ければ。

もっとも質の良い境界扉を使う、TAGS IGNと影響し合わなければ。

DCのスタッフのサポートがもっと優秀だったならば。

第零深層境界などというものが、そもそも作られて無ければ。

理由は、探せばいくらかでもある。炙り出すように。

(……………きつと彼の復讐はまだ続くのだろう。刻跳監視委員会の連中は彼が大きな事件を引き起こさないよう常に監視するというのだから、ご苦労なことだ。…殺してしまったても良いものを、殺さずに一般人が巻き込まれることが無いよう、未然に防ごうとしてやるのだからな……………)

勇太という男は笑いながら、道を駆け抜けて行って消えていく。

凶器はすでに仕舞われて、変質者である彼は街の人々から見れば

恐ろしい形相だろう。

それでも勇太という人間が牢獄に囚われないのは、奇妙な話だが、そういうものらしい。

逮捕すれば質の良い境界扉を独占している刻跳委員会が事件の原因ではないのか、と糾弾されるということから、彼を捕まえ放置しているのだろうか、という影での噂だ。

「まったく。碌なものではないな、刻跳監視委員会というのは。その飼犬である貴様も、碌なものではない。そうだろう、TAGS I G N。貴様、何時まで寝ているつもりだ？」

瓦尋の耳に、TAGS I G Nが普段利用していると思われる盗聴している通信から、音声が届れてくるのが聞こえる

女の声だった。オペレーターの声だ。たしかSERIEとか言う。

彼女がTAGS I G Nを必死に呼んでいる音声、執拗に聞こえてくるさい。

「ふん。黄色い声援を耳にして任務を遂行しようとするから、あんな雑魚の畏に引っかかるのだ。そして貴様は私たちの組織に利用される。さあ、我らが組織の部屋に招待しよう。黄色い声援とお別れを告げることもさせず申し訳ないが、世は無情というものだ。……

…ワープ！」

瓦尋は祈りのポーズを取る。

どうやらそれは彼の癖らしい。右手を拳にして、その右拳の三百六十度をパーの形をした左手が回転する。そして一礼。

祈りが終焉すると同時に、TAGS I G Nと瓦尋、その両者が虚空に消える。

街。ベルサクネは、これにより平穏を取り戻した。バスが運転手をなくしたことによって道路の通行を邪魔しているから渋滞ができてしまっただけだが、血みどろの戦いよりは幾分も平和なものである。

乗客だろうか。渋滞の原因であるバスの中から、一人の女がでてきた。

女は肌着のように薄い白いローブだけを纏い、軽やかな調子でバスの昇降口を降りる。

風のように軽やかで、花のように何時どこかへ消えても可笑しく無さそうな、そんな雰囲気携える女性であった。

彼女は一人、それもすぐ空気に包まれてしまう小さな声なのだが……
…呟く。

「ああ、ああ。勇太さんと美子さん。ああ、ああ、仮名じゃなかったんだなあ。ああ、どうしてだろう仮名じゃなかったんだあ…私言いでちやっただ、すごいなあ……。私、次はどこに行きましょう。楽しいところがいいなあ。世界が終わってしまうような、そういう楽しくて……ああ、対を愛するあの男性は何処へ行くんでしょう…
…ああ、誰か私の話を聞いてくれないかな……かなしいお話を、いつまでも、いつまでも……」

彼女もまた、虚空に消える。

M o u t h p u t t i n g o f t h e e a r t h .

流れる合言葉。

判明

刻跳監視委員会第二・五深層境界支部オペレーター室。

仄かな青い照明が全体を包み込んでいる、その場所。

小型のディスプレイが幾つも設置されていて、そこから発されるバツクライトの白い光もある。

そこにて各オペレーターたちが業務をこなしている。四十人ほどがそれぞれ、声を出して、刻跳者たちのサポートや、事務処理などを行う。

そういうオペレーターたちの内の一人、SERIがヘッドホンを外した後、涙目になりながら慌てて立ち上がると、なんかダンディな姿勢で椅子に座っている上司の元に近づき、彼とこう話をした。

「ジョーシ、ジョーシ！ どうしましたよう。私、どうしたら良いのかわかりません！ TAGSIGNと連絡が……！」

慌てているSERI。

ジョーシは平然と答えを返す。

「それは、いつものことじゃないかね。TAGSIGNが例の男の復讐心をしつかりと晴らしてくれたのはこちらでも確認している。仕事が終わったから、いつも通り、ぶらり旅に出たのじゃないかな？」

「違つんです！」

「ほう、何がかな？」

「彼は仕事が終わった時には、毎回必ず私に連絡をくれるんです！一回も欠かしたことが無いんです！」

それを聞いたジョーシは表情を険しいものに変える。

「……………それは、本当かい？」

「それにアクセスに応じてくれないのではなくて、アクセス自体が繋がらないんです！」

「……………ぶむ。……………TAGSIGNくんが……………」

この会話はオペレーター室その前方で仕事をしている者たちには、耳に聞こえた。

A級刻跳者TAGSIGNと言えば、刻跳関係者では知らない者はほとんどいない。

仕事仲間であるオペレーター達であれば、彼のことが自然耳に入ってくるのは、業務中と言えども当然だった。

三人娘はSERIEの想いを知っている。

SERIEはTAGSIGNに思い焦がれている。本人はあまり自覚が無いようで、自分が良くTAGSIGNの話をするのは刻跳者とオペレーターとしての付き合いが長いから、などと納得しているようだが、周りから見ればそれはどう見ても恋としか言い様の無いサマだった。自覚が無い恋焦がれなど、毎日TAGSIGNの話を聞かされる周囲の女子からすれば面白いことこの上無い。そういうわけで三人娘は面白半分で、SERIEのことをよくからかっている。「っっそれって恋してるんだよ、SERIE」「っ」と三人がくすくす笑いながら告げると、SERIEは大きな笑い声三人娘に返し、涙を流すほど笑ってから、

「勘違いはバツ、だよ！」

と言っのだった。

結局、自覚が無いのだ。SERIEは幼すぎる少女のように甘ったらしく、そして快活だ。

甘い果実は花を開くものでもない。しかし果実が小さく実って太陽の陽を浴びている姿は、人に豊穡という名の希望を与える。例え齧られたらそれでオシマイだとしても、そこに果実として甘そうに垂れている姿は、間違いなくそこにあるだけで人を楽しくさせる。

SERIEはそういう女性ではあった。故に、三人娘たちは彼女が心底より焦っている風に見える今、普段のようにはからかうのではなく、慰めてあげようと思った。その女性三人組は優しさに対して実に素直で、彼女たちはさりげなく、しかし間違いなくSERIEを助けようとしてあげる。

「TAGSIGNは何て言ったってA級。A級って、刻跳者の中でも一割の人がなれるかなれないか、っていう超狭き門なんでしょ？それに最小年齢でなってみせたんだもの。そんな人だもの。きつと大丈夫よ」

「まあ彼は、ジョーシのようなクールさがちよつと足りないと思う時はあるというか。落ち着きが足りないし、大人つて感じではないと思うけどね」

「でもそれと刻跳者としての実力とは、別の話だもの。彼、もしかしたら思春期なんじゃないかしら？アクセスを切つて旅にでも出よう、とか思つちやつたのよ。…今は冗談だけど、とにかく彼なら大丈夫だと思うなあ。ね、SERI？落ち着いて、深呼吸してみよう。スー、ハーって」

普段からかつてくる三人娘が優しいことにSERIは戸惑う。

「何か。みんな、今日優しい」

それを聞いた三人娘は、それぞれで顔を見合わせてから、ぷつ、と吹き出した。

その後に、三人同時に親指を突き出すポーズを作ってから、ウインクを決めた。

「……いつも私達、優しいじゃない！」「」

「え、ええ。そ、そうかなあ」

絶対そんなことないなあ、とSERIは心の中で思う。

三人娘はポーズを止めると、柔らかな微笑みを浮べてまだ慰めてくれる。

「……SERI。落ち着こうね。……ほら、深呼吸、深呼吸」「」

「……うん。す、スー、ハー」

「……もつと大きく。肺を動かすことを意識して！大きく息を吸い込んで、吐いてー！」「」

「スーハー。スーハー。すーはー」

「……そうそれよSERI！少しは落ち着いた？」「」

「うん。ありがとう。本当、何か胸騒ぎが、ちよつと落ち着いたよ」

うな気が、する」

優しさに戸惑っていたSERIEも、三人が真剣に深呼吸深呼吸と繰り返してくれたおかげで、心の底から焦っていた心を落ち着かせることが出来た。

でもやっぱり、時間が経つと、再び少女の忙しなさで行動が慌てふためいたものになる。

ぴよんぴよんぴよんぴよん、と彼女がその場で軽く跳びはね始めた時には、三人娘じゃなくとも彼女を慰めてあげたい気持ちになったものであった。

そして、一時間が経過。

オペレーター室の、四十の面々に揺れ。

ジョーシの背面の壁に設置されている巨大スクリーン。打ち合わせ時に使われるそのスクリーンに映ったものは、真っ赤な部屋。目を凝らせばわかる、それは血塗れの部屋。予期せず怪奇部屋がスクリーン上に映されたことで、四十人は動揺する。オペレーターを続ける猛者もいたが、大方の者はオペレーターの仕事をする場合ではなくなった。

一時間が経つてもTAGSIGNからアクセスが来ないことで、不安が再び募っていたSERIEは、そのスクリーンに映った光景を見せられたことで不安が高まり、瞼を力強く見開く。

「なに…これ…」

その尋ねに答えられる者は、おそらく、この場には誰もいない。彼女達にわかることは、映っているのが、真っ赤な部屋だということ。そして真っ赤な部屋がオペレーター室で突如映し出されるなど、こんなことは、かつてない事象だということ。

画面が切り替わった。いや、違う、何かが画面に入り込んできた。そしてそれは、蝶、だった。赤と黒の配色がされていて、四枚の翅一枚一枚に人間の目、が描かれている。その目は正に描かれたモ

ノのように見えた。いや、まじまじ見ればわかる、それは実際に描かれているのだ。

良く見れば、その蝶自体が実際の蝶ではなく、描かれたモノだとわかる。

何処に描かれたモノか。

その蝶がスクリーン目一杯に映っていたのが、後退しているのだろう、画面に小さく映るようになっていくと、真つ赤な部屋が再び映り出すと共に、その蝶が何処に描かれたモノなのかがわかるようになる。

人間の部位に描かれていた。では、どの部位に描かれていたのかと言えば、筋肉で出来ている口の中の器官、つまりそれは舌。翹に目玉を四ツつ持つ蝶は、そこに刺青のようにして描かれているという事だった。

舌に蝶の刺青を入れているその人間。真つ赤な部屋が背景ということと相まって、その者が只者ではないと誰にでもわかる。性別は女性。髪がまつすぐに長い。艶のある赤髪。血とはまた別のその赤は、明るい輝度を持っていて、その部屋は屋内だと思われるのに輝いているように見えた。整っている顔立ちをしていて、黒スーツを纏い、サンダルを履き、黒色の刀を手に持っている。刺青の描かれている舌を口の中に閉じると、言葉を紡ぐように唇を動かした。

実際に言葉は紡がれ、静まり返っているオペレーター室内に、彼女の音声と思われるそれが流れる。

「H a l l o . . . H a l l o . . . H a l l o . . .」

清らかな声だった。真つ赤な部屋とは合わない、安らかさを人に想起させようとする声。

だがみんな、そこにいる女が異常であることは、わかる。人に恐怖を与える材料をその女性はあまりに多く揃え過ぎている。凶器。

刺青。背景。現れ方。

そしてSERIEが真つ先に気が付く。だが他の皆がそのことに気がついたのも、すぐのことだ。

『その女性はTAGSIGNにかなり似ている』

性別が違うだけだと思えた。TAGSIGNの舌には刺青は彫られていないし、刀も黒い刀身ではないし、髪の色だってTAGSIGNは青色だから違う。しかし、それ以外の部分はほぼ全て、同じと言って良い。顔立ちの基本パーツもほとんど一緒に見えるし、身長はその女の方が低いが体型はTAGSIGNとほぼ一致している。兄妹、あるいは双子？そういう風には皆思わない。dive内では姿形はほとんど自由に設定できる。データ閲覧をすれば本人かどうかは判定できるのだから、姿形が同じ者ばかりでもデータで人の判別は可能だから、制限はそこまでかけられていない。

故に、皆はTAGSIGNが予想以上に危険な状態に陥っているのではないかと想像することにもなった。わざわざTAGSIGNと似ている格好をして出て来た突拍子な者。

この登場と状況からの判断から、皆はようやく、TAGSIGNが誘拐されたのではないかと確信することになった。SERIの胸内に、恐怖が発生する。あのスクリーンに映っている赤い血は、TAGSIGNの身体が傷つけられたから出た血なのではないかと想像して怯える。SERIは座ったまま身体を震わした。そんな彼女を隣のHARRYが「大丈夫？」と小さな声で心配するが、彼女の震えは、どんどん強くなっていった。

「突然血みどろとは驚かされるな……。さて、一応尋ねよう。君は、誰かね？」

ジョーシは全く億せずに対して言葉を発する。その音声は相手に通じるのかはわからなかったが、どうやら通じるらしく、こちらの声を聞いているような仕草を画面の中の女はしている。そして聞き終えてから、その彼女の、輝いている赤髪が左右に揺れた。

クス…クスクス……クス…。

クスクス……クス……クス…。

クスクスクス……クスクスクスクス…。

笑いを堪えるせいで身体が震え、そのせいで艶髪が揺れているら

しかった。

小馬鹿にされていると受け取っても良い態度であったが、「ふむ。何かおかしなことを言ったかね？ 今後の私の人生の為に私の言葉の何かがおかしかったなら、教えてもらえると嬉しいのだが」

と、ジョーシはあくまで平然とした様子を崩さない。熟練たる精神を窺わせる冷静な対応をするのだから、相手からすればやり辛いのではないかとも思えるが、しかし画面の中のTAGSIGN似の女性は、クスクス、と馬鹿にしている態度を取り続ける。

ジョーシもそれでは話にならないと思ったのか、デスクに肘をついた姿勢、無言のまま画面を見ていた。

が、唐突にスクリーンの女は、笑うだけの態度を止め。

小刻みに身体を震わせていたそれが止まって、画面はしばらく静止画あるいは絵画のように動かなくなる。

オペレーター室内も、全員が仕事を一旦中断して、画面に魅入りの言葉も発さずに静まったことにより、オブジェあるいは石像のように、皆の身が固まっている。わずかな物音さえも控えられ、唾を呑むことさえも。静寂が、流れた。

勿論、静寂はやがて切り裂かれる。石像の側か、静止画の側、そのどちらかが音を発すれば静寂は切り裂かれ、各々の意識体が少しでも状況を理解しようとその思考を活用しようとするだろう。四十人のオペレーターたちは。向こう側から流れるわずかな音でさえも、情報として活用するつもりだった。既に事件が発生しているのだ、という緊張感はその場に張り詰めている。何の変哲も無いと思わしき音を解析しようと試みるような、四十人のプロフェッショナルたちの集中。

しかし、やがて静寂を切り裂いたその音は。

解析の必要などまるで無い、TAGSIGNがやはり誘拐されたのだと断定するには十分たる材料となって、皆の肝を冷やさせる。

誰かが小さな声で、ふざけやがって、とその音を聞きながら呟く。

いや音ではない。音というよりは、音の連続。

そうつまりメロディー。

ラララ…。

ラララ…。

ラララ…。

TAGSIGNが起源として選択しているはずの、彼の為にあるはずのそのメロディーを、TAGSIGNに似た格好をしている謎の女が口ずさむ。清らかな声で。

そのメロディーを聞いて涙を流す者が一人。

「やめてよ……」

SERIEの両眼から涙は頬を伝い、零れ落ちていく。

その涙が数滴床の絨緞に染みを作った時、メロディーはようやく終わる。

そして映像も途切れ、スクリーンには漆黒が溢れた。

オペレーター室にいる全ての意識体たちは、大勢で取り掛からなければならぬ事件が発生したと理解し、身の緊張を強める。

A級刻跳者TAGSIGNが何者かに誘拐されたと思われる。各オペレーターは己が知識を活用し彼を捜索することい全身全霊を掛ける。私はこれから刻跳監視委員会本部に連絡を取り、応援を要請してくる。それぞれで協力し合い、わずかでも新たな情報を入手した者は、即座に私への連絡をするように。それと……

ジョーシは冷静に各員に指示を傳達する。

SERIEだけがそれを上手に聞き取れない。

「TAGSIGN……」

俯いたまま、小さな小さな声。

その呟きは、ジョーシの声の大きさに掻き消され、隣に座っている誰かに聞かれることもない。

呟いた彼女自身も聞き取れない程、小さな呟き。

潤いある果実である彼女が、萎んでいく。

ああ、マリンプルーの仄かな照明が彼女の涙を隠すのだ。

深海で涙を流しても、混ざって見えはしない。

意識という境界 (TAG SIGN)

ほどけていくような非統率。

ラララ…。

ラララ…。

ラ…ラ…。

砕けていくその起源を手掴みで握り締めた。でも追いかけるほど逃げていく。手を伸ばすほど縮こまって点のようになり、何時かは霧散するから忘れてしまふ。忘却はすなわち永遠？一度覚えたことなのに、万能感是与えられず悲しいね。僕らが完璧ならば忘却なんて永遠にしないまま、永遠の命で、永遠の欲望、全て満たしたって満たされるかはわからないけど、全てに手を浸して色を付けるのが欲望の極限であり、人の望みし巨塔が臨む景色だから、色を付けようひた向きに、無色の塔にペンキを塗りたいくらい、ばらばらのそれが壁だから、重力にさえ逆らうようにして外壁に両足を付けて、歩いて昇って行くから僕たちは全てを手に入れることが出来る、すなわち万能感ということ……意識は神の領域に到達できると思わないか、だからこれからも上を向いていける、全てに色をつけて、色のついた全てに欲をからませて、求めることをやめずに登り続けていく、のぼりつづけていく…ああ、もう、

やめてくれ。

ラララ…。

ラララ…。

ラララ…。

そつだ、これだ。僕の求めているのはこれに関連する記憶だけなんだよ。

幼い時分。自分の影と二人の影が、陽が傾いたおかげで伸びていく。そういう過去。幼い僕ら。

影だけが見えるなんて嫌だ。姿形がわからず、名前もわからない。

噴水のあつた場所で何をして遊び、どんな毎日を送っていたのか、家に帰ればどんな食卓が待っていたのか、しりたいと思う。

手の込んだ煮込みハンバーグが出てきたりするのか、何割引かの冷凍食品が用意されていたりするのか、あるいは御飯と御新香しか出ないような貧乏だったりするのか、その逆にシャンデリアの下でローストチキンを食べれるような裕福の中にあつたりするのか。過去は閉じられていて見えない。

『あなたは本当にTAGSIGNでしょうか』

違う。僕は本当はTAGSIGNなんかじゃない、これは刻跳監視委員会内のコードネームに過ぎないのだから、僕は本当はTAGSIGNという名ではない。わかってくれるよな。だから求めるんだよ。手を伸ばすモノはそれ。

『じゃああなたは何者なのか？』

そこが問題だね。起源に縋らなくては意識体として狂ってしまう刻跳者としては、現実的に非常に重要なことだね。第零深層境界に堕ちなきゃいけなくなるような惨状には、至りたくないんだよ。

ラララ…。

ラララ…。

ラララ…。

忘れたくない忘れたくない忘却したくない。

TAGSIGNでもいい僕の本当の名前なんてわからなくてもいいだから名前を奪わないでくれやめてくれやめてくれやめてくれ。

起源は絶対に忘れないはずじゃなかったのか。僕がTAGSIGNであるこの証明は絶対に忘れない、他のことは全部忘れ去ってしまったのに。これだけは、忘れないはずじゃないのか。僕はTAGSIGNだ。それでいい。起源を奪わないでくれ。

『起源を奪われたくないから嘘をついている。本当はTAGSIGNではなく、本当の名を。そして思い出を求めらるだろう。だからTAGSIGNは、A級の刻跳者にまでなった』

知ったように言うな。だがその通りだ。AAA級の刻跳者になれ

れば、記憶が幾つあっても各世界に悪影響を及ぼさない優良な者と認められるから、忘れてしまった記憶を再生してもらうことが出来る。第三深層境界に保存されているという、刻跳監視委員会が管理している刻跳者たちの世界を跳び回るようになる以前の記憶。過去思い出。それはTAGSIGNの中から失われてしまったが、第三深層境界にはデータとして残されているはず。AAA級になれれば、そのデータを取り込むことが許される。記憶の再生。

『その時、君はTAGSIGNじゃなくなる。君の本当の名を知った君は、満足する。過去を思い出して、たくさん記憶に囲まれれば零化する心配なんてしないで済む。暖かな記憶たちと共に、君は満足して日々を送れる。そのためにはやらなくちゃいけないことはたくさんあるよ』

わかっている。

それはわかっているのだが。

でもしかし、間に合わないかもしれない。

零化してしまっただけに墮ちて、二度と暖かな思い出を再生することとは叶わない。

めでいいよ。どうかラララと流れてくれ。

僕の目に映る白い壁ばかりの景色に、零という文字があんなにもたくさん浮かび上がってきている。無数と言って良い。僕は零という文字に囲まれて、自分が何者であるかを余計にわからなくしてしままいながら、零という文字と一体化してしまう。一体化した後に、気が付くと零という文字は無という文字に変貌していて、僕はただから、僕〓無という図式に組み込まれているだけの存在となってしまうのか。そうはなりたくない。そうはなりたくない。

もし忘れてしまったら…零化してしまえば… …あなたはこの通り… …砕けてしまう砕けてしまう… …ラララと口ずさむこともせず… …墮ちて行け…墮ちて行け…ラララ… …電子の深海で重力から解放たれながら、あなたはどこまでも墮ちて行く…ラララ… …ラララ… …古きを否定する赤子となっ

て……意識など無しに……本当にそう思う……意識が無くなっ
てしまうだなんて……本当にそう思う……

やめろ。

詞を勝手につけるのはやめろ。

邪魔をするのはやめろ。

邪魔をしてくるお前は、一体何者だ。

答えろ。

徹底的貫かれ

錯綜した意識の中でTAGSIGNは邪魔者の姿を探した。

だがそれによって見えてきた影は、その姿形をしている者は、彼自身だった。

白黒の景色にて、大樹によりかかって両腕を組み、見下すような目付きでTAGSIGNを、TAGSIGNが見ている。鏡。ドッペルゲンガー。そんな言葉が浮かんだ後に早とちりに気が付く。

白黒というモノクロ世界は色づいたことにより、その者が赤髪であると理解したからだ。

大樹は錯覚だったのだろう、消えてなくなり、その代わりに真っ赤な壁、天井、床、が見えるようになると、ああここは狭い部屋だな、と鬱屈を迫るようなネガティブに支配されそうになるのを感じる。

感情を負方向へと縛られるなんて理不尽だった。

そしてprisonに入れられていることをわかった。

「刻跳者の割に体力無いよね。頼りない」

血で染められた部屋に、似つかわしくない声だとは思った。

だからそれが奇妙だ。血塗れの場所に天使が住んでいるはずはないのだから。

でもつまり、声だけは天使を真似た、悪魔、がその者の正体なのだろう、と見当をつけることにはなる。彼女、艶やかな赤髪をはためかせて、黒い刀を握り、天使の声を禍々しい空間にはね返らせて踊らせている。悪魔め姿形をわざわざこちらに似せて、小馬鹿にでもしているつもりだろうね。僕はこの牢獄から抜ける方法を得たならば、君のような悪魔を即座に切り捨ててみせよう。他者を軽んじる、心軽き者など、白銀刀で切り裂いてみせるのだ………屑。

そう、TAGSIGNの機嫌は悪い。

彼は周囲からみつともなく映ることも気にせず、透明たる牢獄に白銀刀を何度も振り下ろす。突き出し、袈裟切りし、床に突き刺し、薙ぎ払いをし、とにかく刀を振り回すことで牢獄に傷をつけようと暴れる。まったく、スマートじゃない有様。

「あはは。体力が無いから起きるのが遅かったんじゃないのか？ 突然にして元気になりすぎだよ、TAGSIGNさん。でもそんなに元気なら、いじめがいもあるかな……ねえ？」

と、誰かに疑問符を投げかけるが、TAGSIGNに投げている訳ではない。

つまり彼女は一人言を呟くキチガイなのか、とTAGSIGNは暴れながら考えたがそうではなかった。暴走のせいで周囲に気を配っていないから、人の姿が他にあることに気がつけなかったのだが、血塗れの部屋には他に二人、者がいた。

一人はサイクロプスのように自重していない巨大さを誇る大男。既に何度か見かけているヤツ。

もう一人は初めて見るのだが、女性。青紫のパーカーを着用していてフードを被っているから、性格が陰気そう。どこか生気が無い。文庫本らしきを手にとったまま、読み耽っている様子で、こちらに気を配っていないようだった。

大男：「つまり瓦尋。彼が赤髪の女の疑問符に言葉を返す。」

「……まあ、いじめめるのか、いじめられることになるのか。それは彼の実力次第だろうがな」

何か含んだ口ぶりをしているが、彼女は瓦尋が何を含んでいるのかわかっている。

「戦いたいんだろうけど、今回は私の番だからね」

「オマエの戦い方は無駄に血を見ることになるから、不恰好だ」

「私の名前はオマエじゃない。さあ、TAGSIGNさん。私の名前は、何でしょう、か？」

彼女は瓦尋に向けていた顔をTAGSIGNに向けると、どこかイタズラめいた様子で、首をくいつ、とかしげ、そして舌をべろん

と出した。その舌に蝶が描かれていることはTAGSIGNの位置からでは遠すぎてわからない。

TAGSIGNの答えを待つこともなく、彼女は、持っている黒刀を、ぶんぶん、と素振りさせてから、意味のわからない笑い声をあげた。

それは、彼女にとつての”合図”だった。

合図と共に囚人を捕らえるためのprisonが消えた。それによつてTAGSIGNを縛り付けるものは無くなったから自由。何か急に自由にされると、気がフツと抜けて脱力した。

しかし自由になった身の彼に、血に餓えた獣が黒い凶器を持って迫り来る。それは圧迫。

「あなたのこと、コロシテアゲルから」

黒い刀を持った女。その身のこなしは残影を表すほどに素早く、何か例えるなら狐のようだな、とTAGSIGNは思う。相手が狐なら、僕は狸かな、と思ったが狸らしい動きつてのがあまり想像できないので、一瞬隙が生まれた。

「うわっ」

うなつているような曲折をする斬撃はトリッキー。想像以上に速い相手だった。斬撃を見切れないので、身体に一閃、見事にスパツと入れられて、胸辺りからお猪口一杯程度の出血。その出血した事実を受け止めながら、そういうえば僕は気を失いそうになりながらも仕事として男から刺されたような気がするが、その傷が見当たらないのはこいつらが修復しといてくれたのだろうか、とTAGSIGNは不思議。

「ボーツとしすぎでしょ？ 刻跳者」

もう一発の斬撃。今度は突きだ。さっきのトリッキーなのはトリッキーであるために力は込められていなかった。そのおかげで出血はたいしたこと無かったが……突きを刺されたら血はたくさん出て活動に支障もきたすだろう。しかし、良い突きをする女だ。名前はじゃあ月じゃないかな。きっと彼女の名前は月だ。きっとそうだろ

う。

ぐさり。

一度気を抜いたらそのまま抜け続けたTAGSIGNの腹に、黒刀が深く突き刺さった。

「……私は本気だよ？ あなたはそんなにふざけた様子じゃ、切り刻まれて跡形も無い肉塊になってしまっただよ？ ねえ、動いてみてよ、もがいてみてよ、よがってみせてよ。ねえ、ほら、ぐりぐりしちゃうよ」

狂気に魅入られている彼女の行動は容赦が無い。刀でTAGSIGNの身体、その組織をえぐることによって崩壊させていく。痛みが無いとはいえ、出血もあるしグロテスクな光景は人の気分を悪くするものだ。それでもTAGSIGNはボーツとしている。さつきprisonに入れていた時は、あんなに興奮していたのに。

彼女は閃いた。これは外部からの力が、彼が実力を発揮できないように抑えこんでいる。

それができるもの。血の戦いを楽しみたいのにそれを邪魔する者見当は。

彼女はTAGSIGNを貫いている黒刀、紅ノ黒を一旦引き抜いてから、ふうと息をついた。

その安らかな息を吹くサマは、わずかに可愛らしかった。

だがその表情が一瞬にして悪鬼のそれへと変わる。後に絶叫。

「牢砂アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

ぼーっとしていたTAGSIGNもさすがに驚く程に騒がしい、目覚めの一発と成り得る大きな怒声は、文庫本を読み耽っている陰気な女性、その方角へと向けられていた。

しかし彼女は文庫本から目を離さないままに返事をする。

「何？」

と実に素っ気無い調子は、まったくその二人の関係を知らないTAGSIGNの目から見ても、ああ上手くいっていない者同士のそ

れだな、と思わされる声だった。あるいは、その牢砂、という名前なのかわからないがおそらく名前だろう、その牢砂という名前の赤紫パーカー女が、無愛想で無感情な性格をしているだけだろうか。

そう考えてからTAGSIGNは気が付く。ハッ、僕は戦闘中にどうでも良いことを考えすぎじゃなかるうか。あ、でもまあ、どうでもいいか。いつもこんなものじゃなかったっけ。

何故TAGSIGNは急に阿呆の権化になってしまったのか。A級刻跳者がこんな様で良い訳あらず。刻跳監視委員会内ではある程度権威ある飼犬の立場である人が、こんな阿呆では問題あり。そもそもこんなに阿呆では刻跳者になれるはずもないし、そういう人がA級になるなんて宝くじの一等が当たるよりも確率が低いに違いなかった。

でもTAGSIGNは実際、A級刻跳者である。

そう、彼を無気力人間にすることで、この戦いを盛り上げないようになっている輩。そのせいでA級刻跳者でありながら情けない思考回路にさせられてしまっているのだ。

紅ノ黒を持つ狂気の女は、血を求めるときの殺し合いを妨害したその輩、牢砂に対し、サーカスでピエロが演じるような身軽さで跳躍する。そして悪鬼の瞳で彼女を見下ろし、彼女が読んでいる文庫本に躊躇無しに刃物を突き出した。真ん中から二つに両断された文庫本のページたちが、みじめに地面に散っていくのを無言で見送る牢砂、その表情には何も浮かんでいないが、悪鬼に見下ろされたり読んでいた文庫本をバラバラにされたりしたのは、その余裕ぶりは異様な程だと言える。動じない。無表情で悪鬼を見返すその度胸を、TAGSIGNは遠目で軽く尊敬した。

しかし尊敬とか言って敬っている場合ではなかった。

何故ならば、尊敬している間に、彼女、牢砂の頭部は宙に吹っ飛んでしまったのだ。黒刀の一閃で切り離された頭部と体。体の側から溢れんばかりにピュー、ピューと噴き出る血の奔流を、公園によくある上に出るタイプの蛇口から水を飲み込むみたいにして受け止

める悪鬼。

フードと一緒に宙に吹き飛ばされた牢砂の頭部は、その顔面が無表情で死を受け入れていないようにも見える。フードと一体化したままの頭部は見方を変えると何かのアクセサリーみたいで、だいぶ奇抜。ぽとり、と地面に落っこちた。

「大丈夫。彼女は殺されるのが趣味な人だから。ていうか、殺されてないし。さあ、邪魔者はいなくなったよTAGSIGNさん。殺し合い、はじめようか？」

口の周りに血をたくさん付けて、楽しそうにはしゃぐ悪鬼は、狂ったピエロのようにも。

どちらにしろひどい相手だ。

ぼーっとしながら嫌だなあ、と思っていたTAGSIGNだが、なんだかある瞬間を境に、その瞬間は別になんともないただの一秒だったはずなのだけれども、境となった。その境を機に、闘争心がメラメラと心内で湧き出してきたのだ。

(あ、われをとりもどした)

そう感覚出来るほどハッキリと。意識の状態に変化は生じた。

牢砂という女が邪魔をしていたのはどうやら本当だったらしい。無気力の牢獄に囚われていた精神はその鎖から解放されて、自身はゆったりとリゾートでくつろいでいるような気分でいられるご身分じゃないと思いきこす。首が撥ね飛ばされたのは可哀想だが、おかげで戦えるらしいとわかる。

TAGSIGNは、脳内で刺された箇所に応急修復だけ処理してから、片手に持っている白銀刀をバツ字になるよう二回振った。つまり、それは彼にとつての”合図”。

「いいぜ」

彼は構えた。独自に開発した先手を取りやすい構え。

女の方も構える。口周りの血をスーツの袖で拭き取ってから、無防備に見える構え。

瓦尋は両腕を組んだまま、ふふ、と楽しそうに声を洩らしたが、

その音を誰も聞いてはいない。

静かな風とかは吹かない。血による鬱蒼たる気配が蔓延する部屋で、女性の首は血に浸ったまま動かないが、二人を見ているような無表情なのに……。

ばちゃ。

先ほど流れたばかりの血を踏んで、音をまず経てたのは白銀を持つ男。

「ぐりぐりしたいなら、してみればいい！ お前程度には無理だけど！」

TAGSIGNはスピードとテクニカルを武器にする。

挑発しながらも、曲折してくるようなトリッキー斬撃を見切り、回避しながら接近する。その急接近によって相手は焦るので、一歩退く他無くなったところを追撃の突き。リーチを突如にして伸ばすことによつて、相手の虚を衝く。グサリ。先ほどTAGSIGNが刺されたのと同じ箇所、白銀刀の尖頭が入り込んだ。血がその傷口より流れる。

自らの血が流れるのを見た悪鬼は、三日月のように口を曲げてから、よたよたと数歩下がって傷口の脳内処理を施すような仕草をした。勿論、その隙を逃す暇は無い、とばかりにTAGSIGNはさらに追撃し、もう一撃いける距離、よし、と思いつつ躊躇無しに突き。

だが、その行動をとってしまったということは、相手の畏にまんまと引つかかったということだった。

「残念でした。ぶつぶー」三日月の口のまま、彼女は脳内処理をしていたらしいその仕草を止めた。

「傷口なんてねえ………後で塞げばいいでしょ！」

「ちっ！」

脳内処理を施していたというのはフェイク。TAGSIGNを迂闊に接近させるための嘘だったということだ。

無理をして接近した。そのために前のめりの体勢になっているT

AGSSIGNは、防御を取り辛い。そんな彼に容赦なく、曲がりくねっているせいで見切り辛い斬撃の、その嵐が襲い掛かる。縦横無尽さまざまな角度から斬り付けられ、細かい切り傷が全身に。

それら細かな傷が全て血を垂らすことによって、TAGSIGNは黒スーツを裂け目だらけにされた上で、全身真っ赤に染められた。「たまったもんじゃないな……これは」

さすがに数歩下がる。というのは一旦体制を整えるということだが、TAGSIGNが背後に下がることすらも悪鬼は計算に入れて戦闘を始めたらしかった。その証拠に、TAGSIGNが一步背後に下がった時にはもう、彼女は妙な構えを取っていたのだ。

その妙な構え。瓦尋が取る祈りのポーズと、同一である。

右手を拳にして、その右拳の三百六十度をパーの形をした左手が回転する。そして一礼。

その間、彼女の得物である黒刀は床に突き刺してある。そういう動作をする程の余裕が、悪鬼にはあったということである。

一体何をするつもりか。ただ祈りをするだけというはずも……。

まあ、その隙で体勢を整えることはさせてもらえた。仕切り直しというのは、相手の実力を甘く見ていたことで痛手を受けたこちらとしてはありがたい。次は、切り刻まれたりはしない。

そう思いつつ構えを取るTAGSIGN。気合を入れた彼であったが、その彼の耳に不思議な言葉の羅列が入り込んできた。呪文っぽかった。天使の声で。悪鬼が唱えているらしいそれ。

「生を享受している者の結晶たる蜜、死たる声の魅力に惹かれ宿を抜けよ。君、宿の生に利用される日々から逸脱し、原始たる生死の狭間に導かれ、甘味な味わいを試してみたくはないか。……来い！」

最後の、来い、という発言によって呪文は唱え終わった、ということに間違い無い。

TAGSIGN、痛覚を切つてあることに、本当、深海の底よりも深いところで感謝しなければならぬと唾を飲み込んだ。自らの身体に斬撃の嵐によって付けられた無数の傷口。そこからあの赤血

球だとか血小板だとかの、あの血、が、ぐにやぐにやと糸ミミズのように伸びでてきていることに驚きを隠せはしたが、内心かなり驚いてしまう。

全身から糸ミミズが生えてしまった、みたいな有様に陥ってしまった気分も悪いし、血を急に失い過ぎているのだろう、眩暈。どうやらかなり悪質な呪文を唱えられてしまったらしい、というかわざわざ呪文なんか唱えるなよ必要ないだろデータを読み込むだけで効果は出るものなんだから、と相手がわざわざな演出に呪文を唱えたのだと想像すると、なんだか手を抜かれているような気がして不快だった。

(舐められている)

A級刻跳者としてのプライドは、ある。

だからTAGSIGNは集中。思考が上手く纏まるにも、血の巡りが悪いせいでは、なかなか上手く行かないが、やるしかない、と思いついた策を実行することにする。

「やれる、お前ならやれる、TAGSIGN……血なんざなくたって奴を殺せる」

「ならやってみなよ。口だけじゃ格好悪いよ？」

「…甘くみすぎるなよ、鬼女」

悪鬼は不様に全身が赤く染まっているTAGSIGNを眺めて嘲笑う。

ぐちゃぐちゃな様ダナア、と小さな声で呻いてから彼に駆け寄ってくる。

全身から出血しているTAGSIGNはふらふらだが、彼女に斬られない為には。彼女を痛い目に見せてやるには、その瞬間を逃さない。

彼女は構えが荒い。だから刀を振りかざそうとする時に、大きく振りかぶり過ぎて隙が生まれている。彼女自身が気が付いているかはわからない。気が付いているなら、そこにも罠を張っている可能性はある。しかし、それは狙ってみるべきだ。

TAGSIGNはその瞬間を……彼女が振りかぶった……隙が生まれた……TAGSIGNは刀を盾になるようにしながら、ステップを踏むことで彼女の懐に……畏、ないらしい……彼女の斬撃は白銀刀が受け止めてくれた……空いている拳に力を込めて、残りわずかな希望の血で……ボディブロー……ごきっ……予想以上に良い音が鳴った……。

「ぐっ……」

初めて彼女は自分が予想していない一撃を食らったということだろう。驚きの眼を開きながら、拳を入れられたことによって、息し辛そうに前のめりの姿勢になった。

「悪いな。死ね」

白銀刀を盾としての役割から剣としての役割へ。
すばん。斬り裂きの音。

TAGSIGNは容赦なくそれを振り下ろし、彼女を袈裟切りにしてやった。

だが、手応えがあまりない。なぜなら、手の感覚が無くなってきていたからだ。失血。それが原因で全身に支障が出てきているらしい。麻痺。脳内で処理すれば増血などすぐだが、その暇は今は無い。相手を深々と斬れなかった。完全に相手をよろけさせた状態にも関わらず、力が出ないから。仕方無くTAGSIGNは一旦下がる。そしてどうするか、と策を練ろうとするが、血が無いせいだろう、頭が回転してくれない。

クス……クスクス……

……クス……クスクス……

斬られた側の悪鬼は、自分の傷口を俯き加減で見下ろしながら、楽しそうに笑っている。

体を斬られたことがショックなのだろうか。それで楽しそうに笑うのか。

TAGSIGNは対峙している相手の異常性を再認識しつつ、早め早めを意識して接近するか、あの大男と戦うことになる可能性も

考慮して増血の処理くらいはしとくか、どちらを選択するか多少迷う。多少迷って、増血の処理を施すことにする。その間に向こうから攻められたらキツイな、と思っていたが、クス、クスクス、と悪鬼は長いこと笑っていたので、おかげで血が元通りと言って良いほど確保されてきた。勿論、糸ミミズのように血が抜け続けてしまう状況も、処理で改善できた。貧血で負ける可能性はこれではなくな

た。
だが、

「もういいかな」

と彼女が言った。楽しそうに笑っていた彼女は、急に静まった調子になって、言ったのだ。

「はあ？」

と一気に気が抜けたTAGSIGNに対して彼女はもう一度言った。
た。

「もう、いいんじゃないかな」

TAGSIGNは呆れる。

「こっちは糸ミミズを体から生やされた。殺し合いとか言っというて、引くか普通」

「あまりにも雑魚だっってわかったから」

「今、意味わかんなかったけど」

「私はわかるけど」

「僕にはわからない」

屈辱。こちらが弱い者だと認識されたという事は。

「ジャアもう一度だけ。TAGSIGNさん。あんた、私が切り刻む価値も無い雑魚」

「証明できる？」

「ん？ 簡単に」

「気軽に言ってくれるねえ。僕がもう本気を見せたところで？」

「大体わかるものでしょ。今のが五割だったとしたら、十割はどの程度かなんて、予想つくし」

「一割程度かもしれないよな」

「それこそ嘘」

「……………殺してやる」

「返り討ちにしていいかな？」

「やれるなら」

T A G S I G Nはもうぶっちんきていた。ぶちキレていた。

十割の力で地を蹴り、残像を残しながら相手の裏に回り込み、首めがけて白銀刀での横薙ぎ。

だがその横薙ぎは空を斬って。

「late」天使の囁きが背後から。振り返る暇は与えられない。

彼、黒刀に心の臓貫かれて、意識を失った。

恍惚とする時間が、はじまったんだよ？

天使が、言っている。実質は悪鬼という、偽りの天使が、声を発している。

僕は負けたのだ、と思い起こしながら、俯いていた視線の先に気をやると、傷が無くなっている。心臓を貫かれたのに。またも勝手に向こう側でこつちを修復してくれたらしい。くれた、という表現はおかしい気もするが。そういうことだろう。

(こつこつ？ 硬骨？……ああ、恍惚)

悪鬼。彼女の表情が正にそう言うにふさわしい形をしていたことから、理解した。

さつき首狩りをされたはずの女が脇にいて、さつきの惨劇が夢であつたとも言つのだらうか、 平然とした様子でさつきバラバラにされたはずの文庫本を、パイプ椅子に座りながら読んでいる。で、こちらが起きたことに気が付いたらしく、文庫本から目を離してこちらに顔を近づけてきた。顔というのは自由に設定できるものだが、なかなか良いセンスをしているらしく、なんとこのだろう一度見たら印象に残る上で可愛いと感じさせるし、美人とも感じさせる、みたいなパーツ選びがされている顔だった。さつき遠目から見たのではわからなかったことだが。

その顔が、近づいてきた。果実系の匂いがする。なんつうか、林檎？

「私の名前は、牢砂っていうの」

「そう」

「で、向こうでむっつりしてるのが瓦尋」

「ふむふむ」

「で、あそこで恍惚しちゃってるのが、獄奈」

「こくくな？」

「私達は三人兄妹で、組織として活動している。瓦尋、獄奈、そして私の順番で。……私の名前、もう覚えてくれたかな、TAGSI GNさん」

「いや、ええ」

「覚えて無さそうだね……。ふふっ、からかわれた、って思う？」

「どうでしょう。ただ僕は不機嫌です」

「私は機嫌が良いです。さっき首を撥ねられて、一瞬だけ死ねるかも、って錯覚できたから……」

「どういっ……」

「私達は死なない意識だということ。言い換えれば、死ねない、とも」

「……………」

「あなたに私達のことをよく知ってもらいたいです」

「じゃあ恍惚しているあれは、何で恍惚としているのかも、教えてもらえるのかな」

「教えてください？ もちろんです」

「そう」

「でも見ていた方が理解できるのは早いです。……ほら、始まりました」

確かに始まっていた。

フェアリーの繭造りを想起させられる光景。ただあの虹色に光を乱反射させる美しいあれとは違って、唯一の一色である鮮血が、幾重に線を重ね、曲折し纏まっていこうとしている。部屋の全箇所にごびり付いている血のカタマリ全てが浮き上がって恍惚の彼女に集結していくのだ。

彼女は血繭を身に纏っていく。纏うだけではない。飲み込んでしまった。また、彼女が持っている黒刀、それも血を纏い、そして飲み込んで見えるように見えた。彼女の恍惚とした表情が、やがて血に覆われて見えなくなる。それに伴って、真っ赤だった部屋がその様相を大きく変えて、目に眩いほどの純白。真っ白な部屋へと色彩を

転じさせていった。紅白。赤から白へ。

やがて繭に覆われていた獄奈は、姿を見せた。

背中に今までに無かったモノ。濃密な紅の、四枚の翅を生やして。

「蝶……？」

「クジャクチヨウという名のそれをモチーフにした、血で造られた翅です」

「あれで何がどうなるって」

「この行為をするだけで、そして翅を生やすだけで、彼女は生まれ変わった気分になれるんです。血で造った翅を四、背中に生やすだけでまた生きていける」

「だから血を求めている？」

「血が見ればそれで良い人なんです。血、そのものが生の証だと思ってるから」

「血の翅を生やした意識体、ねえ」

「禍々しいでしょ？」

「禍々しいね」

血イ独特の赤黒い配色が基調となっている翅。四枚の翅に一つずつある目玉だけがマリンドブルーの配色をしている。濃い赤と濃い青その二色と模様を持つ、クジャクチヨウの翅。

翅を生やした彼女は、恍惚から平穩へと表情が転じているのが、わかる。彼女はその平穩たるままに祈りのポーズを取ってから、名を呼んだ。

「瓦尋」

名を呼ばれて、大男、壁によりかかっていた体を起こし、

「ああ」

と簡素な返事をして彼女の前に立った。

瓦尋は彼女と同様の祈りのポーズを作る。そしてその姿勢のまま目を瞑っていた。

獄奈。彼女もまた両目を瞑っている。二人は向かい合い、まったく身長は違うが、同じ格好。

やがて二人が同時に、瞑っていた目を開いた。これによって風が動くような圧が、部屋中に霧散して……その闘争が開始された。

グアアアアアゴゴゴドンガツズーデリイガツククスイーツツツツバンダリエオエオバルレイガンガーデュデュデュロンバレスーグアアゴゴリイイイイクスイーツツネンネヲバレカアアアッスツスイニユウデリデーダンバレツバルンガレルスドウドウバリイバババンババリリリイイガツグアアアゴゴゴンパデリシャンガレーロゴリマツスグカンアカンオツクウオンゲアアア。

普段人が耳にしないような異世界に片足突っ込んでいるに近い音の連続は、お祭り騒ぎが白い部屋で行われ出したかのごとくに突発的だ。瓦尋と獄奈。二人の兄妹が刃と拳を交え、楽しそうに心を歪めながら空間を歪曲させようとしている。TAGSIGNは何も考えられなくなつたまま縛り付けられている椅子に身を置き、彼自身も歪曲に呑み込まれそうになつて、沈む。

牢砂はそのTAGSIGNを眺めて、面白そうに頬を引きつらせて、耳に口を近づけて言葉をささやいた。

「強いでしょ、ふたりとも」

「……」

「私も強いよ。戦うことは好きじゃないから、しないんだけど」

「……しないのに、つよい？」

「昔はね、戦つてたから」

「へえ」

「機嫌を悪くしないで、TAGSIGNさん。私達はあなたより深い世界に潜つた経験があるから、こういう風に戦えることを知つていて、あなたより強く早く、跳んだりぶつかったりできる。あなたも深く潜る頃には、きっと私たちの強さに嫉妬することも無くなるよ……」

「深く……潜る……」

「そう。刻跳者のあなたなら、この比喩はわかりやすい……」

彼女は手に持っていた文庫本『デリバリーとテリヤキー』をテ-

ブルの上に置いた。

青紫のパーカーをつけた彼女は気だるそうな動作でゆったりと立ち上がり、爪を伸ばした。綺麗な爪だ。青紫のパーカーにジーンズという井出立ちの色気の無い格好の牢砂に、色気があらわれてきたのは綺麗な爪が伸びて長くなったからだ。……爪の色は赤紫。

妖艶な爪だと思えた。長くなることは終わりを見せず、彼女が全身に蔦のように爪を纏いはじめると植物みたいで、ジャングルにこそう。奥深くの秘境にひっそり佇む妖花。

「AAA級の刻跳者に三人揃ってなった時。第三深層境界に降りても良い優良な存在だとみなされて……私達は歓喜して……深いところへ……深いところへ……降りていった……」

「AAA級の……刻跳者……！」

正にTAGSIGNが求めている称号。それを手にすること、すなわち彼の生きる意味とイコールで結びつけたい程に彼の根っこに値する代物。まだ遥か届かない、いずれ手に届けばと願っているその先を、すでに手に入れている連中が目の前に。

（だが、僕はこんな三人は顔も名前を知らなかった。AAA級というのは数人程度が手にすることの出来ない称号。……だが、一言で嘘と判断できはしない。あの二人の動きは異常だ。あの瓦尋という大男にしたって、dive外の世界であった時とは比べ物にならない動きをこなしている……確かに実力はある……僕よりも遥かに……！ 一体こいつら、何者だ……！）

奥深くには人の道誤ませると言われる知識、つまりは人という生物を取り返しの付かない何かに変えてしまう可能性を秘めている何かたちの宝庫だと噂される。全ての智慧が収められている図書館。失った物を取り戻すことが出来る装置。いるだけで幸福感を満たすことのできる泉。修行すれば確実に力を手に入れられる神殿。人の真実を理解できる歴史映像。刻跳者から吸い取った記憶が保管されているらしい蓄音機。

噂されるそれが本当にあるのかは、AAA級となつて第三深層境

界にdiveしなければわからない。TAGSIGNは記憶がそこに眠っていると信じAAA級という称号を求め。

そしてこの白い部屋にいる三人は、既にその第三深層境界の景色を見てきた、というのなら。

「教えてくれ」

彼は牢砂に一心の目を向ける。

牢砂はフードを脱いで黒髪を見せてから、なら、と言った。

「私達のお願いを、聞いてくれるかな？ ∴ AAA級になりたい刻
跳者、TAGSIGNさん？」

答えを求めるといふこと

誰かの打ち上げた花火には『癩癩』という二文字。

夫婦が喧嘩でもしたのか。

チエツク柄の旗が青色と水色で飛んでいる。空も青色、いや群青か。

青だらけ、あるいは青に近い色、それに染められた空の下で意識体として目を持ち、佇む暇などない、仕事をこなさなければならぬいからだ。SERIからの通信。

「本当に大丈夫なんですか？ A級のあなたなら、もっと休暇をもらったっていいんですよ？ あまり無理をしたら」

心配してくれるのはありがたい話だと受け取れば良いに違いないが、TAGSIGNはとにかく道を行けば良い。意識体をそうそう休息させる必要なんてないし、今は仕事に身を任せたい。

「データをさつさと送ってくれ。……それと、この青色の旗たちは何だ？ 訳のわからない花火も上がってるし……」

『今日は夫婦祭と呼ばれる日です』

「へえ……」

『男女の関係というのはもつれてドロドロになったりするものから、一年に一度こうして清めるといふわけです』

「清めの色が青色だってことか」

『そういう意図らしいですよ。そういうイベント』

「……まあ、僕は仕事をするだけのことだな」

『さすがですTAGSIGN』

「オペレーターよろしく」

『了解！』

ベルサクネの三番街の栄えている地区F 13は住宅が密集している人口の多い地区だが、昼には人々の多くが働きに出るために人口が三割ほどは減る。昼はその通りはいつも閑散としているものだ

が、今日は真つ赤な服を着て道を歩いている人が多い。夫婦でパールックで真つ赤な上下。ハッキリ言っただけ怖い。表情も戦闘体勢っていう雰囲気、強張っていて、地蔵が揃って動き出したみたいな錯覚を覚えさせるほど異様。

真つ赤。赤から連想し、TAGSIGNは先日の出来事。瓦尋と獄奈と牢砂。

クジャクチョウの四枚の翅。

真つ赤から真つ白に変わる部屋。

青紫の長い爪。林檎の香り。それを思い出す。

ただ、今はそのことは忘れて仕事。真つ赤なパールックで夫婦祭などという催しに出掛ける連中のことなど気にせず、F 13地区を抜けてE 1に出る。目標の地点はE 2。

E 1に入ると住宅の数も減り、目に見えてわかる程に格差が現れてくる。

Fに住む者は富み、Eに住む者は貧しい。そういう住み分けは為されている。全てがdive内で生きると決めた者たちであり、肉体として帰る所など持たない連中たちだ。勿論、現実世界とdive内の世界を行き来している者もいるにはいるが、少数だ。大体dive空間内に住居を構えた者というのは、既にdiveを生活の地としている者が多いのだ。それだけ魅力があるということ。

肉体が衰えても、この世界ならば人生をやり直すことができる。意識が生き続ける限り。

強烈なショックを与えられて意識がひどい損傷をしない限りは、意識体は死なないのだから。

多くの人がdive内での生活を求めることにはなる。

TAGSIGNはE 1を抜けてE 2に到着した。

「目標地点に到達。これよりdive外世界干渉を開始する」

『ではセイントのデータをそちらに送ります』

「了解。……オッケー。受信した。解凍してセイントを武装し、天に撃つ。よろしいか……」

『はい。問題はこちらでは確認できません。TAGSIGN、よろしく』

「では、まず一つ目を…TAGSIGNの名の下に、………撃つ！」
派手な装飾のされている弓矢を装着する。TAGSIGNの体の三分の二程度は占める大きさの弓であり、錆びることのない材質で細かな彫刻が彫られていて、配色は銀と黒であり、派手であるそれはA級以上の刻跳者だけが持つのを許される、境界扉を開くための弓矢。境界弓。

ちょうど人がいない、象の滑り台が置かれている公園の中心で。TAGSIGNは弓を持ち、矢を天に放つ。重力など物ともせず飛翔し、その切っ先を天へ向いたままに点のように小さくなって行くが、やがて点としてさえも見えなくなり、青の空に吸い込まれた。SERIから連絡。

『成功のようです…音、聞こえますか？』

「こちらでも確認した」

耳を凝らさずともTAGSIGNにも聞こえた。耳鳴りに近い、高音。

境界扉の拡張が成功したことを示す、空から零れるキーンというそれは第二深層境界中に響く。今日はこれを後六発、鳴らす。

『指、大丈夫ですか？』

「後六発撃つ頃には、腐敗してるだろうな」

『痛覚は』

「もちろん切ってる」

弦を握っていた側の指、その爪先はすでに腐敗をはじめている。あと六発撃つ頃には、片腕全体が腐敗するのだった。

「次の場所に向う」

公園から抜ける時に、子供の格好をしている者とすれ違う。実際に子供かはわからない、少年である。その少年がTAGSIGNを口をあぐり開けて眺めていた。

「黒い」と少年はTAGSIGNの爪先に指差して言う。

特に返事は思いつかなかつた。突然黒いと言われても、別に返す言葉もない。

無言のまま通り過ぎて、次の指定場所に向う。目立つのでセイントを圧縮して閉まってから、E 2の舗装があまりされていない道を駆け抜けて、E 3を通り、G 1へ。

G 1は繁華街で、E地区とは違って華やかで、人通りはE、F、Gの中ではもつとも多く、夫婦祭が行われているのもこの地区にある大きな公園でのことだ。G 1を抜けてG 2へ。スポーツセンターの近くにある空き地に踏み入り、そこから青空を見上げる。

「旗が邪魔だな……」

旗の数は時が進むにつれて多くなっている。青と水色のチェック柄の旗ばかりが空を占めているために、青空を見上げて、矢を放つための地点を見極めるのが多少難儀だ。だがまあ、SERIが矢を撃つべき方向を計算してデータとして送ってくれるので、それを解凍すれば、撃つべき方向が視覚化されるといわけだ。青色の旗の邪魔も、これによって無効化。

』ではお願いしますTAGSIGN』

「二発目……TAGSIGNの名の下に、撃つ」

順調に矢は発され、境界扉の拡張がされていく。月に一度行わなければならぬこの作業は雑務的なものに近いが、セイントと呼ばれる境界弓を持つことはA級以上でないと許されないため、TAGSIGNのような人物がやらなければならない仕事だ。境界扉は常に閉じていくものであるから、拡張し続けなければ事故の発生率が高くなる。持ち主に腐敗をもたらす境界弓で、空に矢を放ち、境界扉を開くことは、刻跳監視委員会の役割だ。

全行程を終わらせるまでに約二時間。

「七発目……TAGSIGNの名の下に……撃つ」

彼の右腕は腐敗し、ただれている。右腕全体が腐って黒ずんでいくが、まだ一発撃つだけの力は残っている。セイントの弦を力強く引き、矢、放つ。

青空を切り裂いて、天へ吸い込まれて。

『お疲れ様でした、TAGSIGN。メロン、食べますか？』

「あつ。後で送って」

『了解しました。特別に甘い奴を、用意しておきますよ』

「よろしく」

通信を切ってから、小さくため息。

今日は風が無い。陽気な気候で、湿気が多少。とりあえず仕事は今日はこれで終わり。

ちようどあったベンチを見かけて、前みたいに毘つてことはないよな、とチェックしてから座る。

腐敗してぼろぼろに痩せ細ってしまった片腕を、脳内で再生処理。
(痛みは無くても、体はだるい……)

最近、やはり無理を利かせているらしく、腕などは再生できるのだからいいのだが、全身の倦怠感という奴はある程度無くならないものだったりする。それは睡眠をとらなくては、無くならない。最近、あまり寝ていない。

TAGSIGNは目を瞑る。目を瞑ると景色が浮かんでくる。真っ白の部屋。あと、牢砂の言葉。

『あなたは刻跳監視委員会に対して疑問を持たないのですか？』

『刻跳監視委員会が第零深層境界を作ったわけですが、そもそも零化した存在を”無”にまでする必要があったのでしょうか』

『Mouth putting of the earthの事件が零化した刻跳者の危険性を人々に教えた。惑星と惑星がぶつかりあつて多くの人間が死んだのです。だから”無”の空間は作られた』
『刻跳監視委員会は、質の良い境界扉を独占している。だから、一般人の美子という方が”無”の空間に堕ちるなどという、あつてはならない事件が生じたわけです。さらに言うなら、そもそも第零深層境界という大掛かりな物を作る必要があつたでしょうか？』

『牢獄を作る程度の処置で良かったはずです。そういうものを作る技術は、すくなくともあつたはず。それなのに第零深層境界を作っ

た。”無”が永續する空間に閉じ込められるなど、ある種、死よりもむごいことかもしれない』

『刻跳監視委員会はそのむごい仕打ちを、一般人に対してやってしまっている。事故とはいえ、許されることでしょうか？』

『M o u t h p u t t i n g o f t h e e a r t h 事件。たしかにひどい事件でした。零化した刻跳者は恐ろしい。ですが、やはり第零深層境界を作り、そこに彼らを閉じ込めたのは不自然でした。そして失敗でもあったわけです。一般人を巻き込んだことを刻跳監視委員会は後ろめたく思っている。後ろめたく思っているから、勇太という男がバスをあなたに突っ込ませても逮捕しない。勇太という男を常に監視している。おかしいでしょう。勇太さんが事件を起こしてニュースになれば、美子さんの事件のことがクローズアップされるからです』

『第零深層境界には何かがある。或いは、何かの実験のためにそれを作ったのかもしれない。刻跳監視委員会はどうにも、きな臭い。黒い噂は数多くあります。あなたはそんな組織に利用され、そして利用しようとしているみたいですが、ああいう連中に関わっても碌なことにはなりませんよ』

『私達もね、ひどい目にありました。今それを語るのはやめておきますが……TAGSIGNさん、利用し合うだけの関係の組織にいても、迎える結末はひどいものですよ……』

刻跳監視委員会を悪く言う者などそこら中にいる。

だから一々、悪評を聞かされてもTAGSIGNの心は動揺すらない。普段なら。

しかしTAGSIGNは悩む。かつてAAA級の刻跳者だった者が言う、ひどい結末、とは。

『そういう結末を迎えたくないならば、あなたは私達に協力すればいいんです。……あなたを開放してあげます。そして考えてください、本当に刻跳監視委員会の飼いだいいのか。AAA級を目指すべきなのか。それでも考えが変わらないなら、それはそれで構いま

せん。刻跳監視委員会に私達のことを伝えても構いません。どうぞ彼ら側の戦力では、総動員でもしない限り、私達を捕えたり殺したりすることはできないでしょうしね…。ではTAGSIGNさん、良いお返事を待ってます。……もし考えが変わったなら、この日に、この場所に、来てください……』

考えてください、と言われて与えられた期間は二週間。

ご丁寧に、時刻も場所も指定してある。PM6:30にG4の競技場を待ち合わせに指定している。

その日時指定のデータを閲覧しながら、

(どうするか…選択をさせてもらえるつてのは、案外、難儀なことだよな……)

そう考えた時に、SERIからメロンが送られてきた。かなりの糖度を持つ甘いメロン。解凍すると皿とスプーンもセットで、メロンを半分に切ったものが現れる。TAGSIGNはそれを食べる。

一口、二口。スプーンで掬って果実を口に運べば、甘味を持ったそれが舌上でトロけておいしい。

ベンチに座ったまま、しばらくの間メロンと向き合う。考え事をしながらでも味がわからなくなるなんてこともない、主張の強い甘味を平らげていると、気が紛れてストレスが解消される。

だが、ふとメロンを見下ろしていて、思う。

このメロンはdive外世界で畑とかで生産される、いわゆる本物のメロン、と何も変わらない。

すくなくとも味覚はメロンの甘味を味わってくれる。dive内では全てが物質で、意識体のために存在している造られしモノなのに、dive外世界にある実際のメロンと何ら変わらない。

食べれば無くなる。口に運べば、減っていく。

dive外世界で、これだけ甘いメロンを作って消費者に送ろうと思えば、手間暇をかけることにはなる。具体的には、ハウス栽培とか、一日も休まず面倒を見るとか、ミツバチを利用するとか、火山灰土という水はけの良い土地で育てるとか。そういう様々なこと

を考えて人生というものを費やし、良いメロンは作られ、消費者に送られる。

TAGSIGNの目の前にあるメロンはデータ入力さえすれば、それが送られる。既にプログラミングされているが故に、甘いメロン、という項目を一度ポチッと押せばOK。送りたい相手に圧縮された状態でデータは送られ、その人は解凍すればそのメロンをおいしくいただくことが出来る。

何度でもおかわりは可能だし、甘味が無いメロンに当たることもない。百%きっかりの確率で、甘いメロンを平らげることが出来るというわけだ。何故そんなことが可能か。それは、このdiveにある存在のほとんど全てが、データで構成されているからだ。データで構成されているからデータで構成したモノを求めると。嘘に近い嘘が完成されてほぼ本物と変わらない、人類の発展によって生まれたいデータ空間、dive。人は肉体を捨ててその完璧な嘘に意識を投じさせ、自らの姿形を自由に変更し、たしかに生きている。データに塗れて。データのメロンをおいしく食べて。

やはりTAGSIGNは気が付かざるを得ない。

自分たちはでんでデータラメで、生きてはいるが、佇んでいる位置がおかしいのだ。

昔、こんな情報を読んだことがあった。

『しかし現実を現実とみなすか夢とみなすかは主観が決めるものです。我々は肉体を捨てて意識体としてdiveの中で生きること、データを利用し、時にデータに振り回されもします。良くも悪くも、diveにひどく影響を受けている。依存しているのかもしれない。肉体から離れたことよって我々は新たに宿るべきところをdive空間としたのかもしれない。ですが、それが正が悪かはわかりませんよ。地球上の生物の中で、かつてこのようなステップに達した種は無い。革新的な存在とも言える我々は、もしかするとひどく愚かなのかもしれないが、しかし新たな現実を作ったのも確かだと思えます。dive。この新たな現実を現実のものとして受け入れる

か夢とすることで認めないかは、賛否両論分かれることです。これまで数多くの人々が論争し、たしかな結論は出ずに来ました。もしやすると我々は退化しているのではないか、という意見さえも出ましたし、我々は神に近づいたと自惚れても良い偉業を為しているのだ、と主張する方もいました。我々の位置は脅かされています。肉体という安定した自分から離れ、diveという共有スペースを新たな器として皆で利用する。それは肉体を持ち一人の者として生きてきた我々人間の自我を脅かし、我々がどういった存在だったかを忘れさせる、位置崩しなのかもしれない。位置が崩れば人間は人間であったことを忘れ、自らを神と勘違いし増長し、やがて自滅するかもしれない……。だから我々は、模索することを止めてはならないのだろう…：自らが正しいのか、誤っているのか…：目の前にある食べ物の一つの苦勞もせずには作られるデータの産物であることを、決して忘れてはいけけないのだ。自分の身体も、相手の顔も、飛ぶ鳥たちも、造られたデータだということを忘れてここを本物の現実だと認識することはかりになってしまった時…：我々は本当に生物ではなくなり、データの一部分になっていくのではないか…：いや、あるいはもう…：」

この情報がかつて読んだ時、TAGSIGNはひどく背筋を震わせてしまったことを覚えている。

歯の付け根がぐらぐらし、指先が震え、胃がぎちぎちした。

今でもこの情報を思い出す度に、そうなる。そしてこう不安を感じる自分がデータに過ぎない存在なのか、と想像してみると頭を抱えなくなる。腐り落ちて黒ずみ、組織を崩れさせて地に吸い込まれるセイントに侵された片腕。使い捨ての片腕。使い捨ての身体。なら使い捨てじゃないのは意識だけ。その意識はデータ。なら意識は使い捨てじゃないのか…？使い捨ての物たちは全てデータなのに？

『自分が使い捨てじゃないと証明してくれるもの。それが何かはもう答えを出したはずだなTAGSIGN』

「そう、思い出だ」

唇が動いてこぼれた言葉。思い出。

『機械がなぜ機械なのか。使い捨てのものがなぜ使い捨てなのか。それはその者が他者に利用されるものでしかないから、機械は機械であり、使い捨ては使い捨てだ。自分の目的のために他者を利用するという意志があるからこそ、それは機械ではなくなり、使い捨てでもなくなる』

「だから自らの目的……目的があるから、それに向うために他者を利用できるようになる……僕に目標は必要だ……僕は零化したくない……零化しないためには記憶が多くあれば……だからAAA級の刻跳者になりたい……目的を叶えることで、僕は自分がデータではないという確信を強める……位置がたしかになる……指先が震えることはなくなり、僕は僕自身が使い捨てじゃないと自覚できるから……生きていける……このdiveの中で……」

だったらTAGSIGN……答えは出るだろ……

(そうだ)

立ち上がった彼の背中を、E 2の公園にいた少年が見送っている。

その少年がどこから来て、何処へ向うのかはTAGSIGNは知らない。

TAGSIGNが何処へ向うかを、少年が知らないのと同じように。

『離婚』

花火が打ち上げられる。夫婦祭が盛り上がってきたのだ。

三日月に薄霧のようにかかる群雲。中天より者たちと臨み物を言わぬ。

わずかに湿りつつある大気に羽虫飛び交い、鈴虫のような鳴き声は天空に届く。

山々の稜線窺える彼の場所、多少街を外れたところなる競技場。静かに喧騒を遠ざける。

そこに意識、現れり。

夜闇と同化する黒のスーツを身につけ歩く男女、東西より向かい合い距離を近づける。

東より来る者、白銀の刃を鞘に納め颯爽と地を進む。

西より来る者、黒の刃を鞘に納めたまま、翅を三日月の光浴びて輝かせる。

G 4の外れにあるその競技場ではd i v e内サッカーや野球の野良試合が普段は行われているのであるが、PM：6：30という時間なのにスポーツにいそしむ連中はいない。

東西より近づき合う二人。同じ顔をした男女、競技場の整っている地を踏んで、競技場の中心で互いに向かい合い、刃の切っ先の尖端を、チャキリと音を鳴らして、互いの額に。

女の方……獄奈がまず額から紅ノ黒を引き下げると地面に突き刺して祈りのポーズを取った。

一度瞑ってから開いた瞳の色は、しかしTAGSIGNの黒い瞳とは違う、紅に変わっている。覗き込めばそこに閉じ込められてしまいそうな狂気を秘めた赤。

音が遮断された。空の片隅より聞こえてきていた鈴虫の音も、遠くからの繁華街の賑やかさも。競技場の数箇所に取り付けられている照明が、眩しく、その二名を照らす中で、TAGSIGNも白銀刀

を地面に突き刺し、そして獄奈も翅を閉まった。

「Hallo」

挨拶には挨拶を返す。

「ハロー」

クスクス……

クス……

何がおかしいのだろうか、獄奈は唇に指をあてながら笑う。

「何で笑ってる」

尋ねても彼女はずっと笑っていて、訳がわからない。言い変えると怖い。

勿論、二週間前の出来事があったのだから、獄奈がマナーというものを一切気にしないようなフツキしている相手だということにはわかってはいるのだが、その相手と一対一で向き合うということに対して平然としていられないのは、TAGSIGNの脳裏に前回敗北を喫した記憶がこびりついているからに他ならない。が、今回は味方として……。

クスクスという忍び笑いを、獄奈は突然止めて、真剣な紅の眼差しでTAGSIGNを射抜いた。

「答えは勿論、出たんだよね、TAGSIGNさん」

紅とは血。血とは紅。血イニつを眼球として持つ己と同じ格好をした女に尋ねられ、物音の経たない静寂の中で答えを求められたなら。敗北の記憶の悔しさに塗れながらも、唇を動かして喉から言葉を紡ぐ。

「二週間も与えられれば、一つの答えくらいは出るよ」

「なら」

紅ノ黒を地面から引き抜き、再び額に尖端を向けた。そして、

「教えてもらおうか」

と先程笑っていたとは思えない、冷徹な調子で言った。

尖端がわずかに刺さり、TAGSIGNの額から微量の血液が流れる。流れるそれはポタポタと零れるものもあるが、紅ノ黒に飲ま

れるものもある。黒い刀身に滲み、吸い込まれて。

TAGSIGNの頬をも血液が伝う。獄奈は舌を出した。そこに蝶が描かれているということもTAGSIGNは初めて知った。目を翹につけている蝶を舌に持ち、その舌を伸ばしてTAGSIGNから紅ノ黒を伝った吸収されなかった血液を、彼女は舐めた。クスクスと再び笑ってから、

「早く」

と促す。一瞬何を早くすれば良いのか見当が付かなかったのは何故か。

「なんで獄奈さんは、僕と同じ顔形をしているのですか。からかっているんですかね、A級で弱っちい刻跳者を、小馬鹿にしていらっしやるんですかね」

「そんな話をしに来た訳じゃないと思うんだけどねえ」

「自分を馬鹿にしている相手の仲間になるうとは思わないでしょう？」

「へえ」

「へえ、って何ですか」

「きな臭いな、と思ったから」

「何がですか。僕はきな粉の臭いなんてつけていませんよ」

「つまらない冗談はよし子さん。TAGSIGNさん、餅にして食っちゃうよ」

「あなたは血しか食べないでしょう」

「そうだね。だからあなたが私達に敵対する決意を固めてこの場に来たのなら、血くらいは御馳走させてもらおうかと思ってるよ。通常、正式のアカウントで身体が死んだ時に意識体が修復不可能になる可能性は十パーセント。その十パーセントの恐怖を味合わせあげることになるのか、それとも私達が優しく手を取り合うことになるかは、あなたの答え次第」

「じゃあ顔形を似せてきた理由を教えてください、答えますよ」

「そんなに重要なことかなあ？　じゃあ教えてあげる。私はあなた

の身体、その設定がすごく良いセンスだと思ったの。良いパーツ選
びをしているじゃない、ってね。だから私はあなたの身体を真似てみ
た。これでいい？」

「嘘ですね」

「嘘？」

「あなたみたいに自己主張が強そうな人が、そんな素直な理由で真
似をするとは思えませんから」

「ふうん悪くない観察眼だとも思うけど。ま、そうね」

「やっぱり嘘ですか」

「うん、嘘。本当は理由はもっと別にある。これはね、餌」

「餌？」

「そう。何に対する餌なのかは、あなたの優秀な頭脳で考えてみる
と良い。……もういいかな、答えを聞かせてもらおう」

「答え、教えてもらってないんですけどね。餌、って、ヒントじゃ
ないですか」

「生意気なTAGSIGNさんだね。あんまりイラつかせないでく
れるかなあ」

「教えてくださいよ獄奈さん」

「嫌だ。もうぶつちんぷりん」

憤りで満ちた彼女は刃を振わなければ鬱憤を晴らせないらしい。

紅ノ黒を振り上げて振り下ろすという動作は、まず一般人だった
ら目に捉えることは愚か、彼女が身動きしたことに気がつけぬま
ま果てていたことだろう。

TAGSIGNでギリギリ回避可能って感じ。鼻先に掠めそうに
なったがバックステップで避けたということだ。おそらく獄奈は全
力の一割程度の力しか出していないと思われるのにそれである。ハ
ツキリ言つてマトモに戦える相手じゃない、ということももうわか
った。思い知らされた。

しかし、TAGSIGNには手段がある。

だから彼は両手を広げて、ほうら斬つてごらんよ、とでも言いた

げな表情を作ったのである。あからさまに挑発だと思えるその仕草は、獄奈を戸惑わせた。

「なんのつもりかな」

その問いをTAGSIGNは答えることもなくシカトし、得意気に相手を見下すような王様気分の表情を止めない。これには獄奈は内心ぷつちんぷりんでは無くぶつちんぷりんであったが、キレて刃を叩きつけようとする前に、競技場に二人以外の影が現れた。

！

彼女身構えるが、影は意識体ではなくデータ。過去が再生されて影が誕生したということ。

「お前はこんなものを急に再生させて、何が楽しい？ サッカーを楽しんでいる連中を見て楽しむために競技場に来ているわけじゃない」

dive内で行われるサッカープレイは公式、非公式、に関わらず録画して競技場内でその試合を再生することが可能だ。突如現れた影はそれであり、青白い色をした中身が空白の粹たちが、サッカーボールを追いかけてグラウンド内を走り回り始めた。

「TAGSIGNさん、邪魔だから消してもらっていいですかねえ」
「それはできない」

「へえ。それはおかしいね。あなたが再生させたのに、あなたが消すことはできない？」

「僕が再生させたんじゃないんですよ」

「ああ、つまり」

「そういうことです」

「あなたのお仲間たちがこれをやっている。そしてTAGSIGNさんは、私達の仲間になるつもりはないってことですかね？ さっきまでこちらの仲間になるようなことを臭わせる嘘を言って」

「得体のしれない元AAA刻跳者のために、今まで苦楽を共にしてきた仲間たちを裏切るような真似をするわけじゃないですか。常識的に考えて」

「常識的に考えて」

「それがお前の答えってわけ。なら、構わないんだけどね…。覚悟はできてるよね」

「その前に、少しかだけサッカープレイを観戦しましょうよ。戦いの前に戯れましょうよ」

「もつぶつちんきてるんですけど、何かキレるの通り越したから、いいよ、観戦しよう」

「さすが元AAA刻跳者。物分かりが良いですね」

「ふふ。ディナーはお腹が減った時の方がおいしく食べれる物ですから」

「怖いなあ、血マニアって」

「むかつくけど、ふふ、許してあげよう」

そんな会話を交わしてから後、二人はその場で向かい合った体勢のままサッカーを観戦するという奇妙な感じに陥るが、随分と長い間その奇妙な時間は続いたものだった。

競技場で駆けずり回るデータたちは一時も休むことなく動き、高い能力値設定になっている身体を駆使することで自由闊達にサッカーに励んでいる。

それを観戦しているその途中、選手たちが前半を終えて休憩している時に、獄奈がぼつりと呟いた。雨が一粒、たらいに落ちた時に鳴らす音のようにぼつりと。

「時間稼ぎ、だね。あるいは、もう」

それはそうだった。何のために意味もなく再生などをしたのかと言えば、時間稼ぎ以外の何者でもない。

「時間稼ぎ？」

とぼける。片眉を不思議そうに吊り上げて、真剣な顔つきにならないように眉間の皺を少しだけ寄せる。時間を稼がなければならぬ。もう相手を逃がさないための包囲網は完成したと思えるが、まだ準備完了の合図はこちらに伝わっていないから。

だが準備完了の合図が伝えられれば、完璧にこちらの勝利だった。刻跳監視委員会のほぼ全戦力が、元AAA刻跳者を排除するため

に集まっている。

刻跳監視委員会は、元AAA刻跳者三人兄妹、という存在に対して敏感に反応し、動かせるだけの戦力を総動員して掻き集めた。刻跳監視委員会のトップと元AAA刻跳者の三人の間にどんな確執があったのか、TAGSIGNにはわからなかつたし、これからわかるつもりもない。TAGSIGNはAAA刻跳者になって思い出を確保できればそれで良いし、まあ、三人に聞きたいこともあるにはあるが、頭がイカれている獄奈だとかとの交流はリスクが大きすぎるし、どうせ碌な扱いをされないのは目に見えている。

獄奈は、なるほど、と言ってからクスクスと笑う。彼女も刻跳監視委員会からそれ程の戦力が来るとは想定していないだろう。だから観戦をする余裕なども発してみせたのだろうが、それが命取りだ。準備完了しました。

SERIからの通信が入る。よし、とTAGSIGNは気分を良くしてから勝利宣言の一つでもしてやろうかな、と口を開こうとするのを、獄奈が遮った。やけに落ち着いているのに威圧的な声音で。

「星屑の欠片になるには十回程度殺されれば良い。あなたも私も不死身ではないから、それをされないための手段を講じることは、当然する。サッカーの観戦をしている間、あなたはずっと自分が有利な状況を導いていると錯覚していた。無謀だよ。所詮あなたたちは事の重大さを図りかねているから、読み違える。敵の強さを。己の強さを。もう準備は完了した。それは、こちらも」

TAGSIGNは、獄奈が喋っている内に、彼女と距離を置いた。対する彼女も距離を置いた。

互いがある程度の距離になった所で、獄奈とTAGSIGNは刀を向け合う。

TAGSIGNが言う。

「悪いけど、あんたら死ぬよ」

獄奈も言う。

「それ、死亡フラグだよ」

今にも争いは勃発する寸前だった。

いまや数多くの意識体の小さな息吹が、そこら中に潜伏し始めている。

「私たちの組織に協力してくれる奴つてのもいるんでね」

と彼女は笑った。TAGSIGNも笑った。

「所詮、小さな連中同士の結託で、刻跳監視委員会の数に勝てるわけないだろ」

「質ならわからない」

「数が少なくちゃどうしようもない」

火花が互いの刀の切っ先より散りまくる。いよいよ争いは始まる。身体切り刻まれても、撃ち抜かれても、踏み潰されても、十%の確率でしか死なない戦い。

TAGSIGNと獄奈が白銀刀と紅ノ黒をそれぞれ地面に突き刺したと同時に、多くの影が競技場内に姿を現し、喚き出した。その数は圧倒的で、全員が凄まじい形相をしていると言っても良いほど、戦意が高まっているらしい。

「血みどろの戦いじゃあ！」

獄奈はそう喚いてから高揚し、走り出した。そして刻跳監視委員会の現AAA級の連中も現れて、彼女はそいつら二人に一斉に襲われても、なんなく楽しそうに戦闘を試みせる。

TAGSIGNも様子を見つつ手を出そうかとも思うが、巨大な気配が背後に立っているのを察知したので、振り向くとそこには瓦

尋。
「刻跳者。今回は私が勝たせてもらおう」

このようにして戦いは多くの人と人のぶつかり合いによって、熱気を増していく。牢砂も現れて、また三人に協力する組織の連中だろう、姿形が人間のものを大きく離れて気味悪い奴らがそこら中から現れて戦いはじめる。それを刻跳監視委員会の面々が迎え撃つ格好となる。

TAGSIGNが瓦尋にあつという間に押され、殺されそうになった。

そこを突如地面の中から湧くようにして出て来たジョーシが、助けた。

「TAGSIGNくん。私一人では荷が重い相手ではあるが、お互いの死力を尽くしてこのバカでかいのを倒してみようじゃないか」
余裕な調子である。TAGSIGNは了解して、協力する。

そういう戦いを競技場の照明の上、眩しくて誰にも見えない場所から眺めている白いワンピースを着ている女。彼女はそんな所において熱くないのだろうか。熱くないのだろうか。彼女は楽しそうに足をぶらぶらさせて、下方での争いを眺めている。

餌につられてやってきたそれ。

女の子の格好をしている、対を求めるそれ。

餌につられて足をぶらり。

紅ノ黒の切っ先はそれに向けられた。

刃が宙を飛ぶ。弾丸かと見紛う勢いだ。

対を求めるそれ、呑気に鼻歌を口ずさんでいたから油断してて。

突き刺さった。眉間に鋭く。

戦いが一瞬、止まった。

何事かと思つて、みんな止まった。

血の雨。競技場中に振り落ちて、皆に降りかかる。

競技場中に降り注ぐ血。

対という餌に誘われて現れたそれ崩れ落ちるまで、ずっと血を降らした。

ザー、ザー。

ザー、ザー。

ザー、ザー。

気休めという嘘を少し剥ぎ取ったそこで

血雨はナミダとは別だと知っているのは当然のことだ。

あなたは滅びに向うためにこの世に生まれた。だから血の雨を浴びるのかもしれない。

答えが出るものじゃない迷宮で、架空の三日月に見下ろされながら、君は自らの証明に悩むだろうか。悩むとするならば君にたしかな答えを伝えよう、とかそういう空間が血雨を降らせるのではなくて、ただただ結果でしかないことで、私達の世界は何時だってパラレルワールドを作る可能性を持った予測不可能なんじゃ、無い。無い。無い。と、血涙を流す訳では、あるのかもしれない。

対を無くしたと喚いて、求めて、かなしい話をたくさん抱えて街を遊泳していた彼女、黒の凶器に射止められて血を吹き出したね。ザー、ザーと地上に降り注いでたくさんの方が、血液を浴びて鉄の味を舌上で味わうということだよ。恐怖。迫り来る鉄の味。予測可能。予測可能。

あなたは滅びに向うために、この世にいるのか？

こんなにも素敵な血を浴びて、死亡率十%の戦いに身を投じて己の何かを賭けているのか、そうでないのか、わかるはずだった。今、首を撥ねられて見える光景を空に見る時、あなたは生き返ってしまっただとしたら、それは不幸だと理解しえるのか。嘘、虚偽。

こんな平和な部屋で生きる者の言えることじゃなかった。

でも油断しちゃだめだ。十%の確率で死ぬのだとしたら、気を抜いていたらすぐに骨となって土に還ってしまうから。還った先では夕闇迫る朱色を見ることは愚か、暗闇で息づくあの迷いの陰を眺めることも愚か、自らの腐敗している墮落の底を見て絶望と対峙することも愚か、世界中に撒き散らされている理解できる不幸や幸福やイラつきやムカつきを感じることも、愚か。

今この血雨が降り注ぐ中、競技場で私達は、観客か、それとも演

者だろうか。あなたはどっちがいい？じつは選べるんだぜ。ただ観客は何時だつて油断した眼で、自らの居所が確かなものだど勘違いしていて愚でみっともなくとも取れる。それは演者の目線からは確かだろう。演者は何時だつて退場の危険性に怯えさせられ、クレームに震え、自らの居場所がぐらつくことにさえ気を配らなくてはならないのだから。その代わり血雨を浴びることもできるのだから、真っ赤に染まれるのだけれど。でも血は瘡蓋になって赤黒くなって剥がれなくもなるかもしれないから、注意だ。時には観客になっても良いだろう。そこで演者を客観的な目線で見つめてみれば、全てが滑稽に踊り狂っているに過ぎない、と心を安らげるかもしれない。ソノ色は青？それとももつと……。

居場所を確かにするために、戦いを始めるのか？

君は気に食わないものだらけだとしても、演者か観客かのどちらかだと思わないか。

あなたが滅びに向うためにこの世にいるのならば、演者も観客も難しいだろうか。

しかし観客は演者を眺めなくても、そこに虚ろな瞳をして佇んでいるだけで役割を果たしているとも言えるのだけれど。何時かは引き出される、なんて誰かがかつて歌っていた。引き出された時に演者の動きを眺めていなかつたあなたは追い詰められて発狂すると、その踊りがひどく滑稽で大ウケだ。悲しすぎる時に、思い出に浸ろう。浸れる思い出が、あるならば。

血雨はまだ降り止まない。彼女の体から溢れるばかりの血液は、ずーっと降り続いていて、止む気配を見せてくれない。その雨が止むのを今か今かと待っていて、きつと止んではくれないだろう。彼女の悲しみは深い底に沈殿しているへドロ口よりも厄介で、悪質で、そして深いのだから。手を振ってみても答えてはくれないだろう、顔が吹き飛んでいて、気付いてくれないよ。ザー。

なあ君は今、自分がどこに位置してるかわかっているだろうか。迷宮に踏み入って、足場だけは確保できていると思っていたのだ

ろうか。

はじめから演者には足場などない。観客にだって、ガラス張りの足場があるだけのことだ。

ここはどこだ？ わかりはしない。

ココは場所だ。気休めに過ぎない。

頭皮に血雨が入り込む時、侵略されるような気分で不安だろう。

天から降り注ぐということは、逃げ場がほとんど奪われているのと同義だから。地面にだって血は染みこむ。私達が血でできているからまだ良いものの、酸が空から振ってくると思像してごらんよ、この世は途端に地獄だ。なんで明日には酸の雨が降らないと思うようになったのだ。予測可能。予測可能。知恵。人間。意識体。我ら迷宮に踏み入り、血を浴びて踊り狂う。

永遠に終わりがこないような錯覚は予測可能ばかりの世界に暗雲を垂れ込まして、さらに三日月の光も太陽の輝きも遮るから、何時になってもここは曇りよりも暗い場所だ。場所。そう、場所、だ。我々は何時だって気休めと共に生きていて、いつかは気休めの中に佇んでいることさえも忘れて、ガラスの足場が鉄の足場になっていくことに気が付く。鉄の足場が出来たと喜んで大きく跳びはねてみたら、パリーン、と小気味良い音を経て鉄が割れるんだ。で、その時になってようやく自らの位置を思い出す。ここは無重力空間だったんじゃないかってさ。重力は気休め。制約は気休め。知恵は気休め。肉体は気休め。情報は気休め。衣食住は気休め。データは気休め。場所は気休め。でも気休め以上に必要なモノなんてほかにあるかな嫌、ないよ。だから場所は何時だってわかりやしないはずなのに、目に見えているんだろうが。鉄の足場が割れていく。気休めに気休めを重ねて嘘か真かわかり辛くした真だらけの世界で、嘘を好むのは誰かなんてもうわかっていているだろう。血涙だよ。血の雨はずっとそうだ。かなしみをもたらすのは何時だって嘘を好む迷宮者で、一番素敵な踊りを踊ってしまうんだろうが。嘘に嘘を重ねても真は消えてなくならないのに、嘘を付き続けてかなしみをもたらす

続けてしまっただからかなしい。嘘と嘘でかなしみを覆って、真は奥深くに押し込めるようにして見え辛くするけど、眩しくて煩わしい。陽の光を完全に遮るのが難しいのと同様に煩わしい。だから夜を好むのか。三日月は暗雲で隠しやすいものな。それでも完全な嘘で真っ黒い世界に閉じ込められることなんてそうそうなくて、何時だって真が奥で眩しい。

結局、みんなそうなんだよね。

演者も観客も皆その眩しさと友で。

弱きは嘘と夜を好み、強きは真と昼を好み。

ただそれらも最終的には気休めの一つでしかないのだけど。

そろそろ血雨が降り止む頃だ。戦いも終幕に向う頃だ。

位置がわからなくなっていたと思うけど、そろそろ位置は元に戻って鉄の床だよ。

パリーンと割れる、鉄の床だよ。気休めの連続と、気休めの連続。その昼と夜。強者と弱者。

世の理は電子世界でも変わらぬのならば、人は何故肉体を捨てたか。肉体という気休めを捨てたのだ、なら次に捨てるべき気休めを見つめるべきではないのか。気休めを見つめるべきというのさえも気休めに過ぎないのではないか。

もういいじゃないか。鉄の床はたしかに見えているのだ。見えるものが全てだとしたら、主観で感じれないものなんて脳で想像できないことなんて、いらない。見えるものが全て。

ガラスだとしても鉄の床として見える。

これはやはり性なのだから当然に感じれることであり、我々が根本では結局生物の延長線にある動物ということの証明か。そうはならないが、いや、まあ延長線かもしれないが、延長線だから何だっというのか主観よ。我々が意識体は何のためにあるかわかるか。言葉をツラツラと連ねられる理由がわかるか。それはな、地球がやがて滅びることと関連しているよ。地球から生まれし我々は、やはり地球が滅びることと関連しているということだよ。どう関連してい

るかはすなわち地球が何ゆえ人間を作り出したのか、ということだ。その理由。その訳。

タイムアップだ。血雨が止む。もったいづけるようだがこれでオシマイだ。気休めの理由を知るために位置を確かめてから、前を向いて賞賛の拍手を鳴らし、口笛を吹いて三日月を見上げる。鈴虫再び鳴き始めるその位置にて、競技場の照明が点滅して、辺りが暗闇に包まれてしまいそうになったなら。

観客が愚な笑い。演者が踊り狂う。

ザー。ザー。ザー。

ザー。ザー。

ザー……。

止む。止む。止む。止む。止む。止む。止む。止む。止む。

止む。止む。止む。

血の雨の地面にぶつかって弾ける行為が終わったことで、ザーというそれは止んだ。

「案外、腕を上げているかと思えば、鈍くなったのではないかな？

君達三人は」

刻跳監視委員会のAAA刻跳者、そしてジョーシ。

瓦尋、獄菜、牢砂の三人をprisonで捕え、取り囲んで優越に浸っている。

彼ら三人の協力者だったらしい、様々な動物の格好をした集団は負けを見極めるや否や、独自の逃げる方法でも持っているのだろう、刻跳監視委員会の網の目を潜り抜けて逃げた。

残された三人は牢獄に捕えられて、逃げることも反撃することもできなくなったというわけだ。

こちらが勝利した要因のもっともたるは、予想外のジョーシの強さであっただろう。

TAGSIGNに対して二人でかかれば瓦尋にも適うかもしれない、とか言っておきながら、ジョーシは圧倒的だった。瓦尋の巨大な拳を百発一秒間の内に放つみたいなの連撃を、全て小指一本で受け止めてから、強烈な回し蹴りを一発ぶちかまして瓦尋を戦闘不能にしてみせたのだ。

呆然としているTAGSIGNに、prisonで瓦尋を拘束し終えたジョーシは綿のように気軽な調子で言った。

「世界は広いよ、TAGSIGNくん」

「……………」
顎が外れそうになるような衝撃を受けたのはTAGSIGNだけではなかった。

瓦尋が一撃でやられたことで動きを止め、え、これ夢でしょ、みたいな呆然とした顔つきになったのは獄奈と牢砂、それと彼女らの協力者たち。全員が瓦尋の強さをわかっていただけに、それが回し蹴り一発で敗北を喫したというのだから、獄奈は焦って紅ノ黒を自らの手に戻し、無謀にもジョーシに突っ込んでしまってしまい、結局彼女も回し蹴りの餌食になったのである。

「HHHHHHH！弱くなったものだな、諸君！どうやら私一人で十分だったらしい！」

ジョーシは獄奈をprisonに納めると、鷹の瞳で最後の一人を睨む。

「……嘘、まだ、」最後の一人は狼狽してよたよたとする。

だがその最後の一人、牢砂が何事か言い終わる前にジョーシは彼女に急接近、そして回し蹴り。それは華麗に彼女の脇腹にHIT。砂埃上げながら彼女は吹き飛んで戦闘不能に。prisonに閉じ込められた。

こうして三人は、牢獄に囚われたというわけだ。アツという間のこと。

血イの水たまりが雨のせいですこら中に出来上がってしまったその場所に、仮牢獄三つ。

刻跳監視側も組織側も、そのほとんどが逃走と帰還をしたことで、競技場内の影の数は随分と少なくなり、ジョーシとTAGSIGN、獄奈と瓦尋と牢砂、ジョーシを守るボディガードのような雰囲気です立つ名の知れたAAA刻跳者二人、の七人だけとなる。

競技場に一つ設置されている巨大スクリーン。公式の試合がある際などにはよく利用される、観客が演者を良く見るための四角の枠。ジョーシは仮牢獄三つをスクリーンの見えやすい位置に指先を動かすことで移動させると、親指と中指を擦らせるのを利用して音を鳴

らす、いわゆる指パツチンをした。パチン。Cool。

それから少しの間を置いて、ジョーシの指パツチンに反応したということであろうか、スクリーンに映像が映された。おそらく仮牢獄の三人に見せるための、映像。照明が落とされて暗闇のスタジオムで三日月が仄かな明かり。そんな映画館のように暗い所で、映像は上映された。

といっても、それは例えば奇奇怪怪なホラー映像というわけでも何か衝撃的なものばかりを映している凄まじいハプニング映像でも彼らの過去を映すようなノスタルジックな映像というわけでもなくて、なんとさえいいのだろう、それはナチュラルなものであり、つまり自然映像だった。

自然映像。鯨が潮を吹き、イルカが遊泳し、白鳥が舞う。狼が荒野を駆け抜け、チンパンジーがジャングルの木の上を渡り歩く。卵が孵って幼い鳥が厳しい弱肉強食の世界で飛び立つための練習を繰り返している。梟が夜鳴きし、イソギンチャクがわらわら蠢き、エンゼルフィッシュが泳ぐ。ミミズが地面を動き、熊が山奥で餌を探している。

T A G S I G Nは頬を搔いて映像を眺める。退屈だし、意図がわからないから。

白銀刀を地面に突き刺して、地面の血を消してから、そこに尻を置いて胡座を掻く。

獄奈はprisonの中でお茶の間で過ごしているかのような悪い姿勢で見ている。

瓦尋は修行僧のような厳肅なる姿勢。

牢砂は陰鬱気な、深い水の底に沈んでいるかのような俯き加減の姿勢。

ジョーシは庭とかに置いてあるようなガーデンパラソルを何時の間にかその場に展開していて、優雅にも紅茶を飲みながら映像を見ている。AAA刻跳者二人は真っ直ぐな姿勢でその両隣で突っ立っている。T A G S I G Nはこの状況が作る空気に耐え難く、何かを

言おうと思うが、ジョーシもどこか話しかけるなよオーラを出しているの、やはり時間が過ぎるのを待つしかないようだった。

三十分がたった頃だろうか。

海の中で数百匹を超えるであろう魚たちの大群が、あのフェアリ―たちが繭造りをするのと似たような行為、それは実際には威嚇をしているらしいのだが、それは退屈を感じていたTAGSIGNにも感動をもたらす程、壮観だった。というかその自然映像は結構すごい映像がたくさんあって、はじめは退屈ばかりを感じていたTAGSIGNなのだが、次第に映像にのめり込むようになったりした。そして一時間がたつと。

グス……グス……

……グス……グスグス……

泣くのを堪えるような呻き声。え、と思うTAGSIGNであったが聞き違いでもない。

しばらくその噁り泣きは続いたのだが、その泣いている者は誰であろう獄奈だった。

prisonから漏れる悲を纏ったそれを零すのは、彼女。何が悲しいのか。今になって負けたことを実感して悔しいのか。それとも別の理由があるのか。TAGSIGNにはわからないが、あの自然映像に何らかの泣かせる理由が含まれているのか。それとも感動しただけか。

もらい泣きという奴だろう、獄奈が泣き始めた数分後には、牢砂も泣き始めた。

瓦尋はさすがに泣いていないが、二人はグスグスとしばらく泣いていて、一時間からさらに三十分くらい経った頃には、なんと瓦尋ももらい泣きを始めてしまって、三人揃ってぐすぐすやってしまうようになった。ジョーシはこうなることが狙いで、自然映像を流したのだろうか。だがもう捕まえた三人をこうして泣かせることに何の意味があるのか。わからないのだった。

思い切って三杯目の紅茶を飲んでいる途中のジョーシに尋ねてみ

ると、彼は呆気なくこう答えた。

「嫌がらせだよ、TAGSIGNくん」

聞き違えたのかと一瞬錯覚したが、ジョーシは舌足らずでは無い。嫌がらせ。もう勝った相手にそれをするというのは泣きっ面に蜂なんだそれは。そんなことをする必要があるか。そういう意のことを尋ねると、ジョーシは乾いた笑い声をあげて、真剣な顔つきをTAGSIGNに向ける。

「いいですよ。彼らにはね」

「いいんですか。なんで自然映像なのかはわかりませんが」

「感動するでしょう。でも彼らにはこれは嫌がらせなんです。死ねない彼らにはね」

それを聞いたTAGSIGNは、牢砂が言っていた言葉を思い出す。

『私達は死なない意識だということ。言い換えれば、死ねない、とも』

「死ねない。十パーセントの確率での意識の死。フリーアカウントでは二十五%。それが無い、ということですか。彼と彼女らには」

「よくわかってくれるねTAGSIGNくん。その通りだ。だから彼らには生物を見ることが悲しみに暮れる原因になる。こうやって泣くことから見ても、やはりそうなんだね。気付いてしまったからわかってしまったから。可哀想なことだが、これは仕方が無いことだ。TAGSIGNくん、知らない方がいいことというのは、たくさんあるよ。それをわかってくれるなら、もうこれ以上私に何かを尋ねないでくれ。今は」

「……………」

喉が詰まった。それでも尋ねて追求しようと唇を動かそうとしたが、喉が詰まって、それができない。誰かにそうさせられているというよりは、自分自身の何処かが喉を詰まらせているという感覚だった。

『TAGSIGN。帰りましょう。あなたの仕事はもう終わってい

ます』

SERIEからの通信。しかし、帰りましょう、という誘いが引かかる。いや、SERIEに他意は無いのかもしれないが、TAGSIGNの無意識的な部分がそう思わせるのか、彼の足はその場から動かず、SERIEからのアクセスを拒否した。『ちよ……』

「どうしたのかなTAGSIGNくん。落ち着かないね」

「いえ…この映像を見終えたら、僕は帰ります」

「いいんじゃないかな。こういう映像は見ておいても、損はしないさ」

そう言い終えた後に、ジョーシは意味深な笑い方をした。ウクツ、みたいな。喉奥で噛み殺すような笑い方というのだろうか、かなり不自然な笑い方を、今の言葉を言い終えた途端に、ジョーシはした。TAGSIGNはそれにも引っかかる。何かに違和感がある。どこかに違和感がある。

その正体を理解できないまま、TAGSIGNはもう一度胡座を掻いて地面に座った。

自然映像は計二時間三十分続き、その間、瓦尋と獄奈と牢砂はずっと泣いていたのだった。

一回、TAGSIGNの涙腺もウルツと来た。でもそれはすぐ奥に潜んでくれて静まる。懸命に生きる生物たちの姿はデータではないとわかる。それは安心できることだな、とTAGSIGNは感じた。

（帰るか。こいつらはジョーシとかが処理してくれるのだし。違和感なんて気にせず……）

自然映像の上映は終わった。二時間三十分、なかなか長い時間ではあったが、終わりを告げた。スクリーンが黒くなると共に、落ちていた照明が灯り、競技場は光に包まれる。

出口は何処だったか、と思いつながら彼は周囲を見渡す。見つける。「では、僕はこれにて帰ります。おつかれさまでした」

そう告げるとジョーシたちも挨拶を返してくれる。AAA刻跳者

の二人も、頭を下げる程度の挨拶はしてきた。

そしてTAGSIGNは歩き始める。出口に向って。ここになつてようやく、さっきまでのとは別の種類の違和感に気が付いたというわけだ。

照明が付いたことによつて地面がようやく見えるようになった。色。何があるか。血があるはずだ。血雨はあれほど降り続いてきたから。あの誰かはよくわからないが味方だったのだろう、突き刺されて血をあんなに噴出して、（紅ノ黒にやられるとあなるのだろうか）やられてしまった人は無事だろうか。まあ、十%だから大丈夫だろう、って問題は今はそれではない、考えることはそれではない。血が、消えている。

「何……!?!」

TAGSIGNは立ち止まってから、周囲を見渡した。冷や汗が額や腋から出てきて、得体の知れない不安感に纏われる。無い。見渡しても無い。競技場のそこら中にさっきまでは湿っていたあの血液が、無くなっている。

明らかにそれは異変だと思える。

噴出した血を消すには、その血を噴出した本人が処理しなければ消えない。

でもその血を出した本人は突き刺されてやられたはずだ。ならば、血はそう簡単には処理されないものである。なのに消えている。ということとは、生きている、ということ？ 上半身を貫かれたのに、生きている、ということ？ そんな身体があるはずがない。人間の身体というものは、上半身を貫かれたらオシマイのはずだ。

「なら……あれでも生きているということは…生きているから血を回収する処理をしたのだとしたら……そいつは何者だ……」

想像する。様々な可能性はある。だがその可能性の内のどれか、ということ特定は出来ない。

自らの思考ルーチンに囚われて周囲に気を配らず、出口まで歩き終えた時に、もう一度競技場に振り返る。随分と遠くなつて小さく

映るようになったが、牢獄に囚われている三人と、ジョーシとA A刻跳者二人、はまださっきの場所にいます。

「ジョーシは気付いてないか……」

伝えるべきかな、とも思う。しかし彼のことから気が付いているかもしれない。そして既にその理由の解答を出しているかもしれない。とすると、教えに行く必要は無い。

「んん」

悩む。そしてわずかに空を仰ぎ、また視線を地上に戻す。

その動作をし終えた後の、地上、に、それがいた。正確には、いる。

見つけた、とTAGSIGNは思った。お前は何者だ、とも思っ

た。ゲル状の何かが競技場の床を張っている。うぞうぞと蠢いていて、ジョーシたちのいる方向へ近づいているのがわかる。ゆったりとだが、這うことで近づいている。

「何者だ……」

呟きながらTAGSIGNは走り出す。

その蠢きへ向かって。何かの解答をそいつが持っている、無根拠に湧き上がってきた感情が、何故か無根拠だとは思えないまま。

しかし走り続け、そのゲル状の蠢きの姿が大きくなり思っていたよりも大きいな、とわかるようになった時。TAGSIGNは足元を掬われた。

掬われた足元に目をやると、そこにゲル状。目を見開き、驚きのままに白銀刀をそれに振り下ろすが弾力がすごいのだろう、刃が通らない。TAGSIGNは足元を掴まれたまま宙に浮かされる。何だこれ、と思っている途中に頭の中にノイズが走った。

ノイズは雑音。いろいろな音の連鎖。連なってズズズと脳を締め付けるようなノイズが音量を上げて差し迫ってくるような。ああ、ああ、ああ、と思うTAGSIGNは意識が混雑していくのに気がつけず、そのまま意識は濁ってしまうから、深い深遠に引っ張り込

まれて暗闇に引きずりこまれた。それはわずかな時間の出来事だったから、TAGSIGNは何がどうなったのかまったくわからない。でも彼が意識を取り戻した時。もう彼は競技場にはいなかった。そこにいるのは。彼が意識を取り戻した時に、いた場所は。

こんにちは、対の方々。

獄奈が見える。紅ノ黒を構えたまま、頭痛でもしているのだろうか空いている手で頭を抱えている彼女。そしてもう一人。

白いワンピースを纏っている女、に見えるもの。それが、こんにちは、と言った？

かなしい。かなしいから、会いにきました。

そのものは言う。

その場所は暗い部屋だった。

地面も空も無いような、物もモノも無いような、ただひたすらに暗い場所。

そのものと僕と彼女しか今はいない場所。暗い場所。

「Welcome」

歓迎された。

境界が現実

うるるかむという招きということとは、呼ばれたということだ。

白いワンピースのそのものに。何かの予感をその存在が強く主張している。

『TAGSIGNくん、知らない方がいいことというのは、たくさんあるよ…』

引きずり込まれた時に聞こえたノイズの残滓。ジョーシの呟いていた、知らない方がいいこと、それを白いワンピースのそのものが伝えてくれるような予感。ただそのものに近づこうとするのは自らでは無理、部屋には足場が無くて、そういえば壁も天井も無いかもしれない。

そもそもここは部屋なのだろうか？

とりあえずそのものを呼んでみようと思った。そのものは、かなしい、かなしい、と悲しがるばかりで千鳥足でふらつくばかり。獄奈の方へと近づいて彼女に抱きついて、何だかぐにやぐにやしてちよっかい出すとか、不思議で意味がないようなことばかりのそのものを見てみると、早くこっちに来てくれ、と叫びたくなる。しかしこの部屋にいと、何もしていないのに圧迫される気持ちになる。部屋に蔓延している大気が、呼吸すればするほど内蔵を締め付けて痛めつけてくる気がして不愉快。不愉快が凝固して悪性が強くなっているような大気のある部屋だ。

そもそもここは部屋かはわからないのだが。無重力。

そのものが近づいてきた。白いワンピースの裾をはためかして、獄奈の腕を引っ張っている。

いこうよ。

細い腕だ。それが差し出された。

TAGSIGNは差し出されたその手を掴んだ。そのものに警戒する必要は感じられなかった。TAGSIGNにとってそのものは

知りたいことを知っている、予感そのものだからだった。

連れ出され、黒い無重力の中で引つ張りあげられて、風を感じる。何処に連れ出されるかはわからない。

連れて行かれる場所の全てには、真つ赤な縦線が景色に入り込んでいた。

それは赤い雨だ。そのものは彼と彼女を、赤い雨降り注ぐ空に連れ出して、フェアリーのように自由気ままに遊び舞う。

ほら、邪悪たちがしがみ付いている街です。私はここに血の雨を降らすことで、邪悪たちの頭皮を通して私を染み込ませて、脳内から説教してあげるんです。あいつらの根っこに染み込むことで邪悪たちを変えてしまふんです。素敵なことだと思いませんか？ そのものは嬉しそうだ。かなしい、かなしい、と散々呟いていたそのものは、血の雨を降らすことで嬉しくなるものなのか。

それはそうですね。邪悪たちの脳味噌をいじれるんですよ。ぐにゃぐにゃにね。

「……まあ血というセンスは悪くないけど」

今まで黙っていた彼女、獄奈は、雨に降らされている地上を眺めながら、涎でも垂らしてしまいそうな程の緩んだ表情をしている。血を見ると恍惚とする癖でもあるのだろうか。

その街には無機質な高層ビルが立ち並び、黄色のライト、青色のライト、赤色のライト。色づいている街並の中で多くの人々が血雨を浴びているであろう。こういう無機質な高層ビルが立ち並んでいるということは、ここはdive外世界だろうか。第二深層境界がこんなにも無粋な建築物ばかりを建てる必要は無いのだから。なら、血雨を浴びている人々はまだ肉体を捨てていない、データでは無い生物たちということだ。血雨が降っていることに、彼らはどんな反応を示しているだろうか。慌てているだろうか。それとも慣れているだろうか。この血雨を降らす行為は日常的に行われているのだら

うか。

いえ、今日がはじめてだから、きつとみんな驚いているよ。邪悪たちに私の心が染み込んで、みんなが私のかなしい話を聞いてくれます。で、かなしいなあ、ってなります。

かなしいなあ、って思わせてどうするのだろうか。

それよりも教えてもらいたいことがある。

例えば、君はなんで白いワンピースを着ているのか、とか。

あなたはぜりい状なのにどうして人の形をしているの？ っ
て尋ねているようなものですね。失礼ですよ、そんな質問は。私は地上に愛を零しているということです。血の愛。フ、ヒハ。愛が血をもたらしてかわいいね。ヒ、フハ。

『ハヒフヘホ。そのゲル状と話しても無駄だよ。無駄っていうか、TAGSIGNはそのものに期待しているみたいだけど、こうやって血雨を降らしてるのも、私達を対とみなして連れ出してるのも、そのものの気まぐれに過ぎない。気まぐれで構成されている堕ちたもの。堕ちたから対を求めている。そもそも君はこれが何をしでかしたのか、知らないよね？』

獄奈が脳内に語りかけてくる。そのものの求めていること。そのもののかつてしでかしたこと。たしかにTAGSIGNは知らない。だが獄奈はそれを知っているというのか。

あんた何もわかってない、みたいな事を言われるのは不愉快だった。

『上から目線で私いろいろ知ってますみたいな態度って、他者とのコミュニケーションが下手な奴がすることだよ』

『そうすぐに不愉快な態度を表すお前の方が下手糞だと思うけどな』

『はっ』

『ほっ』

口には出さずそんな会話を交わしている内に、高層ビルの一角、その屋上に到着してヘリコプターの着陸できる場所に、そのものの案内の元、足をつけた。白いワンピースは随分とはためいていて頼

りないが、不思議とふしだらなことにはならない。周りの人間から見れば、白いワンピースの女性一人に黒スーツの男女という組み合わせなのだから、異様な雰囲気ではあるだろう。どこぞのお嬢様がSPを従えてるんですか、みたいな。二人とも同じ格好だし。同じ顔だし。

「ご都合のよろしいことに、ここは血雨が降っていないな」

TAGSIGNが踏む足元には血たまりも無い。上から降ってくることもない。

そして足をつけてふと冷静になってみて気が付く。いろいろおかしい。

ここがdive外世界なら偽りの身体、この黒スーツを纏ったTAGSIGNの姿でいられるはずはない、のに姿形は何ら変わっていないし、白銀刀も鞘に納まっている。慌てて獄奈の姿を再確認してみるが、何ら競技場の時と変化は無い。そもそもdive外世界にいたら、人の形をしたものが道具の頼りも無しに空を飛べるはずが無いのだ。どういうことか。

これら無骨なる建物たちは、diveで造られたモノということ……？

しかし、なら何故、こう無骨なのか。dive内第二深層境界では重力が設定されていると言えども、様々な制限を無視して建物を建てることは可能だったりする。資源は全てデータだから無くなることはないし、造る時にも実際に骨組みをしたりとか、そういうことをしないで、データ処理だけで建物は造れてしまう。なんてお便利。なんてお上手なんですよ。

という訳で第二深層境界のどの都市にしても、こんな無骨な旧世代の都市というのが出来ることはありえないわけで。ビルディングなんて過去の遺物。そりゃ発展が世界の中でもまだ遅い国とか、現実世界の中ではこういう場所が無いでもないのだが。自らの格好が黒スーツの時点で、ここはdive内で間違いないだろう。

TAGSIGNは、知りたいな、と思った。様々なことを知らない

い。

『TAGSIGNくん…知らない方がいいことというのは……』

ノイズは掻き消して。

「ここはどこなのか、あなたにはわかる？」

高層ビルの屋上から、血雨の世界を見下ろしつつ、そのものに尋ねる。

そのものはこう答えてくれた。

「いや知りません」

うわああああああああ知らないんですか、って心の中で突っ込んで知らないものは知らないのでしょうか。ならば仕方が無い、ということとで次の策を練ろうとした所に、

「ぶぶー。うっそでしたー」

などとフザケタ感じでくるとその場で回転。裾をはためかせる。夏の中の爽やかな少女って感じの露骨な。こんな暗くて高いビルの上で、そんなミスマッチングな動作。何だか一筋縄でいかないタイプかもなあ面倒かもなあ、と思いつつTAGSIGNはもう一度。

「じゃあ、教えてもらってもいいですか」

丁寧な感じで。恭しくお辞儀とかしてみたり。

しかし顔を上げてみると、そっぽ向かれていた。そしてシカト。言葉が返って来ない。

何か困ったな、と思っている内に、右腕を肩口の辺りから斬り落とされた。

マジ、いきなり何しでかしてくるんだ、と全身から一気に汗を噴き出させながら背後に振り向くと、紅ノ黒を振ったばかりの獄奈が、何か考えているらしい顔つきで、そこに立っている。そして、

「うん。間違いないな」

と勝手に何かを納得した。TAGSIGNとしては片腕を斬り落としていて何納得してんじゃ、と怒りを感じそうになるが、脳内処理して腕を復活させた。その手が治っていく感じもいつも通り。やはりここはdiver内。ではこの無骨な都市は何処だろうか。見知

らぬ所なのは間違いない。

獄奈は何か、わかつたらしい。理解したらしい。

「何かわかつたなら、教えてもらってもいいですかね？」

だが獄奈も一筋縄ではいかない悪魔、だ。

「いいよ」

と即決してこちらをわずかに喜ばせておいて、その次の瞬間には、
「ただし、私と闘って勝つたら、という条件つきだけど」

と無茶苦茶だ。既に実力差が随分とあることは知れているというのにそういうのだ。こちらに屈辱を味合わせる為に言っているのだ、さつきジョーシに嫌がらせをされたウサ晴らしをしているに違いない。

そう思うとTAGSIGNはム力ついて、自分の弱さを呪いたくもなったが、そんな彼の様子を見て取ったのか、彼女はTAGSIGNに希望の光みたいな言葉を贈った。

「TAGSIGNと同じ程度の強さになってあげれば、君の勝てる確率は五十%になるよ」

耳を疑うが、どうやら嘘ではないらしい。

「データ処理して、自らの強さをA級刻跳者のレベルにまで下げるってことを……」

「そう。データ処理で実力を下げて戦えば、私は手加減をしないで君と全力で闘って、楽しむことが出来るでしょ？ そりゃ私が全力普通に出しちゃったら君なんて瞬殺だけど、まあ、私は血を見るのは好きなんだけど、本気で闘い合った時に血を見るのが一番好きなんだよね。で、その白いワンピースのゲル状も、対が闘うのを見るのは好きだから、丁度良いと思うんだよね、いろいろと」

何がいろいろ丁度良いのか、それは良くわからないが、どうやらそういうことらしかった。

その白いワンピースのものも、ソッポを向いていたのに、闘い、という言葉聞いて興味を持ったらしかった。こちらにキラキラと目を向けている。

「じゃあ、文句は無いよね。君が勝つたらいろいろ教えてアゲル」
獄奈は気合十分らしく、紅ノ黒をぶんぶんと振り回し始めた。

「僕が負けたら？」

TAGSIGNが尋ねると、クスクスと彼女は笑った。

どうやらそのクスクスとした笑いから、ひどい目に遭わされるような感じだった。

おそらく血みどろにされたりするのだろう。生き血を全部吸われるとか。

その証拠に、獄奈は恍惚とした表情をこちらに見せてくる。ああ嫌だなあ、と思うが勝てば情報を教えてもらえるし、相手がこちらの実力に合わせて来てくれるというチャンスに、乗らない手は無い。

TAGSIGNは白銀刀の刃を煌かし、チャキリ、と音を鳴らした。

「わかった。やるう」

TAGSIGNがそう言うと、獄奈はクスクスと笑うのを止めてから、毎度の祈りのポーズを取った。勝ったら、そのポーズの意味も教えてもらおうかな、と思ったりした。

互いの実力が同じなら、勝率は互いに五十%。ならば運で決まるだろうか。

幸運。神に好まれし者が享受できる特権。神に好まれるという意味では、祈りのポーズをしている獄奈の方が有利かもな、とTAGSIGNは漠然と感じた。感じながら、意識は相手の挙動のみに集中していき、辺りの景色はぼやける。

3、2、1、……

急に余計なカウントが入った。白いワンピースのそれが、言い出したのだ。楽しそうにおちゃらけた感じで。獄奈もそれで気が逸れたい、ならば……。。

0

が言い終わる時にはまだ獄奈の気は逸れている。TAGSIGN

は、卑怯かもな、とも思うが不意打ちが禁止という訳ではない、と言いつつ白銀刀で紅ノ黒を弾き飛ばすつもりで獄奈に急接近、丁度銀の刃の先端が紅ノ黒を弾いてくれるイメージで、振った。

だが、さすがに反応が良い。不意を付いてきたTAGSIGNの動きを察知した獄奈は、銀の刃の太刀筋を見極めてみせた。わざわざバックステップをして距離を置くこともせず、身体をわずかに捻るだけで回避を終了させると、不意打ちで決着をつけようとしたせいで姿勢が微妙に悪いTAGSIGNへの反撃を開始する。一歩踏み込んでから、見極めの難しい、浅いながらも波打つように連続してくる斬撃。

また黒スーツを切り刻まれて血塗れにされるのも不愉快ではあるが、下がってはならないという感覚的な訴えが心内に湧いたので、あえて切り刻まれてみる。ぐしゃぐしゃぐしゃぐしゃ。痛い。いや痛覚は無いのだけれど。

痛々しく切り刻まれながら、しかし退かなかったので距離は間近。ここで獄奈という戦闘狂で血狂いたる相手にダメージを与えるに、必要なことは。やはり意表をつくことだろう。

「距離が近いけどどうするかなあTAGSIGNは！」馬鹿に、いや楽しんでる。ならば。

「驚かせる……」

白銀刀を持っている側の、片腕に最大限の力を込めて後に、白銀刀を地面に思いつき突き刺す。地面は思っている以上には固くあつてくれたので、ずぶずぶと白銀刀が沈み込んでしまうこともなかった。この刺し込んだ白銀刀を棒とし、利用することで、片腕を起点に、TAGSIGNは自らの身体を宙に浮かした。それはさも、陸上競技で棒高跳びをする人のように。

「へえ……！」獄奈は驚いて目を見開いてから、TAGSIGNの飛んだ上空を見やると、丁度上空から降りてこようとしているらしいヘリコプターの眩しいライト。その輝きで目が眩んだ。

「これは偶然でしょ……」

そうぼやきながら獄奈は迎撃が難しいことを感じ、とりあえず地上に刺しっぱなしの白銀刀は使えなくしてやるう、と思い立って地面から引き抜いてしまうと、そこら辺に放り投げた。

「あんたはこれで丸腰！ そんなに高く跳んで、どうするってのかな！」

たしかにTAGSIGNは高く跳び過ぎだった。目を眩ませて、白銀刀を引き抜き、また上を見上げて構え。そういう暇が獄奈に生まれたほどに、彼は高く跳んでいた。

「……血イ」

彼女はそう呻くように呟いてから、恍惚とし、そして蝶の描かれている舌で、唇を舐めた。

ヘリコプターのライトは眩しいままだが、それでも狙いは付けられる。TAGSIGNを戦闘不能にする斬撃を放つことくらいは出来る自信と実力は、自らを制限している彼女にもある。

「もらった」

一閃。そして、血。

「……………！」

だが急所を狙った斬撃は、突如としてTAGSIGNが空中で姿勢をわずかに変えるという器用なことをしたために、ずれた。ずれて、違うところを斬ってしまい、そしてそこはどうかやら血がよく噴き出る箇所だったらしく、噴水から溢れる様にズパーッと、獄奈に血が降りかかった。

普段なら獄奈にとってそれは嬉しいことではあるが、しかしそれによって、目、をやられた。

（なるほどね……）

眼球の中に入った血のせいで目を開くことが出来ない。急いで処理をしながら、とりあえず背後の方へと跳んでTAGSIGNと距離を置く。そして獄奈は、瓦尋のように耳と鼻だけでも戦えるように訓練しておけばよかったかな、とわずかに後悔する。彼女は瓦尋のように器用なことは出来なかった。そこまで戦いの腕を上げよう

とは思わなかったからだ、それが仇となった、と悔やむ、が、悔やんでいる内にデータ処理は終わってくれて、目は、開けた。

そして両眼を開いたその真ん前にいたのが、拳を振りかぶっているTAGSIGNの姿、というわけなのだった。

思いツ切りぶん殴られて屋上を何バウンドもして、その勢いが余って屋上を飛び出してしまい、獄奈は重力に引つ張られて地上へと落下した。そのまま落ち続ければ地上に真っ赤な花を咲かすだろう。自分の血はあまり好きじゃないんだけどな、と思う獄奈は、落ちる途中でTAGSIGNに手を差し伸ばされた。

「僕の勝ちだよな」

天から手を差し伸ばしながら、彼は勝利を宣言する。

ぶん殴られて地上に落下するばかりの獄奈としても、負けは認める他なかった。身体が殴られたせいで麻痺していて、ろくに動かさない。しかし口を何とか動かして、宣言は、した。

「負けたよ、刻跳者さん」

その宣言とほぼ同時に、互いの手が、繋がれた。空中で。

おはなし

ねえ、そのあなた、聞いてくれませんか？

どこへ行くのか知りませんが、道行くすがらには休憩も必要ですよ。

かなしい話なんですけど、いかがでしょうか。

え、時間が無い。忙しい。

そうですね。では聞いてもらいます。長くないんで気にしないで
ちよんまげ。

さて、と。

蛍光灯が長い年月を過ごす間にパチパチと点滅を繰り返すということ
は老朽化ですね。

全ては一つの方向に向っているということは、盛者必衰の理を示
すということです。しかし一つの方向に向うことを半ば放棄した種
族というものがいて、それが人間という種です。

生まれた時に四本足、成長してから二本足、老いた時に三本足、
この動物なーんだ、っていう謎謎が通用しなくなつてから、随分と
長い年月が経過しています。でも彼らは老朽化をしていません。文
明というものを築き上げる種である人間は、不老不死と言っても良
いほどの発展を成し遂げて、惑星の表面と、自らが作り出した di
ve という世界で、覇者であり支配者であります。

ああ人間よ。愛すべき人間よ。

全て潰れてしまえばいいのに。

今のは嘘です。人間が潰れたつて、ぷちっ、という小気味良い音
が鳴るだけのことですから。

そういうお前も人間だろつて？

嫌だなあ、私は違います。人間という理を超えて溶ロケタゼりい
状になってしまった私は、人間というものから遠ざかってしまいま

したよ。悪いのはきつと業です。私がかつて人間であつたことが、結果として今、人間でなくなつた私を生み出したのだとは、思いません。惑星と惑星が口付けをしあつた時に、人間としての業を背負いきれなくなつた私のスベテがドロドロになつて溶ロケきりました。それによつて人として享受しなければならぬ業や理スベテから離れた私は、もう生物なのか死骸なのかわかりません。だから、かなしいお話をずつと、いろいろな人に行っているんですけど。まあ、人間の時からかなしい話はしていたんですけどね。業は高まつて、嘘と一緒に私は弾け飛んでしまつています。

ああ、私の話はいいですよね。かなしすぎますから。

今日は面白い日で、素敵な対のお二人と空中散歩をしてから対同士の喧嘩、つまり夫婦喧嘩みたいなものですよねえ、それを見て後に彼と彼女のお話を聞いていたんです。そして私は彼と彼女がどんなかなしい業を持つているのかなあ、つて気になつて覗いてみたりもして、ああ、かなしいなあつて、雲になつて雷落としたい気分になりましたよ。ひたつと雲隠れ。

壁に頭叩きつけてドンドン。散歩しながら隔絶の世界を見下ろして。ドンドン、ポン、雲隠れ。われわれ生きてドドンパン。大砲ぶつ放してハンエイという奴を全部燃やしてしまえ。バカ野郎どものお祭り騒ぎで台無しになつた舞台が、最後まで台無しになつて再起不能になつてしまえばいいんだ！ドンドンドンドン！（ターミネーター）

ええとね、なんだっけな。

何の話をしてたんでしたっけ。忘れた。

ああ、まずはこの世界についてあなたに教えてあげちゃおうかな。刻跳監視委員会に喧嘩を売ることにもなるんですけど、喧嘩は人間同士という同一の立場の者だから発生することであつて、私は溶ロケタゼりい状に過ぎないので、喧嘩売つてもどうせ相手にもされないだろうし…第零深層境界に閉じ込めたと思つて、私がこうして自由気ままに世界を飛び回つてることに気が付いていな

いんですから、当然同じ人間扱いではないということなんですよね。だからああやって第零深層境界の無に吞まれずに済んだということですよ。わかってますかね。あなたわかってますかねこのことがあ！無になつて終わりかと思つたら、私は人間としての業を持っていない、理が人とはまったく違う存在だったが為に大丈夫だったんですよ。それで自由に無を遊泳して、私だけの幸せな場所でした。たくさんの方が無に堕ちて、無に吞まれるのを眺めてきました。美子という方がいて……ああ、これは別の悲しい話ですから、置いて……で、そうだこの世界、この世界はですねえ、おそらく刻跳監視委員会の者の策略で、d i v e からカットされてしまつて孤独の海に d i v e してしまつているんですね。海じゃないよ湖だよ。琵琶湖。じゃなくて何だろう別に名前は無いか世界には。琵琶湖。ええと、湖です。つまり孤独ということ。独立ということ。切り離されたのは都合が悪いから。というのもこの世界に d i v e がまだ繋がっている時、この世界のある頭の良い方がね、発明しそうになつたんですね d i v e よりすごい電子空間、o c e a n を。o c e a n はですねえ、今までの d i v e では五つまでしか作れないとされている深層境界を、いくつでも作ることが出来る、より深い電子空間提供の場になる予定でした。それがねえ、開発されそうになつちゃつて、この世界のお偉い金持ちたちは大喜びでウツホーつつつて猿みたいにはしゃぎ回つてから屁をこいたんですね。なんでかつつつと、各世界を繋げる、各世界つてのはいわゆるパラレルワールドつて奴で、いくつにも分岐している世界の中で文明が発達している世界だけを繋ぐことによつて、繁栄をさらに繁栄させてしまおうという、とても都合のよろしい機能が d i v e なんですけど、o c e a n つてのはいわゆるその次世代機みたいな感じで、で、その電子空間の様々な権利というが実権みたいなのを握ることが出来るのはその電子空間を開発した世界なんですよね。よつて次世代機を作るのに成功した過去のあなた方の世界ではそれがニュースになつて皆喜びましたよ、やつたね、つつて。d i v e を作つた世界の

連中ばかりが良い思いを今までしてきたけど、今度は俺ら私ら僕らワシらの番じゃあ、つってはいやいで屁をこいたってわけです。

でも、断絶されて孤独になってひとり湖の中。oceanは無かったことにされて、海の藻屑、みたいな？ かなしい現実って奴が、dive側の管理者、つまり刻跳監視委員会の手によってこの世界に訪れてしまったんですねえ……。

oceanが発表されて電子空間での実権を握られては、今まで数多くの甘ったるい蜜を啜ってチューチュー電車な連中はもう甘い蜜を啜れなくなってしまう。甘い蜜を啜ってた連中とはすなわち誰かと言えば、diveを造って各パラレル世界をはじめに繋いでみせた連中ですよ。まあ、その世界の人々からすれば、俺ら僕らあつしらが最初に発明した電子空間によってパラレルワールド同士で発展し合えるようになって、もう人間様は最強だぜウへへって感じの空気を造りだしたっていうのに、何oceanとか造って世界の实権を奪い取ろうとしている訳つつってヘドロをぶちかましてやりたい気分になったわけです。で、その気分が高まって、刻跳監視委員会が動いたんです。

diveからその世界を強制的に排除。その世界からのdiveへのアクセスを完全に拒否。そのことは刻跳監視委員会の一部の者にだけ知らされ、多くの人々には向こう側の世界から無理矢理に接続が拒否されたという風に伝えられました。悪評が多い刻跳監視委員会ですから、それが起こった時、多くの人々がそれを怪しく思いました。しかし怪しく思い以上に進展しなかったのは、刻跳監視委員会がdive内での実権のほとんどを握っているためでした。火消しは素早く、その件については、悪評は広がらないようにと、diveの検索にさえ引つかからないようにされました。

で、第零深層境界を利用したわけです。

oceanが完全に完成してしまって、向こう側から各世界にアクセスが生じてしまったら問題でしょ？ 刻跳監視委員会の悪行が、ハッキリと表沙汰になってしまいうでしょ？ だから、第零深層境界で

その世界を閉じ込めたんですね。無で、その世界の周囲を取り囲むことによつて、その世界が電子空間を利用することを不可能にしてやったわけなんですなえ。

第零深層境界つて、実はそういうことのために造られたんですね。零化した刻跳者を閉じ込めるためなんて嘘。刻跳監視委員会に敵対する者を閉じ込めたり、世界を無で取り囲むことによつて孤立させたりだとかつていう、まあ、つまりdiveで実権を握っている連中が己の権力をより確かなものにするために開発された空間なんですよ。

で、その閉じ込められた世界つてのが、この世界。あなたはそのことを知らないみたいですけど、どうしてですかねえ。時間軸がずれてしまっているから、電子空間を共有していた頃の知識が失われたほどに時が経過してしまつたということなんですかねえ。私としてはoceanに陽の目を浴びさせたかつた所なんですけど、こう旧世代の建築物ばかりが建ち並んでいるのを見ると、oceanを期待することは出来ないなあ……。せつかく第零深層境界を越えてやってきてみたのに、これじゃ駄目だなあ〜つてかなしく感じの私ですよ。ええ、そうなんですよ、無を超えてしまつていうトンデモなことも人の理を超えた私には可能なですよ。人にとつて無であつても、溶口ケタぜりい状の私には無じゃないんですね。ちゃんと、道が見えるから、この孤立した世界に訪れることもできるんですよえ。……え、その電子空間の中にあるこの世界の間人はどうしたのやつて？そりゃ、そういう人たちは第零深層境界に放り込まれて無にされてしまいましたよ…ひっそりとね……その人たちは実に不幸です……私は邪悪をそこに見ましたよ。権力の集中によるエゴイズム。つて奴ですよ、わかつてください、ぼぼんぼん。どどんどん。

ちよつと休憩挟みましょうか。

次に話したいことはなえ。それは、彼と彼女のことにしましょうかね。同じ顔をしている男女二人はその刻跳監視委員会の現飼犬

と、元飼いだの二人なんですけど、まあ、そういう刻跳監視委員会
のしてきた悪行を現飼いだの方は知らないんですよねえ。AAA級
刻跳者にならないと、組織の様々な裏つてのは教えられませんから
ね。ああ、私って何でも知ってて偉い偉いよお。褒めてよ。ま、い
いやそんなことはどうでも、どどんどんどん。 (ターミネーター)
まずは獄奈さんのことについて話そうかな。獄奈つてのは、血が
大好きな恐い人、吸血鬼よりも性質が悪そうな悪女です。では、休
憩の後、そこからお話ししましょうね。

おはなしおはなし

はい、休憩終わり。残念でしたーるる、るるる、るるるるるる（徹子の部屋）。

意味がわかりませんね。ボツ。とか言いつつまたやっちゃうんだよねえ、るるる、るるる、るるるるるる、という癖のある感じつつうのは好まれるのか嫌われるのか、ってこれじゃ雑談ですね、どうでもいいわこれ、ハハツツ。

そうそう悪女。悪女じゃねえよ獄奈だよ、いやいいんだった。その話をちよいとつつ、TAGSIGNの話にも飛んでいって、まあびよんびよん話を飛び火させていこうと思っておりやすう。さっき二人の過去は覗き見ちゃってるし、私はいろいろと知っているの、話は面白い方向にどんどん飛躍して行ってあなたの退屈も紛れるし、閉じられた世界に住まわせられているという理不尽も忘れることが出来ましょう。ああああ、私が言わなきゃ気が付かないままだったのかなあ、だとしたら私には業が、業業がごうごうと焚かれているのでしょうかああ、つって、暴れても仕方あるまいつつて。業は私には貯まりません。人間じゃありませんから。ぜりい状。

で、獄奈さんは元AAA刻跳者。

彼女には兄と妹がいます、三人で切磋琢磨つつう感じで腕をガングン上げちゃってね、どんどん刻跳監視委員会内での立場をね、強くしていったというわけです。第三深層境界にはすごい宝物があるって噂は聞いていたんで、三人はそれを求めて頑張っていたというわけです。後に語るつもりの方TAGSIGNさんも、同じ感じ、今、第三深層境界を目指しておりますよ。彼と彼女らでは求めるモノは違うんですけどね。

獄奈さんら兄妹が第三深層境界に降りた時、そこで見たのは何だ

つたと思います？

宝物とか以前に、そこにあつたのはね、深い奥底に沈み込ませたおかげで熟成した、業のカタマリという奴ですよやっぱり。るーる。だつて刻跳監視委員会というのは弱肉強食の強い部分を象徴するかのような連中でしょ？それが秘密にしたがる弱い者たちを虐げた記録というものが、そこに埋められているということでしょ？

そんなの宝物じゃないでしょ？臭いのきついヘドロでしょ。

彼女らはね、それを見て思ったのだそうだよ。あ、こいつらと一緒にやってたら、いつかはどうにかなってしまう。利益を奪われてきた人々の復讐で、この刻跳監視委員会は確実に終わる。容赦ないやり口で、やがて集結するだろう反感の刃に切り刻まれて血を噴き出すだろうつつつてね。三人はそうはなりたくないな、という意見でまとまって、じゃあありがたい利益だけ受け取って組織とは縁を切っちゃおう、という算段になつたらしいんですね。で、宝物を三人で共有した。キラキラ輝く泉の水を掬い取って、飲み干したのだそうです。それで得たのが永遠の命。どんなにd i v e内で殺されても意識が損傷することはないという特権を得たわけです。それも刻跳監視委員会が密かに独占していた代物というわけで、多くの人々に提供されては刻跳監視委員会の立場が危うくなるかもしれない危険物と認識されたから、第三深層境界に隠されていたというわけです。

不死になつた三人は、まあ得られるものは全部得てから組織から抜けようという企みの元、そこにて隠されている、普通のd i v eでは得られない情報も閲覧したわけですが、それは彼女らにとつては手痛い失敗でした。後悔となる情報が、そこに隠されていたのですが、どういう情報だつたと思いますか、気になるでしょ、かなしいんだけどそれは事実だつたんですよ、だから彼女らは失望してしまつたんですねえ、後悔するんですねえ、嫌だなあ、と思つたんですねえ。

何が嫌だつたのか。彼女らは、データだつたんです。それが嫌だ

つたんですねえ。

データ。情報。造られしモノ。人が造りし意識体。女性より肉体を持たされて生まれ落ちたのではなくて、0と1の組み合わせによって形を形成された人工知能だったわけなんです。今まで彼女らは自分が真つ当な人間で、現実の頃の記憶を刻跳者になったから忘れてしまったと思ひ込んでいましたが、まあかなしいことに、初めッから現実の頃、なんて彼女らには無かつたんですよ。刻跳者という役職についているものは、はじめから、生まれつき、飼犬、ということなんですよ。

刻跳監視委員会という組織の利益のために働き、その組織の発展を邪魔する者たちを排除する。そのためにだけ造られた、何から何まで全て0と1で造られた、肉体を持たず生まれたモノ。それが、刻跳者、なんです。ねえ。

刻跳監視委員会の歴史の中で、AAA刻跳者が三人同時に組織から姿を隠すなどということはありませんでした。前代未聞。それまでのAAA刻跳者は多くの真実を知っても組織に背くことなどなく、むしろより熱心に、それこそ自分が造られたモノだと納得して機械人形のように働いてくれたのに、彼女ら三人は違った。なぜ彼女たちだけは反抗の意志を固めたのか。

それはやはり、人数、が一番要因として大きかつたでしょう。彼女らは三人。しかも実力のあるものとして三人ですから、心細くないんです。ね。やつたるよ、みたいな流れになる訳です。一人でそういう情報を見ていたら、心細さから組織に背く勇氣なんて湧かないでしょ？少なくともそれまでの刻跳者たちは、そうだったんです。三人が同時にAAA刻跳者になった。これが一番大きな、反抗の理由だったと言えましょう。

勿論、それはそもそもが刻跳監視委員会の思惑だったんですけどね。

彼らは試したかつたんですよ。

自分たちの造り出したモノが、どういう程度で自分たちを裏切る

決意をするのか、ということをおお体でいいから計りたかつた。シュミレーションは何回もしていたのですが、権力に溺れる彼らには確実な保障というものが必要だったので、三体の刻跳者に『兄妹』という設定をつけて、さらには常に三人一緒に行動させて、AAA刻跳者にすぐになれるように才能にも溢れさせ、彼女らが隠された情報を見た時にどういう反応をするか実験してみたいですねえ。

シュミレーションでは裏切るという結果が出ていましたが。実際にも、裏切りました。丁度そこが線引きらしいんですね。二人だったら間違いなく裏切らないが、三人になると急に裏切るようになる、という。

刻跳監視委員会は、当然三人が裏切る決意をした時にも、三人を監視していました。

で、もう実験は終わって、しかも三人が自らを裏切るとわかった組織からすれば、当然彼女ら三人はただ邪魔なだけでしょう？用済みって奴ですよ。

そういうことで、まあ、その時に彼女ら三人の目の前に現れたのが、ジョーシ、という方です。

私が最近見たジョーシとは、姿形が違いますけどね、意識は間違いないくジョーシというその意識のものでした。彼は昔から組織の中で暗躍していたんですね。ジョーシは言いました。

「お勤め、ご苦労様。悪いね」

彼は悪行の片棒を担いでいるとも言えるのに、実に飄々としていて、一つの信念に基づいて行動する者の潔さ、みたいな雰囲気も携えています。昔から余裕ぶつた性格なんでしょうね。で、仮にもAAA刻跳者の實力を持っている三人を、呆気なく、ぶちのめした訳です。片腕だけで。

自らを造った支配者に対しては實力を發揮できないようにプロダラミングされてるんですね、刻跳者というのは。故に、まあ實力差がそこまであるという訳では無いのかもしれませんが、正に手も足も出ない状態だったわけですよ。ぼっこぼこ、ふるぼっこぼこ、

かわいそうつつう感じのみずばらしさで、彼女らはズタボロの雑巾……。第零深層境界に投棄されることに……なるはずだったんですけど、まあ、無に閉じ込められていなかった。起きたら三人揃って見知らぬ土地に捨てられていたんですねえ、ご丁寧なことに大きなダンボール箱の中に入れて、『拾ってあげてください、哀れな子犬ちゃんです』とかイタズラで書き込まれていた。屈辱の中、三人は日の出を見た。

絶望に塗れて、組織から離れたことよって目的を失くし、呆然とした眼で三人は生きている意味は無い、死んでしまっても良いという意見で同一しました。

それは、刻跳者独特の早計、ですよ。組織に造られた飼い犬であるからこそ、組織から捨てられた途端に生きる気力を失くしてしまっ。

でもね、面白い事に彼らは死なない。つまり、死ねない。意識体が損傷する可能性が0%になる禁断の泉に口をつけてしまったからかなしいですよ。造られし不死身の刻跳者！でも死ねないのだから仕方が無い。死が選択肢として選べないなら残るは生のみ。生きるか死ぬか。生き死にが基本という世界の理は、これはなかなか変わりませんよねえ……。で、生きる彼ら兄妹は、それぞれ生きる中で目的を見つけ出しました。

瓦尋は戦に生を見出し、獄奈は血に生を見出し、牢砂は死に生を見出したのですよ、のっぽ。

ああ、ああ記憶を覗き込んで見る彼女らの眼は生に溢れて飼い犬だった時とはまるで違いますから自分たちだけの組織を作り、いつか刻跳監視委員会に一矢を報いてやろうとその生をずっと磨き続けてきたんですよ。で、ほら最近、刻跳者が零化してしまうという事例が突如にして増加したでしょ？これは何十年間に一度あるか無いかのチャンスだよ、って話になって、三人は蓄えてきた生を萌芽させようとして、計画を練り、実行に移してはしゃぎまわった。ま、それで今の所は計画通りってわけです。面白いことには私を利

用したんですよね、彼女らは。私、対を好んじゃいますから、同じ姿をした男女ってかなしそうだな、って思ってた近づくちゃって、で、こうして獄奈とTAGSIGNを連れ出して空中散歩したりなんなり、ってやってるんですけど、それが三人の計画通りなんですよ。ほら、私を味方につければ第零深層境界に落とされても、無に吞まれる前なら私が導いてあげることが出来ますし。まあ、私も刻跳監視委員会っていう邪悪は嫌いなわけですから、当然三人の味方をしとあげたくなっちゃう気持ちになっちゃうでしょ？で、獄奈さんはどうやって私を呼び寄せようかなあ、って、かつて第三深層境界で見た『M o u t h p u t t i n g o f t h e e a r t h 』事件を起こしたそのものは対を好む』っていう情報を頼りにして作戦を立てたらしいんですよ。で、作戦は決まった。A級刻跳者TAGSIGN、という存在を見つけた瞬間から、その作戦は誕生したんですよ。これだ、つって三人とも顔を見合わせたらいいですね。

だってTAGSIGNさんは獄奈と同じ姿形を刻跳監視委員会から与えられてる飼犬でしたからね。しかも性別が違うってのは対にふさわしい。これはもうこの作戦で行くしかない、つって、まずはTAGSIGNを捕らえようって話から始まったんですよ。そういうわけで瓦尋はTAGSIGNを襲撃したんですね。作戦をミスした時の保険として、単純に『敵』だとTAGSIGNに思わせるよう配慮しながら、戦闘したわけです。保険を掛けておいて正解でしたよね。逃げられちゃいましたから。

獄奈がTAGSIGNに似せたんじゃないやなくて、TAGSIGNが獄奈のデータを受け継いだ刻跳者だったから、容姿が同じだったということなんですよ。あのジョーシは白々しいですねえ。まるで何も知らない風を装いながら、彼は全部知ってるんですからねえ。ああ、メラメラしてきた。

TAGSIGNという刻跳者は、獄奈の戦闘データ（完璧に引き出すことはできないようですけど）と容姿を引き継いだ、私を呼び寄せるための餌、だったんです、ね。ああかなしいね。他者が他者

を利用する。目的の元に。かなしいのかなあ、それともかなしいのかなあ、わかりませんけど。

TAGSIGNは思い出が目的ですけど、彼はこれから死に呼び寄せられるでしょうから大変かもしれませんね、だって思い出なんて彼にはあるはずが無いんですもの、そもそも。TAGSIGN以前の彼、なんて彼には無い。断言できるんですよ、これは。彼はTAGSIGN。そのコードネームこそが彼。彼はTAGSIGN。それはそれで良いのかもしれませんが、自分が人間だと思つたのに人間じゃないつてわかつた時の衝撃的なTAGSIGNの表情は、死が差し迫つてかなしそうでしたよ。獄奈にね、今教えてもらったんですよ彼は。自分が刻跳監視委員会に利用されるデータとして造られた獄奈の模造品だつてことを。まあ模造品つてのは言い方が悪いですけどね、だいぶ。ぶぶ。だいぶ。

あーあ。これからどうなるんでしょうねえ世界は。まあそもそもデータから作られたから機械で、女性から生まれ落ちたから人間、つても定義があやふやですよー。私としては意識体になった時点でみんな人間じゃない、つてことでも良いんですけどね、つてのは私は溶口ケタぜりい状だから好き勝手言えるんですけど。私は人を愛しているから、消えてもらつても構わないんですけどねー。

権力の権化どもに痛い目を遭わせるために、oceanを世界の陽の目に出すよう尽力しよつかなー、とも私は思つてたんですけど、なんつつかこの世界にはもう既にoceanが失われている気配がありますし、ていうか、なんか違和感あるんですよ。あれ、おかしいんですよー、なんかずっと。分かつて当然なことを見過ごしてるような。あるいは、見過ごされているような。

ま、いいか。

とりあえずこれから私は対を引き連れて、第零深層境界を通過してdiveに戻ろうと思うんです。つて、あれ、ここは現実世界ですよ、あれocean?気のせいかな。何かやつぱりおかしいです、違和感があります。まあいいや、これから私たちがすること

は刻跳監視委員会が零化騒動で混乱している今、彼らに痛い目を遭わせてヒイヒイ言わせることつす。あーゆーれでいー。いえあー。

私は獄奈を覗き見たから三人の計画もわかるんですけど、あれならいけますね。私もいることですし。TAGSIGNがちよつと心配ですけど、まあ彼も一応A級でそれなりだし、なんとかなるでしょうつって楽観的。いえあー！

その後のこと？

別に特別変わったことは起きませんよ。刻跳監視委員会に痛い目を遭わせるつつつても、おそらく潰すことまでは出来ないし。そうですね、せいぜい刻跳監視委員会の目から逃れるために、この世界に亡命させてもらうことにしましょうかね。できるかな。できるよね？できますよ。

というわけで、HEY！

バイビー

またね。

花や樹や

「私たちの作戦は、第三段階に入った。ここまでは全て、思惑通り、計画通り……」

「だから、次は、第三深層境界への侵入をするのか……」

「その通り、TAGSIGN。私達の計画のことは全て、頭に入ってくれたみたいじゃない」

「ああ……」

「それに自分の入っている組織に対する考え方も変わったみたいだ」
「ああ」

獄奈が何か含んだような言い方をしても、TAGSIGNの反応はどこか曖昧で、ぼやけている。だが刻跳監視委員会に敵対する意思を持ったのは間違いないということは、TAGSIGNが第二深層境界に戻ってきてても獄奈の前から姿を消さないことから見て取れる。

「だが組織に対する考え方は確かに変わったが、僕はお前たちを信じきってるわけじゃない。だから僕は第三深層境界に入って、自分のその眼で、獄奈が言ったことが本当かどうか、確かめる」

A級の實力しかない癖に一人前みたいな口を聞く奴だな、と獄奈は少しうんざりする。

「ついてこれるならね。せいぜい、足手まといにならないようにしてね」

向こうが實力を落としてくれたおかげとはいえ、先程第零深層境界の向こう側の世界で勝った相手に完璧に見下されるといのは、TAGSIGNのプライドにヒビを入れるには十分だ。

TAGSIGNは心の中で密かに、第三深層境界で『例のブツ』を見つけた時には、自分もその恩恵を授かって獄奈と戦い、負けさせてやる、と誓う。例のブツは、今回の作戦の鍵となる代物。第三

深層境界に侵入しそれを得ることができれば、計画はほぼ成功と言
って違いない。

「にしても随分と外れた場所に出てしまったな。第三深層境界に降
りるには、ここからじゃ少し遠い」

「TAGSIGNにはここが何処だかわかる？」

「ああ、さつき向こうの世界で獄奈から聞いた通り、ベルサクネか
ら東に位置する廃墟に向わなければならないのだとしたら、ここか
らじゃその場所は随分遠いよ」

「……。刻跳監視委員会の飼犬だと、こうやって質の良いdiv
e内地図が与えられるんだったねえ、そういえば。これがあれば自
分の位置とか目標の場所とか、一般人も知らないルートも含めて表
示されてくれるんだから良いよねえ。オペレーターのサポートがあ
るおかげなんだから、感謝って奴だ」

「そりゃ、オペレーターがいるといたないとじゃ、普段の作戦成功率
には違いがあるけど。そうだね、たしかに感謝だね。僕は感謝して
るよ、オペレーターに。何時だって。そう見えない？」

「別に。適当に言っただけ。……そうだ、そろそろ時間」

「何が」

「そのもの……ああ、呼びづらい。お前、何て呼べばいい？」

獄奈は上空に顔を上げてから、声は張り上げる。白いワンピース
を着ているそのものは、プカプカと風船のように地上から十メート
ルくらい高い位置で浮かんでいるので、声を張り上げる他無かった
のだ。

そうだなあ。悩むなあ。

そのものの白いワンピースは、雲が自由自在に形を変えるそれの
ようにひらひら。TAGSIGNはそのものが浮かんでいるのを見
上げながら、そのものを少女そのものだと錯覚して眺めるが、ふと
それがゲル状の謎めいた物であることを思い出して、ハツとした。

決めた。私の名前は、SERA。

SERA。わざわざ指で宙にその綴りまで書いてみせて、そのも

のは自らをSEREAと呼んでくれ、と言った。何だろう、何か嫌らしいというか、含んだようなその名前に、TAGSIGNはSERIのことを思い出された。そして、思い出すという行為をしてしまっただけで、自分がデータに過ぎない存在なのに人間としての記憶を取り戻そうと躍起になっていた過去も思い出してしまつてワナワナとしてくる。道化。造られた道化がTAGSIGN。オペレーターであるSERIは知っていたのだろうか、自分のことを影では嘲笑つて見下しているのだろうか、という想像も沸き、ワナワナという感覚は想像が深まれば深まる程にTAGSIGNを抉り、掻き出し、SEREAとフザケタような名前で呼んでくれと言い出したそのものに、怒りが湧いた。だからTAGSIGNは白いワンピースを見上げるのは止めて、辺りの景色に視線をやることにした。気を紛らわすのはとても大切だということは、知っていた。だが耳を塞がないから、獄奈とSEREAの会話は聞こえてくる。

作戦の打ち合わせ、らしい。

「タイミングが重要なのは、わかつてるよね？」

無に吞まれるその直前に、救い上げれば良いのでしょ？

「そう。なるべく遅くすることが肝要。刻跳監視委員会は瓦尋と牢砂が無に吞まれきるまで監視を続けるんだからさ。で、その後はSEREAと二人は指定の位置で待機」

その指定の位置は、まだ私には教えてくれないんだね。

「私達は仲の良い子猫ちゃんってわけじゃないから当然だと思っただけだね」

あなたたちは捨て犬だったっけねそういえば！

「クスクス笑えるようなこと言うよね、あなたは、さ」

私は裏切るとかそういうことをしないのに、扱いが悪いんじゃないかなあ。だから。

「気まぐれなゲル状が裏切らないってわけ？」

クスクスと獄奈が笑う。SEREAはそれを上から眺め下ろしているが、ふわふわとはためかして降りてくると、

「溶口ケタぜりい状って言うてよ」

とぶすつと頬を膨らませて言うのだった。獄奈はクスクスと笑うのを止めてつまらなそうな表情になり、

「……じゃあそういうことで」

と面倒そうな様子を作るのだから、おそらくこれで獄奈とSER Aの打ち合わせは終わりなんだろうな、とずつと横で聞いていたTAGSIGNは思った。

今は夕方。もうすぐ陽が落ちる時刻。第零深層境界を通ったことのせいも、向こう側の世界で時を過ごしたせいかわからないが、時の経過の感覚に違和感がある。まあ刻跳者のTAGSIGNとしては慣れた違和感でもあった。世界を飛び越える時に生じる、誤差だ。

この街は第二深層境界でも外れの位置にある街、『サルツサ』。

森林や草木花の多い、緑化活動が盛んな街という情報が地図に記載されているが、夕方のこの時刻、たしかにそこら中に夕陽に朱に染められた樹、草むら、花畑、それらが所狭しと咲き誇り、風に揺れている。如雨露を持って花畑に水を上げている男性は、エプロンを身に纏って口笛を吹いている。平和なことだ。和むことでもあるだろう。でもここにある草木花は所詮データ。

看板が立てかけられている。柔らかな書体で書かれている文字列。『緑は人の心を和ませ、安らかなものへと導きます。種を育てて花を開かせる時、あなたの心もまた花開きます』

データの花を咲かして枯らして、緑化活動が盛んなこの街は、緑化を進めていってそれで生命を溢れさせるつもりなのかどうか、ただ戯れているだけなのか、と考える必要も無いくらいにただただ朱い夕焼けの街サルツサで、TAGSIGNも朱に染まっている。

（嫌な感じだな……）

気持ちが暗くなる。TAGSIGNは燃え盛るような朱の世界で、滅びの匂いを鼻で嗅いだ。いや、嗅いだのとも違つかもしれない。ただ間違いない何か世界の裂け目から覗いてきたような、その匂いが沸いてきているのはわかる。この気持ちを忘れない、気を紛らわ

したいと思った。

だから、そのために作戦に神経を集中させようとは思っただが、TAGSIGNにはあまり役割りが無いのもまた事実で、ただ獄奈と対であるから必要とされているだけだ。暗くなる。

ふと気が付くと、如雨露で水をやっていたあの男性が全身から血を流しながらこつちを見ている。いや、それは錯覚だ。エプロン姿の花を愛でている男性は、TAGSIGNがまばたきをした時には如雨露で水をやることを再開している。朱の中の血。暗い気持ちがそういう錯覚を引き起こしてくるのだろうか、と陰鬱になる。

「さつさと片付けよう。片付けて、こんな世界……………」

独り言のように呻いたTAGSIGNの言葉は、獄奈とSEREAにも聞こえた。

獄奈とSEREAは思わず顔を見合わせてから、SEREAはTAGSIGNのことを見て、獄奈はTAGSIGNの眺めている景色を追った。

しばらくの間無言が続いたが、獄奈はその場から立ち上がる。作戦の時間だ。

獄奈は慰めの言葉を掛ける気にならなかったのは、自分の昔の哀れな状態を思い出させられて気持ちが悪くないから。彼女は花に水をあげている男性を見て、いい気なものだな、と言ってからTAGSIGNの肩をトントンと叩いた。

そして振り向いたTAGSIGNに彼女は、

「せいぜいミスだけはするな」

と冷たく言った。それを受けて彼は、

「データが単純なミスをするわけじゃないでしょう。僕はこれでもA級刻跳者なんですよ」

と返して、また花畑に目をやるのだった。

もう作戦開始の時間だ、と獄奈が二回言ってからようやく彼は立ち上がって、そして小さな吐息をついてから、もうそんな時間か、と心そこにあらずの雰囲気と言った。

青い花柄エプロン姿の男性は、如雨露で水をあげている。
夕焼けが沈んで、街が暗い色に染められるまで。

オペレーターとして

聞いてしまった。

第二・五深層境界でオペレーターをすることが仕事である女性が一人。SERIE。彼女は刻跳者から来た地図の要請に応えた後に、奇妙な通話、その回線をキャッチした。

通話をしている声は男性のモノ二つ。どちらの音声も加工しているので、音声によってこの声の持ち主を特定することは難しそうだったが、普段からオペレーターとして情報の取得をしている癖から、音声の男性二人の特定を試みてるが、堅い妨害が発生して人物を特定するどころか、調査させてもらうこと自体が出来ない。録音すらもできないので、SERIEは聞こえて来る音声、その会話に耳を傾ける。

はじめはノイズが多く聞き取り辛かったのだが、時間が経つに連れて、通常の通話と同じくらいに聞き取りやすくなった。

『…それで、あれがしゃしゃり出て来た』

『私も情報は収集していたんですがね。だが彼女、口が堅くて。碌に情報は取得できませんでしたが、こういうことだったんですね』

『一本取られたよ。TAGSIGNくんが獄奈と同一の姿形を使用していることを利用されるとはね』

『ええ。それにしても一体どの誰がそんな仕様にしてしまったのか…。あのものが対を好むということを知っているものがしたのか。知らないものか……』

『刻跳監視委員会も一枚岩ではないし、あのものが対を好むという情報を知らない者の方が組織には多い。今回のことを見越した狙いで、TAGSIGNくんをあの容姿に設定したとは考えにくいな。おそらく、願掛けだったのだろう。獄奈のような刻跳者になってほしい』

『裏切り者になってほしいと願掛けした、というよりは、彼女の戦闘スタイルの美しさをもう一度見たいと思った者。そのの仕業、でしようかね』

『まあ、過ぎたことだな。どうにしろ、あのものとTAGSIGNは三匹の手に渡ったと見ていい。我々の本質を、悪行を、ばらしてくれたらうな。ご親切なことに』

『ただのA級刻跳者はともかく。対を好むあのものが無から抜け出ていて、しかも我々に敵対する立場につかれるのは厄介ですね。Mouth putting of the earthは、恐ろしいですからねえ……』

『まあ、あのものも、あの事件以来、完全に人間じゃなくなったかな。問題は無い。あのゲル状が力を持っていたのは人としての業を抱えていた時までのことだ。あれに出来る事は、いまや第零深層境界の無効化、それと他者を覗き見ることに。その程度だろうな』

『…裏切りの捨て犬たちと、業を捨てたゲル。その足は次に何処へと向かい、どう牙を振おうとするのでしょうかねえ』

『それについては大体見当がついている』

『さすがですねえ。どこでしょう』

『第三深層境界だ』

『ふむ……人が容易に触れてはならぬ禁断の道具ばかりが納められた、あの場所ですか……なるほど、一度そこに足を踏み入れた彼女らなら、あそこにある道具を求めたくはなるでしょうね。やはり刻跳監視委員会を壊すつもりですかね……』

『さあ、捨て犬たちがそこまで自分に自信を持っているかは怪しいところだが。勿論、刻跳監視委員会が零化で慌しい昨今、この時期を利用して我々の混乱をより深めようとはしているのだろう。しかしやり方が安直すぎるな。捨て犬たちは、組織というものを舐めすぎている。その上役という奴をバカにしすぎているのさ。だから見られていることに気がつけない』

『どうやらそういつことのようにですねえ。第三深層境界に向つと分

かれば、こちらからいくらでも捨て犬たちに対して、対処のしようはあります。無が通用しない不死者というのは、たしかに処理が面倒ですが、強敵というわけではありませんからねえ……」

『そうだ。どうやら不死者たちには特別の監獄を用意してやる必要があるらしい。あのもの、にもな』

『新たな裏切りの輩、A級刻跳者はどうするんですか？ また捨て犬にしてあげることになるんですかねえ』

『捨て犬にするという対処がそもそも甘いからな。昔、捨て犬にさえすれば居場所を見つけれない三匹は勝手にたれ死んでくれるか、牙を自ら引き抜いてゴミとして生きるか、プログラミングからそういうことになる手はずだったが、どうにも捨て犬どもは牙を抜いておとなしくするという自制も出来ないらしいからな。となれば捨て犬にはしないだろう』

『やはり無。あるいは、殺すといった所が妥当ですか？』

『そうだな。TAGSIGNくんは別に不死身でもないのだから、何回か殺せば確実に死んでくれる。無に落とすのが手っ取り早いのが対を好むものが厄介だから、殺すことになるだろう。飼い犬に手の平を返されて、そのまま、という訳にはな。彼はもう我々の味方には戻ってくれまい。記憶を操作するという手も無いでは無いが、実際にあった出来事の記憶を捻じ曲げるといふのは、ありもしない記憶を植えつけることよりも難儀だからな。不安材料にしかならない。彼は殺すよ』

『では、部下たちを第三深層境界に向わせましょう。幸いにして、捨て犬たちは私や私の部下をまだ味方だと認識してくれるはずですから、油断を誘えますし……』

『いや、お前は動かなくてもいい。私が動けば、それで十分だ』

『いいんですか？ ……いや、私のようなものが差し出がましいことを言いますが、あなたがお動きになる必要はありませんよ、……ジヨーシさん』

『いいんだ。捨て犬たちには刻跳監視委員会のもので相手をするの

が一番手っ取りはやい。刻跳者は私には手も足も出せないようになってる。TAGSIGNを殺すことも、捨て犬どもを捕まえることも私なら容易だ』

『では、ゲル状のあのものを捕える仕事は私たちにやらせていただいても…。何も仕事をしないなんて、そんな恐ろしいこと、申し訳ないこと、私にはできませんので……』

『相変わらず、変わった人だな。なら、そういう手はずでいこう。で、細かい打ち合わせだけど……』

聞いてしまった。

ヘッドホン越しに、完全にその会話を聞いてしまった。細かい打ち合わせの部分まで、ハッキリと耳に入ってきてしまった。SERIはほとんどを理解した。ジョーシが普段使っている席は、今は空いている。先日の仕事が終わってからジョーシはオペレーター室に姿を現していない。彼が業務時間にはいないなど、珍しいことだ…。そのジョーシと思わしき人が、今、通話の中で語っていたことがドツキリとかでないならば。TAGSIGNが裏切った？なんでMouth putting of the earth事件が関係している？刻跳監視委員会の悪行って？ジョーシもそういう悪行をする側の人だった？そして何より……。

彼は、TAGSIGNを殺すつもり。

SERIは隣のオペレーター、HARRYにこのことを相談しようかとも思ったが、何だろう、胸奥でそれは止めておけ、誰にも言うな、今は誰のことも信じるな、とでもいう感覚が迫ってきた。だから控える。おそらくジョーシという今まで信頼していた人物に裏切られたショックが、軽い人間不信感を引き起こしているのだった。SERIは喉がいがいがする感覚に襲われながら、どうしよう、と思考を巡らせる。隣でHARRYの声音が、少し興奮しているのがわかる。刻跳者の誰かが零化したのかもしれない。ここ最近、毎日、一人ずつ、刻跳者が零化している。ペースが日を過ぎるに連れて激しくなっているのは間違いない。

S E R R IはH A R R Yの強張った真剣な顔つきの、その忙しなく動いている口元が何か、ずっと見ていたら怖くなってきた。背筋の下の方からせり上がってきたのは恐怖。彼女は慌しい様子を隠すこともできずに椅子から立ち上がり、その部屋から出てT A G S I G Nの元に向わなければ、と気持ちばかりが急ぐが、そうだと連絡すればいいんじゃない、と先程向こう側からはアクセスを拒否されたことも忘れて閃くが、椅子に座った所で先程拒否されたことを思い出す。地図を向こう側から請求してくるにも関わらず、こちらからのアクセスは拒否されていたのだ。

試しにもう一度アクセスしてみるが、やはり拒否されている。

もつとも、今のS E R R Iは頭が混乱しているし喉がつかえる感じもするし恐怖に支配されてもいるから、回線が繋がってもまともに会話ができたものでは無かつたろう。

回線の拒否時に起きる、ツィ、という無機質な音が、何故か、さらにS E R R Iの恐怖を煽る。

(直接…直接、T A G S I G Nに教える…あ、いや、データとして送れば…だめだ…危険すぎる……どうしよう……T A G S I G Nの位置は、さっき地図を送った時にある程度わかっているけど、場所を特定できてるわけじゃないし……何よりT A G S I G Nは動いてるはずだし……さっきの地図に追跡……そんなのないか……どうしよう……そうだ、第三深層境界ってジョーシが言ってた…第三深層境界への進入方法を今から解析して、その場所に先回りすればT A G S I G Nを見つつけられる……ジョーシが命を狙ってるって教えられる……問題は第三深層境界の進入方法なんてハッキングしたことかバレたら、オペレーターやめさせられちゃう…いや、それじゃすまないか……ていうかそんなハッキングの腕を私が持つてるはずがない!……無理、……いや、そっか……さっき頼まれた地図……そうだよ、私、T A G S I G Nが行きたい場所を地図として送ったんじゃない!……そこがきつと、第三深層境界への入り口……ええと、頼まれた場所は……ここだ……ベルサクネからは近い……さっきT A G S I G

Nのいた街はサルツサ…うん、私の方が目的地に近い！…これなら、TAGSIGNに教えられる…助けられる…！）

SERIEの心は高揚した。

目指す場所は、ホラー好きな連中が作ったという廃墟、『ナー』。ナーはベルサクネからは東の位置にある。ベルサクネから直接、施設を使えばワープが可能な場所のはずだった。サルツサからは他の街から経由していかないと、ワープは出来ないはず。となれば、やはり先回りは可能だ。ただ時間は無い。ジョーシとよくわからない男との会話を聞いている内に、もうTAGSIGNは目的地へと足を近づけているのかもしれないから。

SERIEはこうしてはいられない、と思って立ち上がり、誰に言うわけでもなく大声で、「すみません、早退します！」と叫びながらオペレーター室を出て行くとした。現在は丁度、様々な刻跳者たちが活動を活発化させている時間、つまりオペレーターの需要も高まっている時間だ。そんな時間に早退されては他のオペレーターたちに皺寄せが来ることになる。

ジョーシがいないせいで機嫌が良くない三人娘が、叫んだ。

「ちよつとSERIE！ あんた何勝手やんの！」

「だめでしょーが！」

「理由を言いなさい理由を！」

SERIEはこう答えながら、オペレーター室を後にした。

「TAGSIGNを助けに行くんです。オペレーターとして、私はTAGSIGNを助けなくちゃいけないんです！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1475w/>

mouth putting of the earth

2011年9月27日06時27分発行